323
513

始

159
323-573

倭辭典大要

芳賀矢一

大正
12. 7. 9
內交

序

一、本書は師範學校、中學校、高等女學校等の教科書或は參考書とするため、著者が曾て公にした『常識修辭學』に大訂正を加へたものであります。

一、著者が本書に於いて心がけた事は、成るべく學理的の臭味を離れて、面白く、やさしく、そして手短に、斯の學問の大體を傳へたいといふことでありました。簡易なること、平明なること、興味あること、及び實際作文上の呼吸の暗示を與へること、この四つの目的が、いくらかでも達せられるならば、著者の滿足であります。

一、本書の常識的撮要に滿足せずして、更に斯の學問の詳細を知りたいと思はれる御方は、拙著『新文章講話』(早稲田大學出版部發行)を御讀み下さるやうに願ひます。また斯の學問の知識の中等教育の作文課に於ける應用に關して參考書を望まれる御

方は、御志望の方面に從つて、それ〴〵に、『中等新作文』(至文堂發行、五册もの)『高等女子新作文』(大日本圖書會社發行、四册もの)『實業新作文』(修文館發行、三册もの)のいづれかを御讀み下さるやうに願ひます。

一、次ぎに、序文に添へて、國語國文教育の重要なる着眼點に關する小論文を添へました。修辭作文をも含んで居る國語問題解決の一案として御一讀下されば、難有う存じます。

大正十二年五月

著者

序にそへて

國語國文教育の重要なる着眼點を論ず

一

小學校から中學校、高等學校を經て大學に至るあらゆる學校を包括して、國語國文教育の大切な仕事は何かといへば、第一には、正しい國語國文の何たるかを會得させる事である。第二には、美しい國語國文の何たるかを會得させる事である。第三には、作者の思想趣味に關する背景を玩味させる事である。第四には、(物によつては)時代思潮の背景を玩味させる事である。而して最後には是等のすべてによつて、國語國文を愛重させ、延いては其の國を愛重させる樣にする事である。と、私は思つて居る。

讀む方に於いても、書く方に於いても、話す方に於いても、小學に於いても、中學に於いても、高等學校に於いても、國語國文の教育者は、まづ正しい國語國文の何た

るかを教へねばならぬ。國語の用例をよく會得させて、それに違つた不純な使ひざまや、不精確、不明瞭、不純正、不穩當な使ひざまを矯正するやうにせねばならぬ。例へば、學生が「御都合宜しいの時御宅に行きます。」と云つたならば、それは西洋人まがひの唐轉りといふもので、立派な日本語ではない、「御都合の御宜しい時、御宅に伺ひます。」と御言ひなさいと正してやるべきであらう。一寸した談話に「今次の内閣が」「それは絶對的に不可能だ。」なぞと云つたならば、必要もないのにそんな小むづかしい言葉を用ゐるものではない、「今度の内閣が」「それは迚も出來ません。」と仰しやいと云つてやるべきであらう。「お母さまが言ひました。」「先生が教へてくれます。」と云つたならば、それは禮法に違つて穩かでない、「お母さまが仰しやいました。」「先生が教へて下さいます。」といふがよい、と云ふべきであらう。若し又何かの本の中に、

季節によつて食物の選び方に多少の注意を要する。

といふ文があつたならば、これでは食物の選擇に注意を要せぬ季節もあるやうで、はつきりしない、これは「食物の選び方は、季節によつて多少かへねばならぬ。」と改む

べきで、さうすれば意味がはつきりして來ると注意すべきであらう。もし又「洪水見舞」といふやうな題に對して、

「お父さんに伺ひますと、叔母さんの町に大水が出たさうです。皆樣にお怪我も御座いませんでしたか。お見舞申し上げます。九月七日　竹子　叔母上樣

といふ風の書きざまをする者があつたならば、それでは、「父に聞くと、叔母さんの町に大水が出たといふ事だ、一緒にお見舞に行かうではないか。」と云つて、從兄弟(いとこ)でも誘ひ合はせる手紙のやうに聞えるではないか。これは「叔母さんの町に大水が出たさうですね。」と云つて、「ね」の字を加へるか、或は「叔母さんの町に大水が出たさうですが、皆樣お怪我もございませんか。」と續くべきで、さうすれば、はつきりと叔母に宛てた手紙に聞える、と注意すべきであらう。若し何處かの市長が市民に對する演說で、「私は佐藤市長であります」と云つたといふやうな事があつたならば、これは「私は市長の佐藤某であります。」といふべきで、自分の姓の後に職名を添へるのは不調法な不嗜みである。それは「乃木大將」「伊藤首相」といへば一種の敬語になつて居るのを

見てもわかることで、他人に對する敬語としては職名を姓の後に添へて結構であるが、自分の場合に、「私は乃木大將である。」「私は岩本社長です。」と云つては物笑ひでありますぞと注意すべきであらう。すべて正しい言表は、美しい磨いた言表の土臺となるべきものであるから、國語國文の教育者は、まづ正しい國語國文、正格合法の言表といふ點に着目し、讀書、作文、談話のすべてに於いて、常に學生の口辯、筆辯を正路に導き入れるやうにすべきである。

二

第二に、國語國文の教育者は美しい國語國文の何たるかを會得させねばならぬ。或談話文章が、單に意味が解る、聞に合ふ、用が足せるといふだけでなく、其の上に人の心を惹きつけて面白く美しく感じさせるのは何の爲めか、といふ事を會得させねばならぬ。例へば「うまい」といふ事を「頰が落ちさうだ。」といへば、何故面白くなるのであらう。「途中で遊ぶ。」「居睡をする。」といふ代はりに「消草を食ふ。」「舟をこぐ。」

いへば、何故面白くなるのであらう。「何時までも夜が續いた。」と云ふ代はりに「常夜往く。」といへば、何故莊嚴に含蓄が深くなるのであらう。或は芭蕉の大きい廣い葉の事を、

芭蕉は其の葉廣うして琴を覆ふに足れり。或は半ば吹き折れて鳳凰の尾をいたましめ、青扇破れて風を悲しむ。（松尾芭蕉）

といへば、何故非常に美しく面白くなるのであらう。次第不順に或は龍頭蛇尾に論據を並べれば一向詰らない論文が、漸層的に段々調子を高めて行くと、何故人を感ぜしめるのであらう。といつたやうな事を、實際の文例に就き、人の心の働き方に基いて、篤と會得させねばならぬ。抑も詩人、文章家などの骨折るところは、書く事柄の如何といふ事よりは寧ろ書き方の如何といふ事にある。唯だ忠義孝行の事を書くといふよりは、寧ろ忠義孝行の事をどういふ風に書くかといふ所にある。「梅の花の咲いて居る山の道を行くと朝日が昇つた。」と云つては何でもない、其の同じ事が、「梅が香にのつと日の出る山路かな。」と言ひ現はされると、何とも云はれぬ神韻が漂渺と現はれて

來るではありませんか。「船と船とがすれ〴〵になつて戰つた。」といへば一向詰らぬ事が、「舷々相摩す。」といへば、非常に面白くなつて人の心を躍らすではありませんか。かやうな消息によく意を留めて、讀書、作文、談話、あらゆる方面に於いて、美しい言語、文章とはどんなものか、言語、文章の美といふものはどんな所に宿るのかといふ事を教へる事、殊に文字の修飾の末に走らずして、美しい思想感情が自然に美しい文字に現はされて、始めて立派な美しい文章になる事を教へる事、是れが國語國文の教育者の第二に心掛くべき事であると考へる。

三

國語國文の教育者は、第三に、表面の機械的な文字を透して裏面内部に潜んで居る精神的の活きた消息を傳へねばならぬ。心持を傳達するほんの機械方便たる言語文字の詮索に滯らずして、其の奥の本尊たる作者の生活、趣味、心持の脈を打つて居る所を有り〳〵と見せねばならぬ。此の注意の殊に肝要なのは廢語難句の多い古文を教へる場合であらう。本來古語の古人に於けるは現代語の現代人に於けると同じ事で、一人の言ふ事書く事其のまゝが、何等の澁滯もなく他人の耳目から直ぐに心に傳はつて理解され翫味されたものであるが、其の解釋を要せぬ平明な通用語が、歳月を經る中に、いつしか苔が生え錆を生じて、不可解のものとなり、意義傳達といふ通信機械の役目を果たし得ぬものとはなつたので、こゝに廢語難句の說明といふ古人の思ひ設けなかつた中間の仕事が生じ、又其の仕事を受負ふ註解者、講釋家といふ一種の學者先生が出來るやうになつたのである。それ故、文章本來の目的から云へば、字句の解釋といふはホンの枝葉方便の事業で、譬へば言葉の本義を蔽つて居る錆を剝がすやうなもの、或は古の作家の心の泉を今の讀者の心に滯りなく注ぎ込む爲めに、中間の溝の泥や埃を浚ふやうなもので、畢竟するに、一種の溝浚事業に過ぎぬ。此の難語解釋の溝浚事業に澁滯し、跼蹐し、滿足して、それ以上に進まぬといふのは如何にも不思議な事であるが、今の世の國語國文教育といふものは、世界に通じて多くは此の流儀によつて居るらしく見えるので、をこがましながら一言を試みたいと思ふのである。

文學の批評に低級批評、高級批評の二種があるとも云へる。低級批評といふは語句出典等に關する機械的解釋の事てある。高級批評といふは精神的の内奥に立ち入つた批評で、作者の趣味、性格、人生觀や時代思想の現はれた趣などを研究する方面をいふのである。此の兩面の批評は、無論それ〴〵に必要であるが、しかしながら第一に大切なのは内面の意義を説明する高級批評で、語句出典の低級批評は唯だ高級批評を成立たせる爲めの準備として價値のあるものである。例へばこゝに一人のお母さんがあつて、幼い子供に向つて、

坊やは大層大人ちいからお八つにはおいちい御菓子を上げませうね。

と云つたとする。此の文を構成する言葉の中には多少解釋を要するのもあらう。又其の一々に面白い解釋を附け得るかも知れぬ。又、百年二百年後には委しい註解が必要にもなるであらう。例へば「坊」は、もと町割、土地の區劃の事で、それが轉じて僧坊の事に用ゐられ、再轉して僧坊に住む坊さんの事に用ゐられ、三轉して子供が小さい時に髪を剃つて居る所から、子供にも適用される事になつた。「坊や」の「や」は愛撫

の甘やかし詞である。「大人ちい」は、「大人らしい」といふ事で、「大人」といふ名詞を形容詞的に働かしたもの、そして「しい」をば更に「ちい」といふ舌足らずの小兒語にして愛撫の氣分を現はしたのである。「お八つ」は舊幕時代の時間制の名殘の言葉で、今の午後二時頃の事、丁度晝食夜食の中間で腹の空く時分であるから、一寸した食物をやる、それを時間で現はしたのである。「お」は上品に嗜みを現はしたのである。「御菓子」はもと果物の事であつたが、徳川時代に入つてから、言葉の間に分業が起つて果實をば果物といひ、餅菓子煎餅式の甘いものをば菓子といふ樣になつた……。と、こんな事を並べれば限りなくあるであらう、而してかやうな博識臚列は存外面白いものである。けれども斯樣な博識並べが唯だ博識並べたるに止まつて、子供に美味を與へようとする母親の慈愛、子供のにこ〳〵顔に天地にも換へられぬ悦びを感ずる母親の心持、それをうまく自然に現はした此の文章の趣味、これを活き〳〵と傳へないことでは、百千の博識臚列も更に効能がないではありませんか。今の國語國文教授に、もしかやうな弊が有るならば、誠に由々しき大事であると、私は思ふのであります。

語句出典の解釋は無論必要な事でもあり、大切な事でもある。唯だ、低級批評をして低級批評の地位を守らしめるやうに、而して謹んで內奧說明の高級批評に臣事せしめるやうに。私の希望するところは此處にある。

四

內面批評を第一義とする事に因んで、玆にもう一つ添へて言ひたい事がある。それは文章の解釋振、講義振についてであるが、私が僅かな中學校、小學校で見學した所、又聊か聞き嚙つた所によると、今の我が國に於ける書物の講釋といふものは、小學、中學、大學に通じ、又邦文、外國文に通じて、切れ〴〵に刻み〴〵語句出典を解釋しつつ、一端から他端に押し進んで行くだけで、難語片つけの溝渡が濟んだ上で、更に本筋を引纏めて一氣に講じ進むといふ事がないらしいやうに見える。そも〳〵文章、殊に文學的の文章は、文字の底に流れて居る思想を、傍目(わきめ)も振らず一氣に讀み進んで、始めて面白く活かして味はひ得るものであるのに、分析があつて綜合がなく、粒々の註釋があつて生氣直往、一氣呵成の、命を吹き込む講義がなくては、どうして生きた文章を活かして敎へることが出來ませう。大昔は知らず、德川時代の儒者の講釋といふは此の二つを兼ねたものであつたと聞いて居る。心學道話などは、あの通り、講釋其の物が一種の藝術になつて居るものであつた。今日の我が國にも、無論二者併進の周到な活きた講釋を試みて居られる方もあるであらうが、寡聞の私は唯だ一二の除外例を知つて居るだけなので、これも、をこがましながら蕪言を呈して獻芹の微衷をいしたいと思ふのである。

五

國語國文の敎育者は、第四に小さい個人の作と「國」「時代」といふ大きな活物の生活との間に有機的關係を見出だして、其の文章が如何なる點に於いて時代の思想を暗示して居るかを味ははすべきである。是れは勿論文章の品によることで、數多の中には、作家の心持を味はつただけで足るものもあらう。或は作家の特別な心を味はへる迄も

なく、普通人の一般感想を書いたものとして、あつさりと見て十分なものもあるであらう。又中には意味だけ解ればそれで十分といふものもあるであらう。けれども一時代に於ける代表的作家の代表的作物になると、殊に或一種の文學の最初のもの、若しくは最善のものになると、其の中に自然に時代との直接な交渉の現はれて居るのが常であるから、之れを講ずる人は、成るべく二者の間の有機的交渉を見出だして之れを味はゝすべきである。かくして各〻の文章が始めて坐るべき場所に据ゑて玩味せられるわけで、此の交渉を附けずに文章を見るのは、譬へば法隆寺を日比谷に置き、奈良の大佛をサハラの沙漠に轉がして見るやうなものである。

斯樣にして國文に於ける國文特殊の面白さを味はひ、各作家の作について各作家特殊の手振を味はひ、各時代の思潮に對する有機的交渉を味はひ、殊に各個人各時代の作物が、それ〴〵止むに止まれぬ必然の運命に導かれて、他とは紛れぬ個人振、國振、時代振の姿を現はして居るのを感得するやうになれば、善いにつけ惡いにつけ、とにかく國語國文といふものに一種の愛着を感ずるやうになるべく、從つて其の國にも愛着を感ずるやうになるであらう。是に至つて國語國文教育の使命は始めて完うされたと云はるべきである。

六

以上は國語國文教育の着眼點に關する私の意見の概略であるが、斯樣な問題の取扱きに、空言は一向益の無い事であるから、左に一二の實例を擧げて、吾等の謂はゆる高等批評の味はひを說明して見たいと思ふ。

假りに或讀本若しくは古文學の抄本を開いて、『保元物語』の中の、鎭西八郎爲朝が左府賴長に夜討の謀を進める條を讀むとする。其の中に次ぎの樣な一節がある。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目かど二つ切れたるが、紺地に色々の糸をもて獅子の丸を縫ひたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て縅したる大荒目の鎧、同じく獅子の金物打ちたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて鈌打ちたるに三十六差したる黑羽の矢負ひ、

兜をば郎黨に持たせて歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えて由々しかりき。謀は張良にも劣らず、されば堅陣を破ること吳子孫子が難しとする所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始めまゐらせて、あらゆる人々音に聞ゆる爲朝見んとて舉り給ふ。

字句出典の解釋については、「獅子丸」は圖按した獅子の模樣である事から、直垂の事、尻鞘の事、鈥の事、樊噲、張良、吳子、孫子、養由の事と、いろ〳〵あるであらうが、それが一通り濟んだ上で、文章の面白味としては、先づ此の文章の力のある强い調子が保元の亂第一の大立者、十五歳にして九州を討ち平らげた餘威に乘じ、武人興隆の運命を双肩に擔ひつゝ無位無官の身を以て滿廷の公卿殿上人と左大臣賴長と崇德上皇との前にのさばり出でた一代の勇者の面目を寫すに適して居る事、此の勇者を寫すに、先づ見上げるばかりの大男であるといふ身體全體の概觀を寫し、次ぎに身體の中で第一に目の附く顏、顏の中で第一に目の附く、人間第一の活かし所たる眼の特色を寫し、それから身についた直垂、鎧、太刀、弓矢、つゞいて身を離れた兜を叙して樊

噲に比べた所が、一糸亂れずに順序が立つて、此の英雄兒の面目を有り〳〵と眼前に具現せしめて居る事、作者の魂がすつかり爲朝に打込んで一々の文字が飛躍して居る事などを擧げ示すべきであらう。最後に、時代思想の現はれた趣としては、當時は公卿の天下が武人の天下にならうとする過渡の時代である。文藝本位の世が武力本位の世にならうとする過渡期である。平安朝のなかば以來、武人は漸次に實力を養つて來たが、彼等は實力が有りながらまだ公卿の侍たり臣僕たり爪牙たる地位に甘んじておとなしく公卿の前に俯伏して居た。彼等が實力を備へながら、それを自覺せずして、藤原氏に仕へてゐた有樣は、譬へば睡つた獅子が背の上に雛人形を乘せて居たやうなものであるが、保元平治の大亂はすつかり獅子の目を覺まして背上の人形を振り落させ、やがて武人の天下となつて將軍政治が布かれるやうになつたのである。平安朝四百年の太平の夢が破れて、軈て保元の大亂が起らうといふ其の當夜に、剛勇無双とはいひながら、地下の中でも無位無官の、而も十七歳の小冠者鎭西八郎爲朝が、左大臣の前に出で、剩へ上皇の御目に懸かるさへあるに、其の上皇を始め奉つてあらゆる公卿

殿上人が、八郎頼もしやと拜まぬばかりに首を伸べて擧つて居るとは、世の中も變はつて來たものである。無意識の中に當時の武人を代表してゐた爲朝は、垂れたる首を揚げて此の樣子を見た。彼れは、もう天下は己れのものだと思づたであらう。

上皇を始めまゐらせ、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見んとてこぞり給ふ。

簡單ではあるが、公卿の世が武人の世にならうとする大勢推移の消息を力强く暗示して居るではありませんか。而して此の一寸した四五行數十字の中に大日本六十餘州の形勢の一變する機微を讀む事は、斯樣な文章を讀む者に取つて最も大いなる喜びではありませんか。私が時代思想の背景を玩味させるといふのは、たとへばかやうな意味で、又かやうにして古事記に神代を讀み、萬葉に奈良朝を讀み、謠曲に室町を讀み、近松、西鶴に元祿を讀み、馬琴に文化文政を讀み、福澤翁に維新を讀み得る事と思つて居るのであります。

七

序にもう一つの例を擧げると、平安朝の初めから藤原氏が外戚の威を借りてあれだけの我儘をひろげ、淸盛がまた外戚となつてあのやうに跋扈を極めたが、天子の外戚となり、岳父となり、祖父となるといふ事は、抑もどれ程に嬉しい事であらうか。かういふ事の味ひは、文學でなければ傳へ得ぬ事であるが、『紫式部日記』に、道長の女彰子が皇子を生んだ時に於ける道長が歡天喜地の有樣をこんな風に寫して居る。

殿(道長)の夜中にも曉にも參りつゝ、御乳母の懷を引きさがさせ給ふに、うち解けて寢たる時などは、何心もなくおほほれて驚くもいと〳〵をかしく見ゆ。心許なき御程を、我が心をやりて、さゝげ愛しみ給ふも道理にめでたし。ある時はわりなき業しかけ奉り給へるを、御紐引き解きて、御几帳の後にてあぶらせ給ふ。

「あはれ此の宮の御尿に濡るゝはうれしきわざかな。この濡れたるあぶるこそ思ふやうなる心地すれ。」と悅ばせ給ふ。

「まだ生れたてのたわいもない御子樣を、自分ひとり心をやつては可愛がつて居られた。或時は皇子がお小便などをしかけなさると、關白の太政大臣殿が、濡れた御袍の紐

を解いて、几帳の後で手づからあぶらせられる。そして「此の宮様の御尿に濡れるのはうれしい事である。此の濡れた着物を焙ることこそ愉快の上の愉快である。」と云つて悅ばせられた。」といふ事であらうが、天子を婿に持ち、而して我が女がその皇子を產み奉つた時の嬉しさは誠に斯うもあるであらう。此の面白さは大日本史や、本朝通鑑や、日本外史や、乃至其の他の歷史家の歷史などの、とても與へ得ぬ所で、我々は此の才女の文章に於いて、藤原氏の榮華の消息の最要點をまざ〳〵と見せられるやうな心地がするのである。

其の中に道長の屋敷へ天子の行幸がある。其の時に道長の悅んだ樣子を寫して斯う云つて居る。

御前の御樂はじまりていと面白きに、若宮の御聲うつくしう聞え給ふ。右の大臣(顯光)「萬歲樂御聲に合ひてなむ聞ゆる。」と持囃し聞え給ふ。左衛門の督(公任)「萬歲樂、千秋樂」ともろ聲に誦して、主人の大臣殿(道長)「あはれ前々の行幸を、なほど面目ありと思ひ給へけん、かゝりける事も侍りけるものを。」と醉ひ泣きし給ふ。

「前々の行幸親臨を難有い事に思つて居たが、我が娘が皇子を生み奉つた所へ、行幸を仰いだ悅びに比ぶれば、物の數でもない。」と云つて醉ひ泣きしたといふのである。面白いではありませんか。かういふ文章を、どうして時代の背景に思ひ寄せず、人生に關する深い考慮なしに讀まれませうか、また讀ませられませうか。

轉じて『平家物語』を見ると、淸盛の女の中宮德子が安德天皇を產み奉つた時に淸盛の悅んだ樣子を寫して、斯う書いて居る。

御產平安のみならず皇子にこそ坐しけれ。本三位中將重衡卿、其の時は未だ中宮亮にて坐しけるが、御簾の中よりつと出でて、「御產平安、皇子御誕生候ぞ」と、高らかに申されたりければ、法皇を始め參らせて、關白松殿、太政大臣以下の卿相雲客……堂上堂下、一同にあつと喜び合はれける聲は、門外までもとよみて、暫しは靜まりもやらざりけり。入道相國嬉しさの餘りに聲を揚げてぞ泣かれける。悅び泣きとは之れをいふべきにや。

吾等は此の場合の清盛の悦び泣きに於いて、誠に平家の榮華の絶頂に達した心持を味はひ得るやうな心地がする。武人として天下を取つた平家が、平安朝の公卿文明を眞似、平安朝四百年に於ける藤原氏の榮華を二十年に煎じつめて實現した心持は、此の短い一節に於いても味はゝれるではありませんか。而して又藤原氏を通し、平家を通して、歡樂の杯を飲み干した人間の悦びながら泣く深い精神的消息を十分に味はひ得るではありませんか。

かやうな作品に接して、時代思想に關し、一般人生に關する、かやうな意味の深い消息を味はへる者は、公卿や武人を好むと好まざるとにかゝはらず、道長や清盛を憎むと憎まざるとにかゝはらず、自然に國語國文を愛重するやうになるであらう。從つて自然に其の國をも愛するやうになるであらう。私は國語國文を教へる者の最後窮極の目的は、どうしても此處に置かねばならぬと思ひ、而して是れは、小學に於いても、中學に於いても、高等學校に於いても、大學に於いても、變はるところがないと考へて居る者であります。（をはり）

總目次

序……一
國語國文教育の重要なる着眼點を論ず……一
第一部　基礎篇……一
一　人知れぬ苦心……一
二　附け損ねの修飾、なりそこねの名文……二
三　曲をうつは易し、滿足にうつは難し……四
四　病人の劍術沙汰、泥棒の慈善沙汰……五
五　思想を文字に表はしたるもの卽ち文章……七
六　先づ思想を成せ……九

七　第一に精確なれ……一〇
八　語の關係を明らかにせよ……一三
九　第二に明瞭なれ、解り易かれ……一六
一〇　相手を見て法を說け……一七
一一　通俗なる語を用ゐよ……一九
一二　簡易なれ……二一
一三　周到なれ……二四
一四　何人にも解り易くせよ……二七
一五　秩序あらしめよ……二九
一六　聯絡あらしめよ……三一
一七　統一あらしめよ……三三
一八　主格の統一あらしめよ……三五
一九　文の相を整へよ……三七

二〇　第三に純粹なれ……三八
二一　其の國の語を用ゐよ……四〇
二二　其の時代の語を用ゐよ……四二
二三　遍通の語を用ゐよ……四四
二四　品のよい語を用ゐよ……四六
二五　全體を調和せしめよ……四七
二六　第四に穩當なれ……四八
二七　不穩當と穩當と……五二
二八　穩當なる文字……五八

第二部　文飾篇……六一

一　修辭の本領……六一
二　修飾の効力……六三

三　文章修飾の三原則……五五
四　調和の原則……六六
五　結體の原則……七〇
六　增義の原則……七四
七　譬喩三式……七八
○直喩法——隱喩法——諷喩法
八　人化と物化……九一
九　省略的修飾……九八
一〇　斷叙法……一〇四
一一　舉隅法……一〇七
一二　隔離的叙述……一一一
一三　重義的修飾……一一四
一四　懸詞法……一一六

一五　引用的修飾……一二一
○一六　引用法……一二四
一七　隱引法……一二七
一八　映原的修飾……一二九
一九　換骨脫胎……一三四
二〇　反覆的修飾……一四〇
二一　頭韻法……一四一
二二　脚韻法……一四四
二三　連鎖と對偶……一四七
二四　對偶法……一五一
二五　反覆の利弊と避板の方法……一五六
二六　平板……一六〇
二七　避板法……一六二

二八 對照的修飾……一六八
二九 對照法……一六九
三〇 抑揚法……一七〇
三一 漸層法……一七一
三二 頓降法……一七五
三三 情化的修飾……一七六
三四 誇張法……一七九
三五 現寫法……一八四
三六 換姿的修飾……一八八
三七 倒裝法……一八九
三八 設疑法……一九〇
三九 咏嘆法……一九二
四〇 問答法……一九四

四一 逆語法……一九七
四二 反語法……一九八
四三 警句法……二〇〇
四四 擬態法……二〇三
四五 招呼法……二〇四

第三部 組織篇……二〇六

一 修辭學と美辭學、文章學……二〇六
二 修辭學の中心要素……二〇七
三 文法的要件と論理的要件……二〇九
四 四個の基礎的要件、其の他……二一一
五 修飾論と詞姿……二一三
六 おもなる詞姿……二一四

七　詞姿の眞意義……二九
八　文體、その八方面……三一
九　用語の多少選擇より見たる文體……三三
一〇　漢文の文體と國文の文體……三六
一一　散文の四種別……三八
一二　文章組織の段取……三〇
以上

目次終

修辭學大要

五十嵐力著

第一部　基礎篇

一　人知れぬ苦心

いつぞや、イギリスのアームストロング會社で大砲を造る所を實見した人の話を聞いたことがある。砲身はどうして造るか。素人考では、鐵を砲だけの太さに鑄て、表面を滑らかに敲いて、中に穴を開けさへすれば、立派に砲身が出來あがるやうに思はれる。けれども實際はなかなかそんな手輕なものではない。まづ精良なる鐵を以て砲身を鑄る、次ぎに其の砲身を強い火にかけ、眞赤になるのを待つて、太い丈夫な鋼鐵の鎖を捲きつける。砲身が柔かになつて居るゆゑ、鎖は締めるに從ひ、次第に喰ひ込んで砲身の表面と平らになる。そこを見計らつて砲身をさまし、敲

きに敲いて緻密に堅めて磨きをかけたもの、卽ち砲身である。若し此の鎖を入れなければ、一回の發射に砲身は忽ち割れ碎けてしまふといふ。

素人の餘所目には、唯だすべ〳〵した太い鐵の棒としか見えぬ砲身にも、內部には丈夫な鎖が隙間なく入つて居る。文章もまた〳〵其の通りである。古人の名文を讀む者は、そのすら〳〵と口調よく整つて居るのを見て、わけの無い仕事のやうに思ふであらうが、そのわけもなく苦なしに見える文の內部には人知れぬ苦心の鎖が入つて居る。而して其の苦心の第一は文を正しく疵がなくすることであつた。正しく疵がなくすることは文章の基礎である。故に美文名文を書かうと思ふ者は、まづ其の準備として正しい文章、疵の無い文章、達意の文章が書けるといふ土臺を固めねばならぬ。地形の礎が固くなつて、始めて安全な家が建つのである。正しい文章が出來て、その上に始めて美文名文の花が咲くのである。

二　附け損ねの修飾、なりそこねの名文

或中學校の卒業生が、「中學生活の回想」といふ課題に應じて作つた文の中に、次ぎの文句があつた。

今や、吾人の現狀より、人たる者の經歷に深く研究の步度を運び來たる時は、眞か僞か善惡悉く雲合し、一體の現象を呈出して、造化の眞髓妙はた奇に至つて止む。仰げば風雲際會して一路の明、今何處にか求めむかと案ずるの時、東天暗を破りて吾人を導く者は、抑々五尺の小軀に隱蔽せられたる一寸の赤心に作用する魔力の、時に陰時に陽たるの如きか。

某縣師範學校の卒業式にある名士の朗讀した祝文の一節に、「知識は正皓を失し、禍福を超脫し、人材出沒す。」といふ句があつた。某村長が農學校の開校式に讀んだ祝文の中に、次ぎの文句があつた。

春風天々春雨札々の候……學校開校式を擧ぐ。何の幸か之れに如かむや……夫れ農は國を富ますの本也。軍備角張も之れに起烟す。信なる哉信なる哉、聊か無事を述べて豈に夫れ祝詞を買ふと爾云也。

名文は凡べての人の書きたいと願ふ所であるが、文を正しくする方の基礎を固めずして、漫りに名文にあこがれると、なり損ねのお化文章が出來上がる。形容修飾は文を美にする道具ではあ

るが、用る方其の宜しきを得なければ、却つて識者の物わらひになる。くれ〴〵も文章は先づ正しくなければならぬ。正しい文章にいろ〳〵の形容修飾が加へられて、始めて名文といふものが出來あがるのである。

三　曲をうつは易し、滿足にうつは難し

ひねくれた、氣取つた文を書くのは必ずしも難くない、書き易からぬのは、寧ろ滿足な正しい文である。元祿の頃、大阪に坂田藤十郎といふ名優があつた。彼れは若い時分に小皷の名人ほねや庄右衛門といふ者について小皷を習つた。或時道頓堀に勸進の能があつて、庄右衛門は三番目を打つたが、別に上出來といふでもないらしく、見物に感心の樣子も見えなかつた。藤十郎口惜しく、早速師匠をたづねて不平をいふと、庄右衛門は微笑して一言の辯解もせず、たゞ「さうか、それではどうぞ明日のを聽いて下さい。」といふ。さて翌日行つて見ると、其の日はまたすばらしい出來ばえで、滿場水を打つたやうに感に入つて居る。藤十郎狂喜して、舞臺がすむとまた師匠をたづねて喜びをいうた。其の時の庄右衛門の答が面白い。「世の俗物には仕方がない。初日には褒められようといふ欲は全く離れて滿足に打つたが、褒め手が無く、今日は褒められようと思つて曲を打つて見せると、ヤンヤと囃す。褒めさせるやうに曲を打つは易いもの、滿足に正しく打つは難いもの、汝等初學者はよく此處を辯へて俗受に誤られず、どこまでも滿足に正しく打つやうに心がけねばならぬぞよ。」と語つた。藤十郎は此の言を服膺して、遂に日本第一の名優になつた。

文章も亦その通りで、曲は正しきを得て後の慰みである。大家が面白をかしい文章〻書いたとて、直ちに之れを眞似ようと思ふのは、美人の顰めッ面を人の褒めるのを聞いて、醜女の之れを眞似るのに異ならぬ。

四　病人の劍術沙汰、泥棒の慈善沙汰

然らば正しい滿足な文章とは何ぞといふに、之れを知るには、先づ文章の目的を知らねばならぬ。文章の最初最大の目的は我が思想を他人に通ずるにある。卽ち思想の運搬器になるといふ事が、日記、手紙、受取證等の單純なるものより、論文、詩歌、小說、戲曲等の込み入つた作に至るまで、文章といふ文章の全體に通じた目的で、此の目的を達し得る文章にして始めて存在の値打

がある。書いた事の意味がわからぬやうなものは、唖の手眞似にも劣る。文字を並べたといふだけで文章とはいはれぬ。

思想を他人に傳へるのが文章第一の目的である所から、「思想の明寫」といふ事が正しい文章の第一に具ふべき資格となつて來る。次ぎに、他人に讀ませるものである以上は、讀む人を厭がらせぬだけの用意が必要である。卽ち人を喜ばせる、感心させるといふまでには至らずとも、少なくとも人の氣をわるくし、眉をひそめさせることの無いやうにせねばならぬ。此の目的に合はせるには、言ひ表はし方を立派に穩かにせねばならぬ。此の理由により、「言表の穩健」といふ事が正しい文章の第二に具ふべき資格となつて來る。

「思想の明寫」「言表の穩健」—この二つは、文章といふ文章の必ず具ふべき資格である。此の二大資格を具へれば、名文とはいはれずとも正しい滿足な文とは云はれる。そして之れを具へたる上、更に一歩を進めて、玆に始めて立派な名文が出來あがるのである。

病人は激しい運動に堪へぬ。擊劍柔術を稽古するには、少なくとも先づ無病健康の身體を有たねばならぬ。惡事を爲しながら聖人君子にはなれぬ。君子聖人となるには、少なくとも先づ罪の

ない、心の淸い人とならねばならぬ。文章に於いても其の通りである。「思想の明寫」「言表の穩健」、此の二個條さへも滿足に爲遂せずして名文を書かうとするのは病人の劍術沙汰、盜賊の慈善沙汰である。

五　思想を文字に表はしたるもの卽ち文章

文章を學ぶ者は、まづ文章の何たるかを知らねばならぬ。然らば文章とは何であるか。

昔羅馬の偉い宗教家にして哲學者であつたセント、オーガスチンといふ人が、曾て人の問に答へて、「時とは何かと、改まつて御尋ねなされば、私は知りませぬ、しかしながら、御尋ねなさらねば私はよく知つて居ります。」といふた事がある。世には腹の中では、何となくよく知つて居る事でも、改まつて聞かれると說明の出來ぬ事が少なくない。文章なども其の一つであらう。文章の定義についてはいろ〳〵の說があらうけれども、一通りの定義としては「思想を文字に表はしたもの」といふてよい。思想とは纏まつた考をいふ。卽ち文章は纏まつた考を表はしたものでなければならぬ。例へば、猫、犬、負、試驗、及第、遊、愉快、といふやうな事が如何ほど澤山、心

の中に在つても、それは唯だ一個々々の念であつて思想ではない、從つてそれを並べただけでは文章とはならぬ。それが文章になるには「猫は犬に負ける。」「試驗に及第して後に大いに遊んだら愉快だらう。」といふ風に、取り纏められて思想とならねばならぬ。しかしながら、思想というても心の中で考へて居るだけでは、まだ文章ではない、それが文章となるには言語に表はさるゝことを要する。思想の現はし方にいろ〳〵ある。畫家は繪具を材料として其の思想を紙や絹の上に表はし、彫刻家は木石金玉に、音樂家は管絃絲竹に、其の思想をあらはす。而して文章は纏まつた考即ち思想の文字にあらはれたものである。文字上の詮義をすると、「文」はあや、「章」の字は「音」「十」二字の合併で、音樂の終りまで、例へば「君が代」から「苔のむすまで」に至るまで纏まつたものといふ意、即ち文章とは「文があつて完了した一體」といふ意である。英語の Composition は「一緒に置く」といふ事、即ち言語を一緒に組み合はせて完全に思想を表はすといふ意味である。

「思想の明寫」といふ事が、何處から見ても、文章に一番大切な要素で、從つて正しい文の第一に具へねばならぬ資格である事は、これを見ても解るであらう。

六　先づ思想を成せ

思想を明らかに寫すといふ中でも、先づ第一に必要なのは、明らかに知つて居る事を書くといふ事である。書くだけの事は、心の中で十分に考へ纏めて、さて後に筆を執れといふ事である。十分に理解して居る事ですら、明確に書き表はすのがむづかしい。まして一知半解の事の明らかに書けるわけがない。かういふと如何にも餘計な不要な御世話のやうだが、なか〳〵さうではなく、これこそ文章道踏み出しの第一着歩なのである。言葉の意味を間違ひなく知ることが已にむづかしい、思想を纏めることが更にむづかしい、その纏めにくい思想を間違ひ易い言葉に表はすことの困難なのは當然の事であらう。曾て或る專門學校の入學試驗に「草昧」といふ語を解して「草薙の劍」と答へたものがあつた。「三種の神器とは何ぞ」といふ問に對して「槍、鐵砲、薙刀」と答へた者があつた。「五大洲とは何々ぞ」と問はれて「日本、唐、天竺、地獄、極樂」と答へた者かあつた。作り話のやうだが事實である。かういふ人が意味を成さぬ文を作ることは、必ずしも怪しむべきではない前に擧げた某名士の「禍福を超脱し、人材出沒す。」なども、思想を成さぬものの一つである。

思想を成さぬ文は、たゞ文字の集合といふだけで、文章たるの資格なきもの、謂はゆる箸にも棒にもかゝらぬものである。

七　第一に精確なれ

思想を明らかに寫すについて、第一に必要なのは意味の紛れず誤解されぬ事である。文義の誤解されず、紛れぬやうにする事を精確といふ。精確は基礎の中の基礎である。

文義を精確ならしめる爲めに注意すべきことが凡そ二個條ある。

第一　意義の紛れぬ語を用ゐること。

第二　語の關係を明らかにすること。

文章を組み立てる材料の中で、最も單純なるものは個々の語である。個々の語を結びつけて句を成し、文をなし、節をなし、章をなし、篇をなす。故に文義を精確にしようと思はゝ、先づ其の用語の一つ〳〵を精確にせねばならぬ。之れについて注意すべき事は、成るべく意味の狹く限られた語を用ゐるやうにし、又意味の二通り以上に取られる曖昧語を用ゐぬやうにする事である。

意味の狹く限られた語とは、例へば、物といふよりは生物といふ方が狹く、動物といふ方が更に狹く、人といふ方が更に狹く、東洋人といひ、日本人といひ、實業家といひ、農業家といひ、大地主、小作人といふ方が、更に狹い。而して「彼れは人なり」「實業家なり」と廣くいふよりは「大地主なり」「小作人なり」と狹く限る方が紛れる氣遣ひがない。意味の二通り以上に取られる曖昧語とは、例へば「故人」といふ語は「友人」の意にも「歿くなつた人」の意にも取られ、「慊焉」が飽き足る意にも飽き足らぬ意にも取られ、「恙」が無事なる事にも無事ならぬ事にも用ゐられる類ひをいふ。而して「故人」といふよりは「友人」といふ方が精しく、「慊焉」よりは「飽かず」といふ方が誤解されぬ。「何日さき」「何日あと」などいふ語が過去にも將來にも用ゐられ、「西土」といふ語が支那の事にも西洋の事にも用ゐられ、「ひこ」といふ語が孫の事にも曾孫の事にも用ゐられるなど、皆曖昧語である。名高い西行法師の鳴立澤の歌、

心なき身にもあはれは知られけり鳴たつ澤の秋の夕暮。

の如き、「心なき」は「愚かなる」といふ意にも、「世を捨てた欲念のなき僧侶の身」といふ意にも、「無慈悲なる」といふ意にも取れば取られる。「鳴たつ」も「飛び立つ」の意にも取られ、「ションボリ

と立つて居る」意にも取られる。尤も歌道に深く達した人には、おのづから爭はれぬ作者の意味が解らうけれども、考へ樣によつては、かやうにいろいろの意味に取られぬこともない。而してかやうに種々の意味に取られる所が、取りも直さず讀者を迷はすので、これが若し、紛れなく一種の意味に取られて而も餘韻があるならば一層の傑作となるべき筈である。

『徒然草』の百八段に、かういふ文がある。

一日のうちに、飲食、便利、睡眠、言語、行歩、やむことを得ずして多くの時を失ふ。其の餘りの暇いくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益の事をいひ、無益の事を思惟して時をうつすのみならず、日を消し月を亙りて一生を送る、尤もおろかなり。謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲の思を觀ぜしかば、惠遠白蓮の交をゆるさざりき。暫らくもこれなき時は死人に同じ。光陰何のためにか惜しむとならば、内に思慮なく外に世事なくして止まむ人は止み、修ぜむ人は修ぜよとなり。

「これなき時」の「これ」とは何か。古人の說にも、或は「飲食便利等の無益の事なき時は死人に同じとなり。」と解し、或は「此の覺悟を失ふ時は死人に同じとなり。」と解して居る。要するに「これ」といふ語の指す所が不精確で、作者の眞意をはつきりと人に傳へ得ぬのである。

八　語の關係を明らかにせよ

個々の語が相連つて句をなし文をなし節を成す。故に個々の語を精確にするに次いでは、語と語との關係を精確にせねばならぬ。語と語とがよく組み合つて相互の關係が精しく解るやうに、無關係なる語を挿まぬやうに、關係の附け方に手落の無いやうにせねばならぬ。

服部嵐雪といふ名高い俳人の句に、

布團着て寢たる姿や東山。

といふのがある。何でも無いやうで、よく考へると怪しい。京都の東山が人の布團をきて寢た姿に似たといふことか。人の寢姿が東山に似て居るといふことか。どちらにも取れぬことはない。而して是れは要するに「や」の字が前句と後句との關係を精確につけ得ぬためである。どちらに取つても名句たるに累ひは無いかも知れぬが、人を迷はすのは決して褒めたことではない。

高等師範學校が其の卒業生に與へた教員免許狀の裏書に左の文がある。

日本帝國臣民にあらざる者に對しては本免許狀は私立學校に就いてのみ有効とす。

驚くべき惡文で意味が殆んどわからぬ。第一「日本帝國臣民にあらざる者に對しては」といふのは免狀所有者の教員に對していふことか、教へを受ける生徒に對していふことか、卽ち此の免狀所有者が外國人なる場合には、といふことか、日本人ならぬ外國人に教へる場合には、といふことか、精確でない。第二に「私立學校に就いてのみ」とは、何處の學校か。日本の私立學校か、外國の私立學校か、精しくない。此の文の意味を尋ねたのは、此の免許狀の所有者で、支那へ行かうといふ人であつたが、さういふ人にこんな疑ひの起こるのも無理はない。無類の惡文であるのみならず、人迷はせの罪な文章である。

柳亭種彦が『郡鄙諸國物語』に左の文がある。

有志の面々を數十人附けたまふとも若輩なる某がいかでか下知に從ふべき。さある時は助けにならず。

若士（わかさむらひ）が賊徒退治の命を受けた時に、君から助けの兵を與へようといはれたのに對し、其の兵士等が年若き某の命令に從ふまいから、却つて手足まとひであるといつて、辭退した所であるが、

此の文面では「私が其の者等に從ふことは出來ぬ。」といふ意にも取れさうである。「いかでか若輩なる某の下知に從ふべき。」とすれば、紛れぬやうになるであらう。

尙ほ文義を精確にするには濁音符（にごりてん）をつけ、句讀（くとう）を正しく施すことも必要である。我が國には濁音符をうたぬ人が多く、國學者などの中には濁音符をうたぬことを主義として居る人すらある。句讀法もまた實に亂雜を極めて居る。短册、色紙、額、掛物などの如き美觀を裝ふ必要のあるものには、多少の除外例もあらうが、普通の文章に於いては符號、句讀を正しく用ゐて文義を精確にすべきであらう。俗歌に、

花か、蝶々か、蝶々か、花か、來てはちら〳〵迷はせる。

といふのがある。本來は「花だか蝶だか、見わけがつかぬ。」といふ意味であるが、今は多く讀みちがひして「花が蝶々か、蝶々が花か」と歌うて居る。その他、

ベンケイナキナタヲモツテナムシハクムシノタイシヤウナリ

の「辨慶、薙刀を以て、汝は源氏の大將なり。」といふのを「辨慶な、木なたを以て、菜蟲は毛蟲の大將なり」と讀んだといひ、或はチチカメイトニユク（父龜井戸にゆく。）とかけた電報を「父

が冥途にゆく。」と讀んだといふ話があるが、是等の誤解は大抵句讀と濁音符とを正しく付けることによッて除かれるであらう。

文義を精確にするのは易いやうで難い。不精確なる言ひ表はし方は初學素人の文にあるのみならず、專門名家の作にもある、日常の瑣事を書いた文にあるのみならず、社會國家の大事を書いた文にもある、人の財産生命に關する大事件を書いたのにもある。輕々に看過すべきことではない。

九　第二に明瞭なれ解り易かれ

思想を明らかに寫すについて第二に必要なのは解り易く書くことである。之れを明瞭といふ。解り易くするには、先づ精確なるやうに、卽ち意味が紛れず誤解されぬやうに書かねばならぬが、紛らはしからず誤解されぬ文が必ずしも解り易いとは限らぬ。理窟上は精確なる文でも、或は難字難語があり、或はくどく、廻り遠く、或は振れこゝらけ、或は略し過ぎ詰め過ぎてある爲めに、解り惡いのもある。而して、若し、文章の目的か、多くの人に滯りなく我が思想を傳へるといふ事に在るならば、又頭痛の心配なく無駄な時間をつぶさせずに我が意を會得せしめるといふ事に在るならば、其の精確なるが上に明瞭なるを要するのは云ふまでもない事である。

無論、解り易い文章必ずしも名文とはいへず、解り惡い文章必ずしも惡文とも限らぬ。經典或は古名家の文章などには、非常に解り惡いながらに、千古の大文章と稱されて居るのもある。けれども、是れは古文に對し、或は偉人の大思想を寫した文章に關していふべきことで、平凡なる文章或は稽古中の文章などに關していふべきことではない。普通の場合には、普通の人が頭を痛めずに解り得ぬ文章は、讀ましめる權利がなく又讀むべき義務のないものである。

一〇　相手を見て法を說け

聽手なしに法は說かれぬ。相手があつて書く文章である。故に文を書くには、常に相手を見て其の者相應に解るやうに書かねばならぬ。御釋迦樣に向かつての話ならば、花を拈ツて微笑でも間に合はう。孔子樣に見せるのならば、一字によつて十字の御察しを乞うてよいかも知れぬ。けれども、孔子釋迦ならぬ普通人或は子供などに見せる文ならば、普通人相應、子供相應の手加減を

要する筈である。徒らに高尚な事をいへば、猫に小判の愚を演ずるのみならず、思ひ設けぬ自他の不幸を惹き起こすことさへある。

『徒然草』に高野の證空上人が佛教上のむづかしい術語で馬方と口論した滑稽話がある。

證空上人京へのぼりけるに、細道にて馬に乘りたる女に行きあひたりけるが、口ひきける男惡しく牽きて、聖の馬を堀へおとしてけり。聖いと腹あしく咎めて、こは稀有の狼藉かな。四部の弟子はよな比丘よりは、比丘尼は劣り、びくにより優婆塞は劣り、うばそくより優婆夷は劣れり。かくの如くの優婆夷などの身にて比丘を堀へ蹴入れさする、未曾有の惡行なりといはれければ、口牽の男、いかに仰せらるゝやらむ、えこそ聞き知らねといふに、上人なほいきまきて、何といふぞ非修非學の男とあらゝかにいひて、極まりなき放言しつと思ひける氣色にて、馬ひき返して逃げられにけり。

馬方の耳に梵語の滑稽は、東京下りの生意氣書生が田舍の父老に英語で半可通をしやべるのと好一對である。かくの如くにして、言ふ者も、聽く者も、書く者も、讀む者も、畢竟何の益を得ることが出來ようぞ。

一一　通俗なる語を用ゐよ

相手を見ての筆加減に三方面ある。第一は通俗なる語を用ゐる事である。第二は簡易に言ひ表はす事である。第三は周到に言ひ表はす事である。

文章の元素は個々の語である。故に文章を解り易くするには、先づ個々の語を解り易くせねばならぬ。是れが用語の通俗といふ事が第一に必要なる所以である。

狂言の中に「舍弟」といふのがある。片田舍に兄弟の者が居つた。弟は無筆無學の愚者であつたが、兄が平生自分を「舍弟々々」と呼ぶのを聞いて思うたには、おれは兄の弟ではあるが、舍弟ではない。兄が舍弟と呼ぶのは何の爲めか知らん。一體舍弟とは何の事であらう。或は兄が自分の無學なのを侮り、素知らぬ顔して惡口を言つて居るのではないか。怪しいのは兄の心、此のまゝには置かれぬと、疑心暗鬼、落ちついて居られず、早速村の物識へかけ付けた。詞せはしく「舍弟とは何の事で御座りまする。」と尋ねると　物識は人が惡い。此の愚物餘ほど取りのぼせて居ると見える、一つ誑いてやらうと、故らに落ちついて、「そんな事は何でも可いぢやないか。」と言ひ

澁る。隱されるほど尙ほ知りたいは人情で、「是非に教へて下され。」と泣くやうに賴む。「いやいや教へるは心易いが、お前が腹立てゝ騷ぎ出すと困る。」「いえ〳〵決して腹立ては致しませぬ。」「しかと立てぬか。」「立てることでは御座りませぬ。」「それなら教へるが、決して兄に嗔嘩など吹ツ掛けるではない。よいか。舍弟とは盜賊のことぢや。」といふと、「有難う」と口では立派に禮を言つたが、血相かへて兄の家に行つた。兄は何の氣もない、弟を見て「舍弟か、よく來た。」といふと、「よく來たものか。もう欺されては居ぬぞ。おれか何時舍弟した。」と罵り立てる。「何をいふのか、さつぱりわからぬ。えらい顏色がわるいぢやないか。氣を靜めよ。」「とぼけても許すものか。舍弟は泥棒の事と、ちやんと聞いたぞ。おれが舍弟ならば貴樣は大舍弟だらう。此の大舍弟め。」と飛びかゝつて、玆に一場の嗔嘩が始まつた。

これは無論作り話であるが、相手の知らぬむづかしい語などを使ふと、こんな騷ぎが始まらぬとも限らぬ。よしこんな事にならぬにしても、解らぬ文は讀む甲斐がなく、解られぬ文は書く甲斐がない。無論場合によつて難字難語を用ゐる必要もあらうけれども、必要もないのに難字難語を用ゐるのは無用有害なる事である。例へば、「我が見たる東京」と云つて事足る場合に「我が瞳子裡に映じたる東京」といふが如き、「佛教を奉ず。」「佛の教をあがむ。」と言つてよい所を、ことさらに、

王侯貴人爭つて乾毒の教を奉じ、唯だ人に後るゝを恥づ。

といひ、或は「能仁の教を尊む。」といふが如き、夏禹、殷湯といへば解る所を「名文命(禹)より も高く德天乙(湯)にもまされり。」といふが如き、片桐且元或は市正と云へば誰れにもわかるべき事を、故らに片桐貞盛といふが如き、「既に」「すでに」と書かずして故らに「曁」と書くが如きはいづれも事を好んでことさらに文意を通じ難くするもので、吾等の深く戒むべきものである。

二 簡易なれ

通俗の語を用ゐるに次いでは、言ひ表はし方を簡易にせねばならぬ。簡易とは手短にあつさりと言ひ表はすの意で、裏からいへば、廻りくどからず、長たらしからず、待ち遠からず、拗れず、入り組まずして無駄のないやうに書く事、表からいへば、簡易に、素直に、句讀短く、端から極まるやうに、境目が判然たるやうに書く事である。たとへば、「それ然り、豈にそれ然らむや」と

いふよりは「然はあれど」と簡單なる方が解りよく、「無かるべからず」「有らざるべからず」とぬぢるよりも「あるべし」と素直なる方が通じよく、廻りくどい譬喩を引くよりは直下に其の事其の物を斷る方が解り易い。『保元物語』の中、景綱が淸盛に向つて鎭西八郎の弓勢を說く所に、

如何さま鎧を十領も重ねて着ざらむより外は叶ふべしとも覺え候はず。命ありてこそ軍をもよいであらう。

仕り候はんずれ。

とあるが、「着ざらむ」というては意味が寧ろ反對になる。「着るより外」と素直にいふ方が、解りも、「必ず行く」「讀むに極まつて居る」といふことを「行かざるなからむや」「讀まざるなからむや」などいうて、意味の全く反對になることに氣づかぬものが少なくない。

句切り惡く、文句を續け過ぎるのも、文義を解り惡くする因となる。『徒然草』に、

若きにもよらず、强きにもよらず、思ひがけぬは死期なり。今日までのがれ來にけるは、有り難き不思議なり。しばしも世を長閑には思ひなむや。まゝ子だてといふものを、雙六の石にて作りて立て並べたる程は、取られむこといづれの石とも知らねども、數へあてゝ一つを取りぬれば、其の外はのがれぬと見れど、又々數ふれば、彼れ是れ間ぬき行くほどに、いづれものがれざるに似たり。

「まゝ子だて」以下の譬喩の文句が長く續き過ぎて解りにくい。かやうな文は寧ろ「まゝ子だてといふ遊びを見るに……いづれも逃れず。人の死に於ける恰も之れに似たり。」といふ風に、切り離した方が解りよくなるであらう。凡べて此の種の文は最後まで讀者の注意を吊して、絕えず語句の繫がり具合を案じさせる弊があるから、むやみに用ふべきものではない。

むづかしい譬喩は引かぬに劣る。狂歌に

土の瘤星のおやぢが出た時は火事のひよ子は無用なりけり。

といふのがある。釋く者が曰ふのに、土の瘤は山、星の爺は月、火事のひよこは提燈で、全體の意は、「山から月が出れば提燈がいらない。」といふことだといふ。笑話としては面白いかも知れぬが、かやうな廻り遠い譬喩は、人迷はしの暇つぶしで、何等の値打も無いというてよい。

西行法師が奥州に行脚して壺の石碑のほとりへ行つた時、耕して居る農婦に向ひ、麥を指して何ぞと尋ねると、女が答へて「冬青く夏枯れ草」といつた。西行は之れを聞いて陸奥の人は賤の女

までも風流を解する、馬鹿にされないと云つて感心したといふ話がある。これも話の種としては面白からうが、達意の文にかやうな遠まはしの間のろい書きざまは禁物であらう。

一三　周到なれ

次ぎには言ひ表はし方を周到にせねばならぬ。周到とは言ひ方の手落ちなく行き屆くことをいふ。かういへば、前の「簡易なれ」の注文と矛盾するやうに見えるが、さうではない。簡易は言ふを要せぬ、或は言はずとも察し得る無駄をいはぬこと、周到は言はで叶はぬ事、省いては解り難くなる事を落さずにいふことで、二者少しも反對して居らぬ。

室鳩巣の『駿臺雜話』にある話である。或處に鵐鶹（みゝづく）を飼つて、それを囮（おとり）にして鳥を捕る人が居た。或時殺生友達の處から、使を以てそのみゝづくを借りによこしたが、其の手紙に「みゝづく」を略して「づく」といひ、末に

づくとはみゝづくの事にて候。みゝづくと書き候へば文字數多く事長になり候故に、づくと書き候。

と斷つて來たと書いてある。後に斷る位ならば、初めから「耳づく」と書くがよい。文句を約（つゞ）めようとして却つて多くの文字を添へ、詞を短くする爲めに却つて多くの詞を使ふのは愚かな事である。

奥州の或城下の表町といふ所に、小島内記といふ歌人があつた。或日其の家で疊屋を呼んだが仕事が濟んでから、夜は酒食の御馳走があつて肴には鱈汁が出た。ほんのりと醉うてから、主人の翁が例の相手構はずの歌がたりを始めた。「なんと疊屋、お前も一つ歌を稽古してはどうか。やまと歌は天地を動かし、鬼神を感ぜしめ、男女の間を和らげるなどいうて、恐ろしい功能のある者ぢや、おれが教へてやる、暇々にやつて見るがよい。」といふと、疊屋は恐縮して「御冗談は恐れ入ります、疊屋風情に、どうして御公卿樣方の眞似が出來ませう。」と頭を掻く。「何のむづかしい事はない、歌は人々が心に思つて居る事を素直に調子よく言ひ表はすだけのものぢや。「豆腐屋を呼ぶ」「疊がよく刺せた」「汁が旨い」―― 何でも歌にならぬ事はない。善は急げぢや、眼前の景でまづ一つやつて見よ。」といふ。「へへい、さやうで御座いますか、では旦那樣やつて見ませう。かうち御座りませうか。表町の小島内記殿の疊刺して思ひもかけなき鱈汁を食ひけり。いかゞで御

座りませう。」「むゝ面白い、面白いが、それではまだ只言といふもので、歌にはなつて居らぬ。歌は三十一字というて、五文字、七文字、五文字、七文字、七文字、即ち五七五七七と並べねばならぬ。今の事柄でよい、それを五七五七七の順序に列べて御覽。」といはれ、「然らば」と首を捻ツて讀み出でたのは次ぎの文句であつたといふ。

おも町のこじなき殿のたゝ刺して、おもかげもなきち汁食ひけり。

話の種には面白からうが、まるで意味を成して居らぬ。略し過ぎると往々にしてかういふ事になる。

これに類した事は大家の文に於いても少ないとはいはれぬ。例へば、

結晶形は最も想像し難きものなれば、初學者は時々製造場に赴きて、膽礬、明礬、其の他の結晶が成長して燦爛たる奇觀に接すべし。

の類ひで、これでは結晶が奇觀を見るやうに聞こえる。「燦爛たる奇觀を呈するに接すべし。」とでもすべきであらう。清少納言の『枕の草子』の第四段、翁丸といふ犬が追放されて後歸つて來て、打擲された所を寫した一節に、

畫つ方犬のいみじく泣く聲のすれば、何ぞの犬のかく久しく泣くにあらむと聞くに、よろづの犬ども走りさわぎ弔ひに行き、御厠人なる者走り來て、あないみじ、犬を藏人二人して打ち給ひ、死ぬべしっ流させ給ひけるが歸り參りたるとて調じ給ふといふ。(誰？)心うの事や翁丸なり。忠隆實房なむ打つといへば、(誰？)制しにやるほどに、辛うじてなきやみぬ。死にければ門の外に引きすてつと(誰？)いへば、あはれがりなどす。

文章眼の肥えた人には、これでもわかるのみならず、かやうに簡潔な方が餘韻があつて面白いともいへる。さりながら普通の讀者に、誰れの詞、誰れの心と斷らずして、これが容易にわかるであらうか。平安朝の文章の一つの弊は略し過ぎて解りにくいと云ふ點にある。殊に甚だしいのは主格の省略であらう。立派な歴史などにさへ、古文を讀み誤つた所が少なからずあるといはれるのも、一つは古文に省略に過ぎる弊があるからである。

一四　何人にも解り易くせよ

「通俗の語を用ゐよ」「簡易にせよ」「周到にせよ」といふのは相手の知識程度が低い場合の註文

で、相手によつては通俗ならずとも又簡易周到ならずとも差支のないことがあるが、玆に文を明瞭にする爲めに、何時、如何なる場合にも、何人に讀ませる文章に於いても、常に必ず守るべき事が三つある。それは

第一に秩序、第二に連絡、第三に統一、この三つである。

アリストートルといふギリシヤの名高い哲學者が其の名著の『修辭學』に於いて、愉快、苦痛とは何ぞといふ事を研究し、「愉快とは精神が一種の活動をなし、程よい加減に休止して其の本性に復歸すること、苦痛とは其の反對をいふ。」といひ、名文は讀者の心を程よく働かして程よく休息せしめるものでなければならぬと說いて居る。如何にも尤もな論である。全くの休息は決して愉快なものではない。寢てばかり居るのは激しく働くよりもつらい。さればといつて過度に働くのも無論愉快でない。要は程よく身心を働かして餘り疲れぬ中に休む、これが愉快といふもの、只だ遊んでばかり居ると、過度に働くと、これが不愉快卽ち苦痛といふものである。文章もその通りで、嚙み味はへるに足らぬ平凡事をのべつに書いたのや、散漫無秩序で趣意のつかみ惡いのは決して立派な文章とはいはれぬ。立派な文章は矢張り、程よく讀者の心を働かすもの、同時に過度

に心力を疲らさぬものでなければならぬ。

讀者の心を疲らさずして心ゆくやうに讀ましめるには、第一に其の書く事が順序正しくなければならぬ、第二に前に言ふ事と後に言ふ事との間に聯絡が無ければならぬ、第三に書く事全體が締まつて纏まつて根幹の大旨意が端から端まで行き亙つて居らねばならぬ。秩序、聯絡、統一の三者を缺けば、文章は散漫、亂脈、支離滅裂、見るに堪へぬものとなるであらう。

一五　秩序あらしめよ

同じ數を計へるにも、一二三四五六七八九十と序を追うて進むのは易く、三八五二七一など出鱈目に擧げるのは難い。秩序聯絡なき叙述が人の心を疲らすことは、之れを見ても明らかである。

文章に秩序あらしめるには、先づ文の中に記す各〻の事柄を混同せぬやうに、卽ち各思想の境目が判然たるやうに書くことを要する。例へば、親の事は親の事、子の事は子の事と分け寫して特別なる必要のない限り、親子の話を錯綜混淆させぬやうにせねばならぬ。次には序次顚倒せぬやうに、卽ち一端より寫し始めて他端に終はるやうに書く事を要する。例へば、歷史を書くには

上古、中古、近世と順を追ひ、傳紀を書くには、幼年時代、青年時代、壯年時代と叙述を進めて行く類ひである。秩序のない爲め解り難くなつた文は、例へば『お菊物語』と云つて、大阪役の當時淀君に奉公したお菊といふ女中の話を書いた本の中に、

此の菊、淀殿に御奉公申すことは、菊親を山口茂左衛門といふ、その親を山口茂介といひて淺井長政に仕ふ。此の淀殿は長政のむすめ故、幼少より御奉公申候。茂左衛門後に藤堂和泉守高虎へ浪人客分にて三百石下され居り申候。然る時大阪御陣の沙汰を聞いて、大阪城中へ來たり、御奉公を願ひ候處、乃ち御具足を下され、此の時打死しけるなり。その落つき知れざるなり。御具足拜領の時、指物無之故、むすめの菊を賴みて致し貰ふ。卽ち白赤の絹を縫ひ合はせて指物にして遣しける。其の時茂左衛門喜びて、むすめにも大きにかゝりけると申し候。それも大かた暇乞ひにてありしとなり。此の茂左衛門藤堂家へ出でける仔細は、前に與右衛門とて淺井家の足輕にてありし、その小頭は茂介にてありしかば、事の外其の砌、高虎貧にありし、間には朝のものをもたべざることありしに、茂介妻事の外不便がりて茶漬などたびく振舞ひける。それ故後までも茂介妻の恩をば忘れぬと、高虎申され候由、此の由の故、茂　衛門をも呼び出だし、而も客分にして、いづれも家中にて殿あしらひにしたりける

となり。

とある一節の如きは、全體整つて居らぬ中でも、殊に點を施した所が、秩序が立つて居らぬために頗るわかりにくくなつて居る。尤も飾らず、整へず、文章家の文章らしからぬ所に却つて一種の棄てられぬ愛嬌妙味もあるが、とにかく秩序の整はない點だけは缺點といはねばならぬ。

十六　聯絡あらしめよ

文章に聯絡の必要な事、唐突無關係なる叙述の避くべき事は、特にいふまでもない。聯絡は字句の短い間にも、一篇の文章全體の間にも必要である。

聯絡の穩かならぬ文の例は、北畠准后の『神皇正統記』に、

近き世の事ぞかし。賴朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追ひ討ちしに、自ら向ふことありしに、平の重忠が先陣にて其の功すぐれたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて極めたる少しき所を望み賜はりけるとぞ。

聯絡の上からいへば「近き文治の頃賴朝奥の泰衡を追ひ討ちて」などいうた方が寧ろ簡明であらう。

志立たざれば學ぶこと成就せず――故に故人も志ある者は其の事竟に成るといひ、又志立つは學の半なりと云へり――譬へば弓射る者の的に志し、道行く者の宿に志すが如くなるべし。（貝原益軒『大和俗訓』）

――印の處の聯絡關係が面白くない。「志立てば學ぶ事成就す――故に古人も志あれば事竟に成るといへり。」「學ぶ者の道に志すは――譬へば弓射る者の的に志すが如し。」とでもすべきであらう。

謠曲の「養老」に

それ行く川の流れは絶えずして、しかも、もとの水にはあらず、流れに浮かぶうたかたは、且つ消え且つ結んで――久しく澄める色とかや。

といふ一節がある。此の文の原文、鴨の長明の『方丈記』の「且つ消え且つ結びて、久しく止まることなし。」は、よく聯絡して居るが、「久しく澄める色とかや。」とつゞいては、唐突で、何の事やらわからぬ。

狂言の「鷺」に、或人が鷺を刺すと云つて、鷺の持主と賭をして、「若し鷺をさし損ねたらば我が佩いて居る太刀をやらう。」と約束したといふ事を、

アド「されば賭ろくには何をするぞ。▲シテ「此の太刀を得さゝずば我御料にやらうぞ。」と書いてゐる。太刀をさし得ずはといふ意味にも聞こえて妙でない。「（鷺を）得さゝずば此の太刀を我御料にやらうぞ。」とある方が、よく續くであらう。

聯絡の穩かならぬ文は、讀者に心ゆかしむることが出來ぬ。

一七　統一あらしめよ

次ぎには文章全體に統一あらしめねばならぬ。統一とは書き表はす事柄が纏まつて統べ括りのついて居ることをいふ。例へば儉約の大切な理由を書くならば、「無駄づかひは宜しくないことである。それが習慣になると身持が自墮落になる、品性が卑しくなる、家族の迷惑になる、親類に厄介をかける、國家の損害になる、何一つよい事がない。況んや病氣、失職、天變、地異、明日をも賴まれぬ人の身を以て、平生貯蓄の心掛がなくては、まさかの場合にどうするか。儉約は自他

の幸福を來たし不幸を救ふ道である。」などいへば、事柄が纏まつてよく解るが、若し其の間に「旨い物を食ひたい、美しい物を着たいといふは人情である。」「諺にも太く短くといふ。」「今日を樂しめ、一寸さきは闇の世だ。」等の文句を挿んだならば、意味の通ぜぬ、趣意の立たぬ、支離滅裂の文となるであらう。此の統一といふことは文章組織上の眼目で、一篇の文章全體を形づくる上に於いて特に必要なことであるが、一句一節の短い間に於いても亦注意を怠つてはならぬ。

一句一節の間の統一を成すには、第一に語句互によく照應して組み合ふやうにすることを要する。例へば「聊か蕪辭を述べて豈にそれ祝詞にかふと云爾。」の如きは、意味がどうやら解つても照應せず、纏まらぬ亂暴な文である。「聯か蕪辭を述べて祝詞にかふ。」とすべきであらう。纏まらぬ文は大家のにも少なくない。『徒然草』の

家居のつきづきしくあらまほしきこそ假りの宿りとは思へど興あるものなれ。

の如きも、點を打つた六字は無駄で、「つきづきしきこそ」とあるべきであらう。家の相應なるこそ興あれ。」といへば聞こえるが、「相應にありたい事こそ興あれ」では埒があくまい。察するに兼好法師の淦し損ねか、後人の寫し誤りかであらう。新約書にある

天國は朝早く出でて葡萄園に工人を雇ふ主人の如し。

の如きも、「天國は主人の如し。」では可笑しい。『義經記』に、頼朝が兵を擧げた時、義經が奥州から駈けつけたのを喜んだ所を寫して、

（新羅三郎）三千餘騎にて、栗屋川に馳せ來て、八幡殿と一つに成つて、遂に奥州を從へ給ひける、其の時の御心も、頼朝御邊を待ち得まゐらせたる心も、いかでかこれにまさるべき。

と書いてある。これも纏まつて居らぬ。「待ち得まゐらせたる心も優り劣りあるべしや。」或は「其の時の御心も、いかでか頼朝御邊を待ち得まゐらせたる心にまさるべき。」などせねばなるまい。

一八　主格の統一あらしめよ

文に統一あらしむるには、また主格に統一あらしめねばならぬ。主格の統一とは、文の主格が確と定まつて、その領分内の語句を統べ括るやうにすることである。例へば「吾れ衣食の爲めにせず、溫袍の爲めならず。」といふ文に於いて、「吾れ」は「爲めにせず」の主格にはなれるが、「爲めならず」の主格になることは出來ぬ。「吾れ溫袍の爲めならず。」では文を成さぬからである。若し

「爲めならず」を活かすならば、「吾れの學ぶは」といふやうな、別の主格を要するであらう。卽ち、此の文には二つの主格が混入して、「吾れ」といふ語は「爲めにせず」の一句を支配しては居るが、己が領内なる他の一句「爲めならず」を統御することが出來ぬので、そのために文脈が亂れて解り惡くなツたのである。かやうな文は「吾れ衣食の爲めにせず、溫袍の爲めにせず。」或は「吾れの學ぶは衣食のためならず、溫袍のためならず。」のいづれかに改むべきであらう。もう一つ例を擧げると、

吉野山は櫻花の名所なるのみならず、又多くの古跡あり。

の如きも、主格の統一を缺いて居る。「吉野山は名所なり」とはいへるが、「吉野山は古跡あり」では文を成さぬからである。これも「多くの古跡ある所なり」とでも改めねば整はない。

主格の統一といふのは、一つの文には主格の數が一つだけに限るといふのではない、唯だ主格と他の文句とがよく結び付いて、主格の支配を離れたぶらつき文句、謀叛文句が無いやうにせよといふことである。

一九　文の相を整へよ

文に統一あらしめるには、又文の相を整へねばならぬ。文の相とは、例へば「子供は犬をかはゆがつた。」といふのを、働きかける相(能働相)の文といひ、「犬は子供にかはゆがられた。」といふのを、働きかけらるゝ相(所働相)の文といふ類ひで、文句を累ねる際に、能働相ならば能働相、所働相ならば所働相と、同じ相に揃へることを、文の相を整へるとはいふのである。例へば『增鏡』の「春のわかれ」の一節に、かういふ文がある。

(後醍醐帝の密計)あらはれぬとや思ひけむ、かの者どもはやがて腹切りつ。又別當資朝、藏人內記俊基同じやうに武家へ捕られて、嚴しく尋ね問ひ守り騷ぐ。事の起こりは御門世を亂り給はむとて、かの武士どもを召したるなりとぞいひ扱ふめる。

前には「捕られ」と、働きかけられる相に書いて、後には「尋ね問ひ守りさわぐ」と、働きかける姿に書いた所が甚だまづく、從つて誰れの所行かはツきりしないやうにさへなつた。これは「武家へ捕られて嚴しく尋ね問はる」と、悉く所働の相にするか、或は之れを武家の所行にして、「武家俊

基等を抑へて嚴しく尋ね問ひ守りさわぐ。」と、悉く能働の相に改めるのが穩當である。此の文は無論主格の統一をも缺いて居る。

聖人國を治めたまふ時は、雨風時に從ひ、天は天の德をあらはし、地は地の德があらはれます。（「鳩翁道話」）

の如きも、前の「德をあらはし」に對應して「地の德をあらはします。」とする方が妥當である。

とにかく文章を解り易くするには、如何なる場合に於いても、如何なる人に讀ませる如何なる種類の文章に於いても、常に必ず、秩序、聯絡、統一のあるやうに書かねばならぬ。

二〇　第三に純粹なれ

文章の意味が精確で解り易ければ、達意の文としては、まづ申分が無いといつてもよいが、それだけでは、まだ正しい滿足な文章とはいはれぬ。滿足な文章といはれるには精確明瞭なる上に穩かなる事を要する。「穩か」とは人の氣に障らぬやう、讀者に不快の感を起こさせぬやうに書くことである。意味だけは解つても、氣取つた、不相應な、野卑な、尾籠な詞づかひなどがあつて人に顏を背けさせるやうでは、まだ滿足な文章とはいはれぬ。此處から見てまづ純粹といふことが必要になつて來る。

純粹の要むる所は、まじり氣の無い、立派な上品な選拔の國語を用ゐる事である。總じて不純粹、不調和なる取合せは、用が辨じても可笑しい。洋服に足駄も可笑しい。烏帽子、直垂に蝙蝠傘もをかしい。禮服に頰冠りも可笑しい。佛寺でアーメンも可笑しい。文章も之れと同じ事で、いづれの國にも其の國特有の純粹な語法といふものがあり、之れに從はぬと、不調和で、正しい文とはいはれぬやうになる。例へば、「身をつみて人の痛さを知れ。」「亭主の好きは客にもてなせ。」といへば、調和した純粹な日本文になるが、

己れ人に施られんとすることは、亦人にも其の如く施よ。（「新約書」）

といへば、同じ事でも、西洋臭く直譯くさくて、立派な國文の仲間入りが六づかしくなる。「己れの欲せざる所、人に施す勿れ。」などにも、漢文くさい一種不純の臭味がある。

文を純粹にするには、表からいへば、其の國其の時代に遍く通ずる上品な語及び語法を用ゐねばならぬ、裏からいへば外國語、廢語、濫造語、地方語、術語、訛語、俚語等を用ゐぬやうにせ

ねばならぬ。但し、どちらにも「特別の必要なき限り」といふ但書がつくことは勿論である。

二　其の國の語を用ゐよ

必要もないのに外國語を濫用するのは宜しくない。これはギリシャ以來やかましくいうて居る事で、イギリスでは外國語の濫用をバーバリズム（Barbarism 夷ぶり）というて卑しんで居る。例へば、廣く普通一般の日本人に見せる文に「何國の何村は僕の搖籃です。」或は「故鄕です」というてよい所を、わざと「僕のクレードルです。」と云つたらどうか。英語を知らぬ老幼或は無學の人の前で弔文を讀み、弔ひ演說などをする場合に、「彼れの命は短かりき。」というてよい所を「彼れのライフ(Life)は短かりき。」など云つたらどうか。「氷を嚙み砂糖を嘗める。」と普通に云つてよい場合に、故らに「アイスを嚙み、シューガーを嘗める。」と云つたらどうか。上野停車場といふべきを「上野の車坮」と云つたらどうか。午前九時半頃といふべきを「上午九點後約半餉」と書いたらどうか。聽く者讀む者の癪にさはり、氣を損ね、感情を害して、立派な穩かな思想も快く受け容れられぬやうになるのは當然であらう。

同じ道理で邦語を外國文風に組立てることも亦注意して避けねばならぬ。

例へば前に擧げたキリスト教聖書の「われ人に施られんとする事は亦人にも其の如く施よ。」の如き、或は「今の政治家の誰れでもに向つて廉潔公正なるべく忠告する必要あり。」「彼等の凡ては戰場に行くべく急ぎつゝあり。」の類ひ、個々の語は立派な日本語でも、組合せ方が夷人くさい故に、是れ亦讀む者に一種不快の感を與へる。滿足な文章とはいはれぬ。

三　其の時代の語を用ゐよ

今の人に讀ませる文ならば、特別の必要なき限り今の語で書くべき筈のものである。例へば山陰道、山陽道を「そとものみち」「かげとものみち」と書いたらどうか、「幼し」といふ所を「きびはと書いたらどうか、もてなしの意味の「馳走」を「奔走」と書いたらどうか、「低い山」「卑しい位」を「短い山」「短い位」と書いたらどうか、「牡丹」を「ぼうたん」と書いたらどうか。これでは本來思想を傳へる橋渡しとなるべき言語文章が却つて思想を隱す雲霧ともなるであらう。

いつぞや或戰歿將校の葬式があつた折のことである。某の老神主の誄辭を讀む時に「同じく」といふ語を「おやじく」と讀んだ。しかも其の「おやじく」が「明治の何年に何學校を卒業し、おやじく何年に少尉となり、おやじく何年何月に金鵄勳章を賜はる。」といふ風に、幾度もくつゞいたが、會葬者は、其の度毎にくすくすと笑ふ、果てはあの神主め餘程耄碌して居ると見えて呂律が廻らぬなぞというて「おやじく爺」と渾名を附け、剩へ、死者の知人の小說家が、死んだ將校が黃泉より便したといふ趣向の作の中に、「諸君の笑つた耄碌神主のおやじくを聞いた時は、僕も棺の中で舌を嚙んで可笑しさを怺へたよ。」など書いて、皮肉を云つた者もあつた。併し是れは神主が耄碌したのでもなければ、發音の誤りでもない。昔は「おなじく」を「おやじく」とも云つたので、笑つた者こそ、己が無學を棚に上げて氣焰の吐き損ねをしたのである。が、これも本はといへば、神主が當世不通の廢語を用ゐたからで、普通の文に現用語を用ゐべきことはこれでもわかる。此の點から見て文を純粹ならしめるには廢語を濫用せぬやうにせねばならぬ。

次ぎには新語を濫用せぬやうに注意せねばならぬ。新語とはまだ世に廣く通ぜぬ言葉、自分勝手に造つた語をいふ。例へば燐寸といふべきを「アメリカ附木」といひ、汽車汽船といふべきを

むしけ車、むしけ船（蒸氣）といふ類ひである。廢語を濫用した文章は國學者、漢學者の作に多い。『徒然草』の六十八段に、

筑紫に某の押領使などいふやうなる者のありけるが、土おほねを萬にいみじき藥とて、朝毎に二つづつ燒きて食ひける事年久しくなりぬ。或時館の內に人も無かりける隙をはかりて、敵襲ひ來たりて圍み攻めけるに、館の內に兵二人出で來て、命を惜まず戰ひて、皆追ひかへしてけり。いと不思議に覺えて日頃こゝにものし給ふとも見ぬ人々の、かく戰ひし給ふは、いかなる人ぞと問ひければ、年來たのみて朝なくめしつる土おほねらに候ふといひて失せにけり。深く信を致しぬればかゝる德もありけるにこそ。

といふ文がある。『徒然草』は德川時代以來、今日までも最も廣く行はれた文章の一つであるが、今日「土おほね」といはれて、それとわかる人は多くあるまい。凡その人は「大根」といふ解釋を見て、なんだ大根が化けて愛食者の危難を救つたといふことかと笑ふであらう。廢れた古語で現用の文を書くのは、求めて我が文を不可解のものとし、求めて讀者を少なくするのである。

二三　遍通の語を用ゐよ

國人一般に讀ませる文章は、其の國に遍く通ずる語で書くべき筈である。此の點から見て避くべきものは、地方語、術語、及び前に擧げた新語等である。

一地方の人に見せる文章、或は一地方の特色を寫す小說などは、おのづから特別であるが、普通の文章に方言を挿むのは、穩かならぬばかりでなく甚だ醜い。醜いばかりでなく往々人に迷惑をかけることもある。橘南谿が出羽の國に旅した時、小佐川に行かうとして、次ぎの宿への道程を聞くと、里人が鬼が出て人を食ふから、見合はせよ。」と云つた。初めは人を馬鹿にすると思つて居たが、よくよく尋ねると、此の地方では狼の事をおにといふことが解つたのでぞつとした、といふ事が『東遊記』に書いてある。方言濫用の弊はこれでもわかる。

歌や雅文などに方言を交へるのも、しやれとしては時に面白いこともある。頼山陽が薩摩の方言で作つたといふ狂歌の

おこじよだち、はよ來ちえ見やい、さくらじめ、づだんばらから、づツがはツ出た。

（むすめ子だち、早く來て御覽なされ、櫻島へ中腹から、月がひよつと出た、といふ意味）或は伊達政宗が京都の公卿達の需めに應じて仙臺の方言で作つたといふ

東から眞赤な月がづばぬけていづこの雲にのたし込むらむ。

の如き、滑稽な作としては面白いが、眞面目な普通文を此の通りにやられては困るであらう。謹嚴なる文章の中に奥州人が「招ぐ」「行ぐ」と濁つて書き、西南人が「缺ぐ」「畫ぐ」と濁つて書くなども、皆方言の累ひを及ぼしたものである。

專門の學術にのみ用ゐる語を術語又は科語といふ。術語は專門の學術に關する文章にのみ用ゐべき者で、普通人に讀ませる普通文に用ゐべきものではない。普通の事を寫した文に哲學上、科學上、宗教上、藝術上の特殊語を用ゐて「物と我れ」といふべきを故らに「客觀と主觀」といひ、「我れを忘れた」といふべきを「我を離脱した」といひ、天氣が好い惡い位でよい所に低氣壓、高氣壓といひ、「期限が切れた、切れぬ」で間に合ふ所に「時効にかゝつた、かゝらぬ」といひ、「無躾者」、「無教育者」といふべきところに「非修非學の者」といひ、本性を顯はしたというてよい所に「底を割ツた」といふ類ひは、いづれも此の點から見て避くべきことである。但し術語でも世間普

通に行はるゝものは無論此の限りでない。

二四　品のよい語を用ゐよ

小説戯曲等に於いて田舎者、泥酔漢、博徒、破落戸などを、さながらに活き〳〵と寫す場合などは特別として、普通文に於いては、上品な語を用ゐて文品を損はぬやうにせぬばならぬ。訛語、俚語の濫用などは此の點から見て避くべきことである。訛語とは「なまり言葉」卽ち語の本來の意味を誤り用ゐたもの、俚語とは俗間に行はるゝ野卑な言葉をいふ。

勉強といふ語は、轉じて商品の價をまけることに用ゐられるやうになつた。併しながら、「勉強する家は榮ゆ。」といへば、一方には勤勉の意味と誤られる恐れがあり、まけるの意とすれば、文品が大いに下つて來る。無用といふ語は訛つて「することなかれ」といふ禁止の意に用ゐられるやうになつた。けれども「往來無用なり。」といへば、往來はいらぬ事といふ意にも取られる氣づかひがあり、又禁止の意にすれば文の品位が落ちて來る。誤字、假名違ひ、讀み違ひなども、一種の訛語と見てよい。析を柝と誤り、己を已と誤り、缺を欠と誤り、或は「誠の道を蹈みな違ひ

そ。」といふべきを「違ひぞ」と讀み、「谷まる」を「たにまる」と讀むなど、皆一種の訛りで、文品を害するものである。

俚語とは馬鹿、米雜棒、くたばる、へこたれる、けつかる、しやがる、の類ひである。かういふ語が文を不純にし、品位を下げることはいふを待たぬことである。

二五　全體を調和せしめよ

要するに文章を純粹ならしめよとは、「一篇の首尾にわたつて全體の調子を整へよ。」といふことに歸する。それ故、通例は雅文を標準として純不純を論ずるけれども、道理をいへば、談話體の俗文ならば首尾一貫して談話體にし、王朝式の古文ならば一貫して古文式にし、漢文調ならば一貫して漢文調にすべきで、是等を悉く純粹なる文章といつて差支ないのである。前に「すべきなり」「ならざるべけんや」と云つて、後に「あります」「御座りまする」とするのは不純である。同一の人について、前には「何々なされた」「仰せられた」と敬語を使つて、後に何の理由もなく、「云つた」「讀み居つた」と書き下げるのは不純である。要するに、普通人に讀ませる普通の文章に於

いては、其の國其の時代に遍く通ずる上品なる語を用ゐて、調子の首尾整つた文を作る、これが文を純粹にする所以と思つてよい。

二六　第四に穩當なれ

精確、明瞭、純粹の三つの註文に合ひ、立派な言葉を用ゐて、精確に解り易く書いても、まだ滿足な文章とはいはれぬ。滿足な文章といはれるには、其の上に穩當なることを要する。穩當とは用語が寫さるゝ事柄に適當し、語句の選擇按排が、場合に應じてよく嵌まり、よく落ち着くことである。

醫は頬に在れば愛嬌を添へるが、額に在つては醜い。飯は飯櫃、茶碗の裡に在れば奇麗だが硯蓋や菓子鉢の中に在れば穢い。孔雀の羽は孔雀の身に着けば美しいが、烏の翼に挿めば相應はしくない。文章もその通りで、例へば巨魁といふ語は純粹な上品な語であらうが、之れを大石良雄の場合に當て嵌めて、「大石良雄は赤穗四十七士の巨魁なり。」と云つては嵌まらぬ。同じ「かしら」といふ事でも、銀行には頭取といひ、學校には校長といひ、博徒には親分といひ、大工には棟梁といひ、政黨には首領といひ、大臣には總理といふ。而して是等の語が如何に純粹で上品で、又それを組み立てた文章が如何に精確で明瞭でも、其の場〳〵に嵌まつた語を据ゑつけなければ滿足な文とはいはれぬ。これが穩當といふ事の文章に必要なる所以である。

服部嵐雪といふ俳諧師が、謠曲『雷電』の一節を例にして、句を活かすには、いかにも適切で、都合よく其の場合に嵌まる事柄を引いて來ねばならぬといふ事を門下に敎へたことがある。『雷電』は、菅丞相が筑紫の配所に薨ぜられて後、雷神となつて讒者の一類を亡ぼさるゝといふ筋の作で、その中に、菅公の亡靈が比叡山延曆寺なる舊師の法性坊を訪はれた一節がある。月白き秋の夜半、法性坊が天下太平の祈禱に取りかゝらうとして居ると、柴の戸をほと〳〵と敲く音がする。松風の聲か不思議やと物の隙より見れば、さきに筑紫で果てられたといふ菅丞相であつた。驚きつゝも内に請じて、「さて御薨去の由承つて色々に弔ひ申したが屆き候ふやらむ。」とたづねると、「我れは此の世の人ではないが、切に頼み入りたき事があつて驚かした。われ梵天帝釋の憐れみを蒙り、鳴神となつて遠からず内裏に飛び入り、我れにつらかりし雲客を蹴殺さうと思ふ。其の時は朝廷より必ず僧正を召さるゝであらう。かまへて御參りあるな、折り入つて願ひまるらす

るは此の事。」といはれると、僧正は「折角の御賴みなれば宣旨はあつても一二度までは參るまじ。」と答へらるゝ。丞相は重ねて「いや勅使たび〳〵に及ぶとも必ず參内あるな。」と賴まるゝ。押問答の末、僧正はきつとなつて「王土に住める此の身なれば、勅使三度に及ぶならば、いかでか參内申さゞらむ。」と答へられると、丞相の姿が俄かに變はつて鬼のやうになり、

折ふし本尊の御前に柘榴をたむけおきたるを、おつとつて嚙みくだき、妻戸にくわつと吐きかけ給へば、柘榴忽ち火焔となつて、戸びらにばつとぞ燃え上がる。僧正御覽じて、さわぐ氣色もましまさず、洒水の印を結んで、鑽字の明を稱へたまへば、火焔は消ゆる煙の内に立ちかくれ丞相は行方も知らず失せ給ふ。

とある。嵐雪がいふには、こゝに柘榴を用ゐたのは動かぬ所である。腹の立つまゝに佛前に有りあふ物を取つたといふ所だから、一寸考へると蜜柑でも、饅頭でも、羊羹でもよかりさうなものだが、蜜柑や饅頭を嚙んだでは火にならぬ。柘榴の色が燃え立つやうに紅に、其の狀が破烈彈のやうに威勢よく彈けて居ればこそ、之れを嚙んで火焔となるとも想像されるので、かう考へると、此の場合、柘榴の外に使ふべきものが無い。斯樣な動かぬ材料、此の場合これでなければならぬ

といふ材料、他の物で代理の出來ぬ材料を用ゐたればこそ、此の文が活躍して居るのである。俳句に於いても常に此の用意が肝腎だと說いて居る。

如何なる事物でも、最も適切穩當に之れを言ひ表はし得る言葉は世界に只ッた一つだけしか無い。此の唯だ一個の言葉をさがし當てる事が、古來の名匠の最も苦心した所で、之れをさがしあてねば神品傑作は出來あがらぬ。故に語句事例の穩富といふ事は一面からいふと文章道の極致というてもよいのである。疵の無い滿足な文を目安とする基礎の論に於いては、これほど八釜しくいふ必要はなからうが、とにかく穩當なる語句を用ゐるといふことが滿足な文章の一要件たることは爭はれぬことである。

これは文章に限つた事ではない。工人は最後の一鉋に頭を惱まし、彫刻家は最後の一鑿に思ひを凝らす。觀世太夫が「木賊刈」の能を舞つた時に、鎌の使ひ方について園原の百姓の批難に感じたのもこれである。應擧が鷄や猪のしゝの畫について野人樵夫の批評に感じたのもこれである。ある名優が、普通の女に扮する時は疊一枚を縱に八足に蹈み、姫君に扮する場合には十足に蹈まねばならぬ、老人の杖の持ち方は、貧人の場合には頭を少し出して握り、貴人には頭に拇指をかけ

ねばならぬなどいふ細かな注意をしたのもこれがためである。此の注意、易きが如くにして實は頗る難い。後人が一字一句をも改め得なかつたと稱せらるゝミルトンの『失樂園』でも、魔將等が天上の光榮を失つて淋しげに立つたやつれ姿を松柏の大木が雷火に頭を燒き去られて楮原の中に立てるに比べた譬喩なども、奇拔な所はあるが、猶ほ雷火は樹木の幹を傳うて縱に引き裂くもので、幹を其のまゝ殘して頭だけを横さまに燒き去るといふことがないと云つて、譬喩不穩當の批難を受けて居る。ゲーテが有名なハムレツトの性格評、ハムレツトの最後は其の性格の發展より來たるべき自然の結果で、譬へば大木の種子を小さな鉢に蒔いたやうなものである、木は年々に生長する、根も亦之れと共に蔓る、根の蔓り蔓つた結果、遂に鉢を割るに至るに同じ事であるといつた名比喩なども、木は根の養ひ得る大きさ以上には長らぬものといふ事を知つた植木屋、盆栽家には不穩當なるこぢつけ譬喩と見えるであらう。語句事例が穩當でなければ文章が活きぬ事はこれでもわかる。

二七　不穩當と穩當と

諺に「命あつての物種。」といふのがある。又同じ意味を表はした諺に「命あつての物語。」といふのもあり、「命が物だね。」といふのもある。此の中いづれが穩當で、いづれが不穩當かと考へると、第二の「命あつての物語り。」と第三の「命が物種。」と、此の二つは用語も妥當で、組織の具合も落ち着いて居るが、初めの「命あつての物種。」の方は、意味がわかるといふだけで、照應もせず纏まつても居らぬ。察するに、これは第二と第三とがちやんぽんに寄り合つたのであらうが、まづ不穩當で物になつて居らぬといはねばならぬ、

淨瑠璃『手習鑑』にある「梅は散り櫻は枯るゝ世の中に何とて松のつれなかるらむ。」といふ歌を、「松はつれなかるらむ。」と語るのを聞くことが度々ある。意味は同じながら、「の」「は」二字の違ひで文品が雲泥である。岡西惟中といふ歌人が

神代よりのあはれを思ひつゞくるも物の數ならぬ秋の夕暮。

といふ歌を咏んで飛鳥井雅章に添削を乞うた所が、初めの一句を「四つの時の」と改められて大いに感じたといふ話がある。秋のあはれは四季の景物の何れかに較べるのが穩當で、開闢以來の事柄に比ぶべきではないからであらう。

曾て一青年が、男子なる同窓の友人に宿せた手紙の中に、「去る四月君ときぬぐゝの別かれをなしてより」云々と書いたのを見たことがあつた。「きぬぐゝ」は男女曉の別かれの意味で、男同志に用ゐべき語ではない。又或青年のには「學窓の下に日夜蛍雪の苦を積みつゝあり。」と書いたのがあつた。螢雪といふ語は今では螢といひ雪といふ本來の意味を失つて「勉强」と同義になつては居るけれども、夜分燈火の代はりに用ゐる螢や雪に對して日夜といふのは可笑しいであらう、それは「髭の塵を掃ふ。」といふはよい語でも、女の場合に用ゐてはをかしいのと同じ事である。尙ほ似よつた例を擧げると、或人の世界史に

ファビアスはカルタゴの滅亡を以て己れの任となしき。

といふ文があつたが、おのづから滅びる事は特に任とすべき事ではない。「任とする」といふならば「カルタゴの討滅を以て」とか、或は「カルタゴを滅ぼす事を以て」といふ風に、他働式に書かねばならぬであらう。

歐洲の社會の制裁と日本の社會の制裁とを比較して見ると、多少の差がある。多少といふよりも寧ろ反對の差がある。

反對しては差があるわけがない。これはたゞ「寧ろ反對して居る。」といふべきであらう。

基督教に於ける人道の福音は、家庭に其の泉を發し、流れ〳〵て遂に全世界に汎濫したのである。

汎濫は洪水の害などにいふべき語で、善い方の事に用ゐべきではない。人道の福音ならば、「世界を潤した」とか、或は「世界に弘布した」などいふべきであらう。

下賤は心拙ければ、諸事心づけ恨みざるやうに慈悲の心を專らとして、子の如く思ひやりて仕ふべきなり。（伊奈貞昭『武備小學』）

「仕ふ」は下より上に對していふ事で、こゝは「使ふ」とすべき所である。

邦人の嗜好は寧ろ淼茫たる大海よりも清渚閑汀にあり。（「大日本美術略史」）

殊的內外の諸因緣によりて所謂日本的といふ一種の特長を現はす。（同）

「寧ろ」、「殊的」二語の置き所がまづい。初めのは「大海よりも寧ろ清渚閑汀」と改むべく、後のは「內外の殊的因緣」と改むべきである。

韓國皇帝は一兩日中に伊藤大使に接見し日韓條約締結後の事につき、御下問せむことを望め

り。

某さんが御出かけに、云々と云ひ置かれて行きました。

敬語の一致せぬ所が甚だまづい。初めのは「御下問あらせらるべく望まれたり。」とすべきであらう。次ぎのは『某さんが出かけに言ひおいて行きました。』と全然敬語なしにするか、或は「御出かけに言ひ置かれて行かれました。」と悉く敬語をつけるか、或は省くならば「言ひおいて行かれました。」と、前に省いて後に付けるかせねばならぬ。

天つ正しき二十の年、前の關白おほいまうち君入唐し給ひ侍らむと物し給ふに、日の本の武士ども殘りなく御供し侍るに、陸奥よりも立ち侍り。（落生氏鄕、紀行）

天正二十年太閤秀吉が朝鮮征伐に出かけようとした時に、領地の陸奥（みちのく）を出立したといふ事、後の二つの「御供し侍る」「立ち侍り」はよいが、前の「入唐したまひ侍る」は敬語と謙辭とがうち雜つてをかしい。單に「入唐し給はむと」とすべきであらう。

油斷も隙もなりやしない。

「油斷もなりやしない」「隙もありやしない」とつゞくべきで、「なりやしない」は「油斷」にはつゞく

が「隙」にはつゞかぬ。聯接の穩かならぬもので、一種の齟齬文章といふべきものである。かやうな不穩當な使ひざまは昔から何處の國にもあるものと見えて、二千數百年前のギリシヤのアリストートルの『修辭學』（英譯）にも、一つ以上の事物に用ゐる働詞はいづれにも通用さるべきものでなければならぬというて、"He saw the color," "He heard the sound" を一つに寄せる場合に用ゐる働詞は saw でも heard でもいけない、"He perceived both color and sound." でなければならぬというて居る。國文でいふと、「兄に願ツておいた。」「弟に命じておいた」といふ二つの文を一つに寄せる場合には「兄にも弟にも願つておいた。」でもをかしく、「兄にも弟にも命じた。」でもまづいやうなわけで、かやうな場合には双方に通じて不都合なき働詞を選んで、「兄にも弟にも通じておいた。」とでもせねばならぬのである。

「時代違ひ」「場所違ひ」なども穩當といふ點から見て避けねばならぬ。「時代違ひ」とは例へば源義經時代を寫した作に鐵砲を出だし、近松が『用明天皇職人鑑』に

身方に與せば九州の探題になさしめむ。

といつた類ひで、時代の違つた事物を取り入れることを云ふ。「場所ちがひ」とは日本の國土の特

有の事を漢土の事と記し、熱帶の記事に寒國特有の事を雜へる類で、例へば、『阿彌陀佛四十八願記』といふ淨瑠璃本に、法藏比丘が西天竺に行く所を寫して。

野山里々過ぎ行けば、秋風寒くおとづれて饌がくれの雁がねも、春は越路に歸るらむ。

といつた類を云ふ。印度あたりの熱帶地方の氣候は、四季は無くて唯だ乾濕の二季あるのみといふ事である。殊に印度の道行に越路は亂暴に過ぎるといはねばならぬ。

二八　穩當なる文字

最も廣く行はれて而も割合に解り易い古文の中で、『徒然草』の如きは、まづ最も穩當なる文章に富んで居るものであらう。此の點に着眼して此の書を讀んで行けば、到る所にぴつたりと嵌まつた言葉、しつかりと落ちついた組立を見出だすことが出來る。開卷第一なる

つれ〴〵なるまゝに、日暮らし硯にむかひて心に移りゆくよしなし事をそこはかとなく書きつくれば、怪しうこそ物狂ほしけれ。

の一句からして、まづ据わつて動かし難く、非をうつ隙間がないやうに見える。「つれ〴〵」「日暮らし」「よしなし事」「物ぐるほし」などにはそれ〴〵「退屈」、「ひねもす」「一日」「終日」「わけも無き事」「氣ちがひじみた」等の同義の語が數多あるであらうが、此の文の趣致風格を害はずに置き換へ得る語は全く無い。句作りも其の通りで、しつくりと組み合つてよく聯絡調和して居る工合が、一句も動かせやうとは思はれぬ。これは要するに最も穩當なる語を選び出だして最も穩當に み立組てたからである。

名高い月花の論の條などを見ても其の通りで、

花は盛りに月はくまなきをのみ見るものかは、雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春の行方知らぬもなほあはれに情深し。

「月は隈なき」は「月の曇らぬ」「月の照りわたる」ともいへるであらう、「たれこめて」云々は「籠もり居て春の過ぐるを知らぬ」ともいへるであらう。併しながら、さうすれば「くまなき」「たれこめて」の趣味餘情は失はれてしまふ。組立の方をいへば、「たれこめて春の行方知らず、雨にむかひて月を戀ふも……」と改めても、意味の上には差支がないが、併しながら「月は隈なき」を直ちに受けて「雨にむかひて月を戀ひ」といひ、次ぎに「春の行方」というて遙かに「花は盛り」の

初句に應じた面白味、或は前に花月と順序して、後に月花と次第した錯落の趣致は無くなる。とにかく、これも一語も換ふべからず、一句も移すべからざる名文である。四十四段の

心のまゝにしけれる秋の野らは、おきあまる露に埋もれて蟲の音がごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは雲の往來もはやき心地して、月の晴れ曇ること定め難し。

なども、同じ意味で動かぬ名文といはれる。

要するに文章の基礎として注意すべき事は、まづ我が言ふ所が立派に思想を成すやうに、我が言ふ所の意義が誤解されぬやうに、解り易いやうに、言葉の用る方が立派で落ちついて居るやうにすることである。是等の註文が充たされて、始めて正しい文、無疵の文、達意の文、滿足な文が出來あがるのである。

第二部　文飾篇

一　修辭の本領

前に說いた文章基礎の要求は凡べての文章に必要な事であるが、文章に關する注意がこれで盡きて居るといふのではない。達意を主とする文章、例へば商工業家の實用文、數學、科學の文、法令の文などは基礎的要件を充たしただけで十分であるが、美術的文學的の文章、例へば論文、詩歌、小說、戲曲などになると、尙ほ其の上に美なる事、力ある事、趣致風韻の伴ふ事を要する。而してかやうに文に美あらしめ趣致風韻あらしめることを文の修飾といふのである。次ぎに修飾の何たるかを說く爲めに、まづ基礎と修飾との關係を述べる。

文章を美しくするには先づ之れを正しくせねばならぬ。文を正しくすることは文を美しくする事の土臺である。文を正しくするに必要なる事は前に述べた精確、明瞭、純粹、穩當の四つであるが、尙ほ他の方面より之れを二つに概括することが出來る。一つは趣意が立ち筋が通るやうに

する事で、之れを論理的要件といふ。も一つは國人普通の言葉遣ひに從ふ事で、之れを文法的要件といふ。修辭は此の二つを基礎として其の上に立つのである。卽ち論理、文法を脚下に踏まへ、更に其の上に出でて、文章に琢磨をかけ光澤をつけるのが修辭の本領である。論理は文章に表はす趣意を與へる。文法は其の趣意を言ひ表はす方式を示す。此の二つは修辭の足掛を拵へて呉れるもので、其の足掛を踏みはづし、其の法則を破つては千百の美辭名句も沙上の樓閣同樣で何の役にも立たぬ。つまり文章の第一義は思想の傳通といふ事で、書く事が理窟に合ひ、書き方が普通の用語法に從へば、我が思ふ事はまづ滯りなく讀む者の心に通ずる。かくの如き文を稱して達意の文といふので、而して修辭とは達意の文に施す修飾の謂ひに外ならぬ。故に論旨を供する事、用語法を敎へる事は、共に修辭の本領でない。修辭の本領は與へられた趣意を遍通の語法に從つて適切に美しく言ひ表はすにある、文章を達意以上、間に合ふ以上に美しくする事卽ち修辭の本領である。

二　修飾の効力

例へば「朝日が梅花を照らす。」といふ事を書き表はすとせよ。「梅花旭日に映ず。」「梅花朝日に照らさる。」「梅が香ふ、朝日が照らす。」「梅花に朝日。」他にもいろ〳〵あらうが、是等はいづれも文法に合つて思想の筋だけはよく現はれて居り、間に合ふ、役に立つ、正しい文である。しかし、唯だ間に合ふ、正しい、といふだけで、趣致風韻の味はふべきものは殆んど無いが、一たび修辭の文飾が之れに加はると、面目忽ちに一變して、一脈の春溫がどこともなく讀者の心胸にしみわたるやうになる。

梅が香にのつと日の出る山路かな。　（芭蕉）

言ひ表はす事柄は殆んど一釐一毫も違はずして、風韻は雲泥月鼈の相違である。こゝに至ると、「間に合ふ」「正しい」などいふ境は通り越して、神品已に廓界の物ではない。

かやうな例は幾つもあるであらう。「今日は暑いなあ。」とは誰れも思ふ夏の日の感想だが、「いふまいと思へど今日の暑さかな。」といへば盡きぬ味はひの生じて來るのは何故か。「秋の夜の空に星が光る。」といふが如きありふれた事柄が

星すでに秋の眼を見ひらきぬ。　（紅葉）

の十七文字に現はれると、人をして一唱三歎せしめるのは何故か。「一雨降ればよい。」といふ平凡な思想が「あはれ一村雨のはら〳〵と降れかし。」の一句に人の心を動かすのは何故か。外ではない、修辭の文飾が加はつた爲めである。古來和歌が有りふれた事柄、誰れも思ふ思想を歌つて、人の心を和らげ、天地を動かし、鬼神を感ぜしめると稱へられたのも、半ばは修辭の力によつたのである。かくいへばとて、無論修辭が無中に有を生ずる力をもつて居るといふのではない。それは唯だ、與へられた思想事柄を種子とし、之れを核として其の周圍に相應はしい美はしい衣裳を纏つてやるだけで、たゞ此の衣裳の纏はせ方、裝飾の着け方によつて、いふにいはれぬ趣味光彩が添うて來るのである。例へば用語を選む事、語句の順序を定める事、本尊の思想に關係のある事柄を添へ加へる事などは、其の裝飾手段の主なるもので、かやうな裝飾手段が文章を美にし、清くし、强くし、莊嚴にする具合を知るのが、修辭研究のおもなる仕事である。

例へば「菓子がうまい。」といふ極めて簡單な事でも、その言ひ現はし方は限りなくあるであらう。筍だけを傳へるには、「菓子の有する味が我が舌の感覺に適する。」と機械的分析的に云つても差支なく、簡單にいへば「うまい」「おいしい」「食へる」「まづくない」でも事は足りる。順序正しくすれば「此の菓子は旨い。」ともいふべく、倒まにしては「旨いな、此の菓子は。」ともいはれる。或はうまい趣の一端を擧げ、又は美味に關する故事を句はして「涎を流す。」「舌鼓をうつ。」「頰が落ちる。」「食指が動く。」ともいふべく、誇張しては「日本一の美味ぢや。」ともいふべく、滑稽を弄しては、

必ず〳〵頰かぶりして食がりませ、油斷すりや頰が落ちるぞえ。（近松巢林子浦島年代記）

などもいはれる。「菓子がうまい。」といふ單純極まる事に關して一寸思ひついた所を擧げても、是れほどの言ひ表はし方があつて、それ〴〵に異なる趣味を現はすのである。況んや複雜、優美、高尙、深遠なる事柄を取り扱ふ時に於いてをや。修辭の功や大いに、其の範域や廣しといはねばならぬ。

三　文章修飾の三原則

さて文章の修飾は何のために用ゐるか、文を美ならしめんがためである。文を美ならしめるのは何の爲めか、人を感ぜしめんが爲めである。感ぜしめるとは、愉快ならしめること、心持よく

思はせることをいふ。然らば人は如何なる文章を見て心持よく思ふか。これが修辭の根柢をなして居る問題で、これが解ければ文章の修飾に關する Why（何故）、What（何物）、How（如何に）の問題は又を迎へて解けてしまふであらう。

そも〳〵感ずるには先づ理解せねばならぬ。理解せぬものに對しては興味を感じやうがなく、又解りよいといふ事其の事が、すでに一種の快感を起こさせる、故に文章が人を感ぜしめるには、まづ趣意が明らかに表はされねばならぬが、此の方は申分が無いとして、其の上にどんな工合に出來て居る文章が、人に心持よく思はせるかといふに、ひそかに考へる所では之れを說明すべき主要なる原則が凡そ三つある。それは調和の原則、結體の原則、增義の原則の三つで、尙ほ委しくいへば、人の心は調和したる文章を見て喜び、結體したる言表を見て喜び、內容の豐富なる文章を見て喜ぶやうに出來て居り、此の性質によつて、文章の美を根本的、心理的に說明することが出來るといふのである。

四　調和の原則

こゝに調和といふのは、整齊、相應、諧和、自然等の意味を取りすべていふ。吾等人間の精神作用は、本來齊整し、諧和し、相應に無理なく言ひ表はされ、形づくられた文章を喜ぶやうに出來て居る。まづ全體の組立についていへば、各部分のよく調和して美はしく統一された文章が、讀む者を喜ばすのは論の無い事である。各部分の段取、章句の接續について見ても、前句後句授受の工合が無理なく次第されて、自然に滑らかにすべり行くのが面白い。一句、一語、一字の末について見ても亦其の通りで、口に唱へて調子よく、耳に聞きよく、目に見よく、心に感じのよいのが、最も人を喜ばせる。內容と形式と、思想と文辭との關係も亦その通りで、吾等は思想が相應な辭句に表はされたのを喜び、わざとらしく不相應に表はされたのを厭ふ。歌にすべき思想は歌にし、小說にすべきは小說にし、劇にすべきは劇にし、華やかに表はすべき材料は華麗にし、嚴かに表はすべきは莊重にし、簡潔にすべきは簡潔にし、詳密にすべきは詳密にする。かくして始めて立派な作品と仰がれる。修辭の眞の役目は思想をして當さに取るべき形を取らしむるにあるといふのは此處である。

例へば山部の赤人の

和歌の浦にしほみちくればかたをなみ蘆邊をさして田鶴鳴きわたる。

といふ歌の絶妙といはれるのは、一つは用語や句立が、いかにもよく此の景色に調和し相應して居るからである。能因法師が

山寺の春の夕暮來て見れば入相のかねに花ぞ散りける。

といふ作のよいのは、その文句が春の山寺に於ける落花暮鐘の淋しみに適合して居るからである。某といふ坊さんが那智の瀑布をよんだ

底つ岩根つきつらぬきて普陀洛や奈落におつる那智の大たき。

といふ歌の面白いのは、その強いぶつかり調子が、瀑布の岩根に突きあたる凄じき光景に適合して居るからである。芭蕉が

荒海や佐渡に横たふ天の川。

の妙なのは、幅のある大きい詞が壯大なる景色に調和して居るからである。

燈は暗し數行虞氏の涙、夜は暗し四面楚歌の聲。

の面白いのは、美しい句が面白く對をなして居るからである。『方丈記』の

あるは露おちて花殘れり、殘れりといへども朝日に枯れぬ。

といふ文章の面白いのは尻取文句がよく聯接して口調がよい爲めである。

揃うた〳〵踊子が揃うた稻の出穗よりなほ揃た。

醉うた〳〵〳〵五勺の酒に、醉うた心はゆらの助。

といふ歌の面白いのは類似した句を繰り返して口調がよく、又その口調が内容に調和して居る爲めである。之れに反して石川雅望が同じ心をよんだ、

酒をたうべつ五さくの酒を一合たうべて醉ひいやましぬ。

盆の十三日に舞人はそろひつ、稻の穗よりもいとよく揃ひつ。

といふ歌の氣がぬけて面白くないのは、一つは口調のわろいため、一つは言葉が内容に適合しないためである。

譬喩や古事古語を引く場合なども同じことで、よく本義に調和して、直ぐに類似の點の見出だされるのが嬉しく、かけ離れた小むづかしいものや、引事が重になつて本義の主位を奪ふやうなのは面白くない。

要するに、小は一字、一句、一語の選擇按排より大は一篇全體の組織に至るまで、調和して、相應して、整齊自然なる文章がよく人の心を喜ばしめる。調へるを見て喜ぶのは人心自然の傾向である。文章修飾の一部分は此の點より見て解釋することが出來る。

五　結體の原則

近松門左衛門の名作『丹波與作』といふ淨瑠璃に、小萬といふ女主人公が、其の父が稅金未進のため水牢に入れられると云ふのに驚き、男の與作に相談しようと思つて歸りを待つて居るところへ、與作が博奕に負けて歸つて來る。小萬は腹立つて與作を罵る。之れに對して與作がわびた、其の詞に、

しこり博奕の榮耀とは、さりとは小萬むごいぞや、皆これそなたの親の爲め、胸に書付あるならば、此處がたちわり見せたいと打ちたゝいたる胸當も、しほるばかりの恨み泣き、小萬これはと手を合はせ……

と書いてある。思ふ事いはねば腹ふくるゝともいふが、思ひには形が無い。若しまことに胸に書付のあるものならば斷ち割つても見せたいといふのが人情であらう。

結體の原則は固めの原則というてもよい。抽象的の事を具體にし、空漠な捉へ難い事物に形を與へて固めて見せる文が面白く感ぜられるといふのである。凡そ抽象的の事ほど理解し難いものはなく、而して理解しない所には趣味も起こらぬ。餘程學問のある人でも、譬喩例證によらずして抽象の理義を會得するのは容易な事でない、並一通りの人々は尙更の事であらう。然らば如何にして解りにくい理義を容易に會得させ、趣味のない物に風情を添へ、漠然たる事を活き〳〵と感ぜしむべきかといふに、その一つの方法は、無形の事を有形の物によそへ、薄きを濃くし、漠然たるを凝固せしめて、人の心の上に有り〳〵と形を結ばしめるに在る。言ひかへれば精神上の事を感覺上の事にたぐへて、成るべく感覺的に、成るべく物質的に、成るべく有り〳〵とつかまへ易くするにある。例へば、差別平等の關係は、哲學者も說くを難んずるものであるが、之れを扇や手に譬へて、「平等觀は扇をたゝみ手を握つて之れを一體と見るが如く、差別觀は之れを開きて其の指骨の一つ〴〵を分かち見るが如し。」といへば、空理は忽ち形を結んで、愚夫愚婦にも多少は合點が行くやうになる。「ろくにも知らぬ學問を誇る。」といふ抽象的の事を、「生かじりの學問を

鼻にかける。」といへば有形の口や鼻を思ひ浮かべる事によつて氣取屋の生意氣姿を目の前に見るやうに感ぜられる。だまされた事を「一杯食つた。」といへば、味感を思ひ浮かべる爲めに感じが深くなる。恥知らずを「鐵面皮」と云つて面白く、清貧なる人の心事を「身には襤褸をまとひても心に錦が着いたもの。」など云つて面白いのも、皆同じ道理によるのである。

物理學者の説によれば、水蒸氣は塵埃を核として結んで雨露となるものである。之れを知るには、まづ排氣鐘の内に水蒸氣を充たして、之れを冷やすに、如何ほど冷やしても露を結ぶことはないが、一たび其の中に塵埃をそゝぎ入れると、忽ちそれを中心として無數の露が結ぶといふ。結體の原則は感覺的材料の塵埃を供して抽象無形なる精神上の水蒸氣を結晶せしめることを敎へるものである。道理に深く人情に通じたる墨子も、形のある白糸を緣として始めて切に人心の惡に染み易きことを感じ、楊子も目に見ゆる十字街頭に立ち、之れを核として今更に人心の邪徑に迷ひ易きに泣いた。形あるによつて形無きを見るのは人心活動の常である。子を思ふ親の切なる心は、

人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな。

の形ある譬喩によつてしみ〴〵と感ぜられ、秋の暮れの哀れは、鳴や鳥を核として、

心なき身にも哀れは知られたり鳴たつ澤の秋の夕ぐれ。（西行）

枯枝に烏のとまりけり秋の暮。（芭蕉）

等の味はひある名句と結晶し、「仁」の意味を説いて「二人也」「心之德、愛之理也」などいふ儒者の抽象的解釋は、鳩翁道話の、

仁と申す事は、畢竟とんと無理の無いと申すことで御座ります。此の無理のないのが卽ち人の心ぢやと、孟子は仰せられました。此の無理のない心を以て親に事へまするとは孝行になり、主に事へますると忠になり、夫婦、兄弟、朋友の間も又々その通りで、五倫の道はやすらかに整ひます。その無理のない仕樣は親は親のあるべきやう、「子は子のあるべきやう、夫は夫のあるべきやう、女房は女房のあるべきやう、此のあるべきやうが無理のないところで、卽ち仁なり、また人の心で御座ります。たとへて申さば、此の扇は誰れが見ても扇ぢや。扇と知つてこれで鼻汁かむ人も、尻拭ふ人もない。是れはこれ扇のあるべきやう。禮儀に御用るなされるか、開いて風を求めるか、此の外に仕樣はない。此の見臺もその通りで、棚の代は

りにもならず。又枕のかはりにもなりませぬ。やはり見臺は見臺のあるべきやうに御使ひなさる。然れば親御樣を親御樣と御覽じたれば御孝行になされるが子たる者のあるべきやう、それが仁なり、人の心でござります。

といふ文章の、形のある扇や見臺の譬喩によつて解り易くない、從つて生命のあるものとなつた。人物の傳記などに逸話を挿む必要も亦之れより推して知られる。

吾等の心は、空漠なるを厭うて確實なるを喜ぶ、而して空漠なるものが確實に現はされ、抽象無形の事理が結體せしめられたのを見れば、自然に心地よく思ふ。これが結體の原則の敎へる所で、文章修飾の一部分は此の原則によつて說明される。

六　增義の原則

「危い」といふ事を「累卵の如し」といへば、當面の「あぶない」といふ事の外に「累ねた卵」といふ新思想が加はる故に、叙事が賑やかに面白くなつて來る。「年とつて父母の戀しさの外に戀人の戀しさがわかつて來た。」といふ事を

世の中に戀しきものは父母の外にあらじと思ひしものを。

といへば、言外に餘意がある故に、盡きぬ味はひが籠もつて來る。言ふべき事を云ふだけでは世は索寞たるものとなるであらう。又思つた限りを悉くいふやうでは世は味はひのないものとなるであらう。諺に「鬼に鐵棒」といひ、又「言はぬはいふにいやまさる。」ともいふ。此の二つの諺の敎へる所は、やがて增義の原則の敎へるところである。

增義の原則は思想意義の豐富なる文章が人を喜ばせるといふ事である。增義に、事を添へて豐かにするものと、略して想像の餘地を存するものとの二方面がある。病人垂死の果敢なさを譬へて「風前の燈に似たり。」といふのは前者で、新たなる事が添ふ故に場面が賑やかになつて來るのである。「大兵を送る。」といへば、それだけの事であるが、「雲霞の兵をたなびかして都にのぼす。」といへば、雲霞の遙かに棚引きわたる景色を想像する故に、一層の趣が添うて來るであらう。迷ふ事を「五里霧中に彷徨す。」といへば、霧といふ觀念が新たに加はる爲めに面白くなり、日本國を「豐葦原の千秋の長五百秋の水穗の國」といへば、數個の新觀念の加はる爲めに面白くなる。秀句の妙味なども此の點から說明される。例へば、

契りおく花と雙びの岡のべにあはれ幾世の春を過ぐさん。

といふ兼好の歌は、「雙びの岡」の一語の中に「花とならぶ」といふ意を寄留せしめた爲めに、面白くなり、下駄屋の宇兵衛といふが棧敷から落ちて死んだ事を或人のよんだ

棧敷からけたりと落ちてほくり(木履)死にあしだの(朝、足駄の)露と消えうへ(宇兵衛、うせ)にけり。

といふ狂歌は、四個の他の事柄が添うたので面白くなつた。此の方面からいふと、相應はしい景物を添へて本尊を飾るといふのが、此の原則の敎へる所である。

省略して想像の餘地を存する方の目的は、文章の間口を狹くして奥行を深くし、文字の數を少なくして餘韻を豐かにするにある。「起きて見つ寢て見つ蚊張の廣さかな。」の妙味は、亡夫を偲ぶ意を言外にあらはして、少ない文字の間に多くの意味を含めた所にある。「露の世は露の世ながらさりながら。」の味はひは「さりながら」の後の本意を言はずして、それだけの意味を豐かに十七字に寓せしめた所にある。「惣領は尺八を吹くつらに出來。」は、鼻の下の長い事を言はないので面白く、「唐崎の松は花よりおほろにて。」は「おほろにて」の後をいはぬ爲めによい。川柳に

鶏があくびをしたとつんぼいひ、

講釋師見て來たやうな嘘をつき。

の如く連用止めを用ゐて、句末を文法的に切らないのも、餘韻を殘して意味を豐かにするためであらう。或は正面からいふべきを裏面からいひ、定めていふべきを疑問にするもの、例へば馬鹿子息を罵つて「お前のやうな良い子を持つて、人樣の前で私あほんとに肩身が廣くつて、どんなにか嬉しいよ。」といひ、懦夫小人と明らかに解つて居る人の事を書く場合に、わざと「善を見て行ふを得ず、惡を見て禁ずるを得ざる、之れを君子といふべきか。」といふ類ひ、その他省略的なる修飾は、凡べて此の原則によつて說明せらるべきものである。

以上三原則の示すところ、之れを約めて客觀的にいへば、寫す所の事物の異なるに從つて、それ〴〵相應なる修飾を用ゐよといふに歸し、主觀的にいへば、人の心情工の働き合を見て、之れに一致せしめよといふに歸する。

要するに文章は、基礎の方面から云へば、思想を滯りなく傳へるものでなければならぬ、修飾の方面から云へば、極めて自然に相應はしい裝飾を加へねばならぬ。前の註文は實用文を初め凡

べての文章について云ふべき事であり、後の註文は特に文學的文章について云ふべき事である。

七　譬喩三式

文章を美しくする修飾のうちで、著しく人の目にとまるものの第一に譬喩法を數へることは萬人異存の無いことであらう。演說を聽いて此處よと案をうち、文章を讀んで思はずつり込まれるのは、多くは巧い譬喩に逢着はした時である。譬喩法は大昔から夥しく詩人文學者に用ゐられ、又文章論者にも目を着けられて、いろ〳〵と議論された。西洋の修辭學者は、あらゆる修飾法の中古來最も多く用ゐられたのは譬喩だとも云つて居る。

我が國從來の修辭論者が「喩」の字をつけた修飾法は澤山あるけれども、譬喩の中の譬喩、純なる譬喩といふべきものは次ぎの三種である。それは直喩法、隱喩法、諷喩法の三つで、假りに稱して譬喩三式と云つてもよい。

直喩法

直喩法をば、英語ではシミリー(Simile)といふ。直喩とは喩へる物と喩へられる物とを別けて比較する方法で、あらゆる譬喩の中で一番素直な一番はつきりしたものである。此の法を用ゐる場合には、「譬へば——似たり」「恰も——如し」といふ風に、二者の類似して居る所以を明らかに斷るのが普通になつて居る。但し、かやうに斷らずして而も立派に直喩になつて居るものも無いではない。例へば、「芙蓉は面の如く柳は眉に似たり。」「德を好むこと色を好むが如し。」「悲しい事を聞かすと思へば、此の胸に鑪をかけ、肝を猛火で煎る樣な。」「死者を辱しめる者は丁度投げられた石に嚙みついて、投げた人に目をつけぬ小犬の樣なものである。」(ブラトーンの言)の如きは前者の例で、「樹靜かならむと欲すれども風停まず、子養はむと欲すれども親待たず。」「波濤の魚は浪を知らず、嚴家の子は嚴を知らず。」の如きは後者の例である。

直喩の修辭上の効用は二方面から見られる。一つは理解を助ける方面で、例へば池に似て大きいものと云つて、山國の人に海を敎へ、綿に似たる者と云つて、熱帶地方の住者に雪を想像させ、猫を以て虎を說き、親子の交りにことよせて佛と衆生との關係を說く類ひである。他の一つは本旨本文を飾る方面で、例へば美人を花にたとへ、危險なる有樣を累卵に譬へる類ひである。

さて是等のいづれの方面に屬するものでも、直喩を用ゐるには、其の譬喩は斬新でなければならぬ、言ひ換へれば陳腐であつてはならぬ。使ひへらした譬喩は氣の抜けた酒の如く、人を醉はすことが出來ぬものである。「人生朝露の如し。」「富貴浮雲に似たり。」などいふ譬喩は、昔は面白かつたであらうが、今は耳馴れ過ぎてもう人を感じさせる力がない。「瀑布」といふ語は、もとは「たき」の落ちる狀を瀑らした布に譬へたのであるが、今は使ひへらされて「瀑布の九天より直下するさまは、布を瀑らせるに異ならず。」などいふ不思議な文章が現はれるやうになつた。新しい、奇拔だ、思ひ設けぬ、といふ事は、常に譬喩に缺くべからざる要件である。

次ぎに譬喩は適切穩當でなければならぬ。圖はぐれに大きいものや、小さいものに譬へ、又は穢いもの、下品なものに譬へるなどは避くべきことである。激戰の吶喊の聲を蜂の音に比し、煙草の煙を富士山の煙にたとふるなどは、趣味を破壞するもので、相應な譬喩とはいはれぬ。小人を肥柄杓にたとへ、名優の技を見て心ゆく趣を、瘡のあとを微溫湯でたでる心地に比べるなどは、下品な、きたない、忌らしい譬喩である。「風馬牛相關せず。」などいふ譬喩も、漢語の、しかも古い譬喩で、人が餘り知らぬからこそ幸ひ、眞の意味がわかつたら、御座のさめたものであらう。

譬喩の適切穩當なるを要すること多言を要せずして、明らかである。

最後に、譬喩は、類似が直ぐに見出だされるやうでなければならぬ。俗世間の事を說くに專門學上のむづかしい譬喩を用ゐ、手近な村里の事を說くに註釋を要するやうな外國の故事を引いて來るなどは、注意して避くべきことである。

要するに、譬喩を用ゐる主なる目的は、理解を助け、文を面白くするにある、言ひかへれば頭を痛めずに樂しんで讀ませるにある。直喩を用ゐる者は常に此の根本義に眼を着けねばならぬ。左の例の如きは、直喩の性質及び之れを用ゐる手心を明らかにする上に多少の効能があらう。

高適は、五十にして始めて詩を學んで少陵にほめられ、蘇老泉は三十にて始めて學問して文章の名を得たり。詩文のみにあらず、師廣が敎に、若きより學ぶは朝に出で行くが如し、中年にしてするは、日中に行くが如し、老いて學ぶは燭を取つて夜行くが如し、學ばざるにはまされり。古詩に云ふ、少壯不二努力一、老大徒傷悲。此の心あらむ者、若きはつとむべし、老いたりとも捨つべからず、燭なくて夜行かむは危からずや。（林羅山『野槌』）

私がそんな政府（幕府）なら叩き潰して仕舞ふが宜いぢやないかといふと、尺振八が、爾うだ其

の通りに違ひない、けれども斯うして船に乘つて亞米利加に往來するのも幕府から入用を出して居ればこそだ、御同樣に喰つて居るものも着て居るものも幕府のものではないか、それを衣食して居ながらそれを潰すといふのは、何だか少し氣に濟まないやうではないか。それは構はぬ御同前に此の身等が政府の御用をするといふのは、何も人物がエライと云つて用ゐられて居るのではない、是れは横文字を知つて居るからといふに過ぎない、之れを譬へば革細工だから穢多にさせると云ふと同じ事で、マア御同前は雪駄直しを見たやうな者だ。幕府の殿樣方は汚い事は出來ない、幸ひ此處に革細工をする奴が居るからそれにさせろといふので、デイディが大きな屋敷の御出入になつたのと少しも變はつたことはない。それに遠慮會釋も糸瓜も要るものか颯々と打毀してやれ。（福澤諭吉「福翁自傳」）

漢國などは、道乏しき故に却りて道々しき事をのみ云ひあへるなり。儒者はこゝをえ知らで、皇國をしも道なしと輕しむるよ。儒者のえ知らねば、萬に漢を尊きものに思へる心は、なほさもありなむを、此方の物知人さへに、これをえさとらずして、かの道てふことある漢國を羨みて、強ひてこゝにも道ありと、あらぬことのみをいひつゝ爭ふは、譬へば猿どもの、人を見て毛なきぞと笑ふを、人の恥ぢて、おのれも毛はあるものをといひて、細かなるを強ひて求め出でて、見せて爭ふが如し。毛は無きが貴きをえ知らぬ癡人のしわざにあらずや。

（本居宣長「古事記傳」）

西洋の一修辭學者が斬新な活きた譬喩として引いて居るのに、かういふのがあつた。或る處に老牧師が居つたが、うらゝかな春の一日、田舍道を行く途中で、檀家の小娘が洗濯をして居るのを見た。老牧師は立ち留まつて「お孃さんお精が出ますね、あなたは此の間わたしの話した御說教をよく覺えて居りますか。」といふと、小娘は「イヽエ、もう悉皆忘れてしまひました。」と答へた。老牧師は「折角の御說教を忘れてしまつては、何にもならないぢやありませんか。」と、いさゝか不機嫌な顏つきであつたが、之れに對する小娘の答が面白かつた。「そんな事はありません。牧師さん、私の洗濯した此の布を御覽なさい、かうして物干にかけておくと、水氣はいつの間にか無くなりますが、布は段々清潔になります。それと同じ事で、御說教は忘れても心は段々清くなります。」直喩を用ゐる手心は、まあかうありたいものである。

隱喩法

艱難汝を玉にす。

水緣にして詩を釣るべし。

形こそ深山がくれの朽木なれ、心は花になさばなりなむ。

文字通り、事實通りの理窟からいへば、人間は鑛物でなければ、玉にされやうがなく、詩歌は魚ならねば、釣らるべき筈がなく、人の姿、心は草木ならねば、朽木とも花ともいはるべきものではない。が、かう云つて少しも無理と思はれぬのみならず、却つて深く人の心を喜ばすのは何の爲めであらうか。

これは事實に背いて而も人情に合し、理窟以上に出でて而も理窟の容喙をゆるさぬ修飾法の一つで、修辭學者の謂はゆる隱喩である。英語ではメタフオア（Metaphor）といふ。隱喩とは表面上譬喩の形式を沒して、譬へるものと譬へられるものと、言ひ換ふれば本旨と譬喩とを一つにしたる文飾で、直喩の近道を行つたもの、直喩から一桁外したものである。例へば、「汝を玉にす。」と

は「汝を玉の如きものにす。」といふ意で、つまり玉が鑛物界のすぐれ物であるやうに、汝も艱難辛苦すれば人の中のすぐれ者になれる、といふことに外ならぬ。卽ち隱喩は、直喩から「如し」「似たり」「譬へば」といふやうな譬喩の形式を取り去つたもので、西洋の修辭學者が「無駄のない直喩」「壓搾した直喩」「煎じつめた直喩」（Compressed or condensed Simile）など云つて居るのは此の爲めである。要するに隱喩の面白味は、無駄が省かれ、簡潔にされて、勢力があり、且つ想像の餘地がある上に存するといつてよい。

シェークスピーアが「借金は儉約の鋒先を鈍らす。」と云つたのや、『論語』に「仲尼は日月なり、得て踰ゆることなし。」といつてあるのや、伊太利のマッヂニの言に「人間は男性女性二絃の樂器なり。此の二絃知るべからざる妙手に奏でられて、人生てふ大音樂の妙調をなす。」と云つたのや、我が古歌に「我が家は靑天井に地のむしろ月日を燈火風の手箒。」とあるのなど、皆味はひのある隱喩である。尙ほ二三の例を擧ぐれば、

げにや處の名にし負ふ、とくさが原の夕月は、嵐や磨き出だすらむ。伏屋に近き軒の山、ありとは見えて見えざるは、もし又雲やかゝるらむ。（「曾我物語」）

源氏の物語など、其の事實はたはれにたはれて、實なる人の手に取るべくもあらねど、其の言の國ぶりにして、花のごと匂やかに玉のごときら〳〵しければ、敷島の道に遊ぶ人の限り、皆材を求むる柚とし、みるめかる渚とす。（伴蒿溪『國つ文世々の跡』）

日蓮曰「今又流人となることも法華經流布の印ぞや、見よ〳〵追つ付け立ち歸り、權實二教の軍を起こし、忍辱の鎧を着て諸經中央最第一の旗を上げ、妙法文字の劍を帶き、未顯眞實の弓に正直捨方便の箭をはげ、權門入宗の門に押し寄せ、悉く切り從へ法華折伏破權門理の金言今に顯はし見すべきぞ。（集林子『日蓮記見硯』）

隱喩を用ゐるについて注意すべきことは、第一に譬喩の重用、第二に譬喩と事實との混淆である。譬喩を重ね用ゐるとは、例へば三日月を形容して「鎌形の弓張」といひ、大眼を形容して「額の上なる二面の鏡日月を並べかけたる如くなり。」といふ類ひである。譬喩と事實とを混ずるとは、「牛の肉を食ひ、爺の脛を嚙る。」といへば、親の世話になるといふ隱喩も、牛肉の關係から、實際爺の身體に齒を立てることとも取られる類ひである。『萬葉集』の資人金明軍が大伴卿を悼んだ歌に、

若き子の這ひたもとほり、朝夕の音のみぞ我が泣く、君無しにして。

とある如き、「嬰兒の如く這ひまはり」といふことであるが、初心の者には、幼兒は這ひまはりて悲み、我れは音を泣くといふ意に取られるかも知れぬ。隱喩は「似たり」といはずして直ちに「なり」といひ、譬喩を事實にして了ふ修飾なので、特に此の邊の注意を要するのである。

諷喩法

太閤秀吉公ある時微行せむと仰せ出だされけり。微行とは近習の侍わづかを具して外に出で遊び給はむとの事なり。されば數萬人を率ゐたまへばこそ太閤も太閤たれ、微行は危き事なれば、必ず諫め奉るべきに、恐れけるにや、諸臣たゞに畏まり居たるに、曾呂利新左衛門御前に在りて、例のつか〳〵と言ひ出だす。われ近き頃鞍馬山に行きたるに、かねて聞き及びし見越入道にあへり。入道我れを一口に呑まむとす。我れ曰はく、此の身そこもとに得さすべきは勿論なり、しかし其許に變化自在の術ありと聞く、願はくは我が一期の慰めに、其の大姿を梅干に變じて見せ給へ。それを見て後心よく此の身を得させむといひければ、入道忽ち梅干と變じわが前へ轉び來たる。我れ之れを手のひらに据ゑて、しばし慰む眞似し、頓て口へほつこみ、屎にひりて歸りたり

と語れば、御前皆大笑ひとなり、其の後微行の御沙汰は止みたりとぞ。

眞面目に諫言しては聽かれぬ事でも、似よつた餘所事を擧げて本旨をほのめかせば喜んで用ゐられる。怒られ、叱らるべき場合にも、平穩無事に笑つて、圓く事がをさまる。若し此の場合に、正面から四角張つて諫言したら、其の結果はどうであつたらうか。きかぬ氣の猿面冠者、叱り散らし、あたり散らして、聚樂の第に時ならぬ大暴風が吹き荒まうものを、さすが曾呂利だけあつて、はかなき寓言的笑話によつて、波瀾を未然に防いだのみならず、また太閤の一身をも安全ならしめた。

かく表面上、本旨を全く隱して唯だ譬喩のみをあらはし、譬喩を透ほして本旨を推察せしめる修飾法を諷喩法又は寓言法といふ。英の修辭學の謂はゆるアレゴリー(Allegory)に當たつて居る。此の法は隱喩よりも尙ほ一歩を進めたもので、譬喩の形式手續を省いたのみならず、譬へらるゝ主人當體をも全く取り去つたもの、言ふべき本物は幕の陰に隱しておいて、唯だ類似した影だけを見せるもの、譬喩を極度に煎じ詰めたものである。

前の例を見てもわかる通り、此の法の用ゐられるのは、殆んど諷刺教訓の場合に限られて居るが、之れを用ゐるについて注意すべきことは、容易く本旨を思ひ出だし得ること、及び容易く本旨を曉り得る人に對してのみ用ゐべきことである。此の法の適切な例と見るべきは、桃太郎、舌切雀、猿蟹合戰、禍富草紙等の御伽噺、エソップの寓言譚などであるが、廣くいへば、小說戲曲等の想像的作物は悉く一種の諷喩とも見られる。

其の腹に何が不足ぞ泣く蛙。

蛙はたゞ教訓の材料に使はれただけで、本旨は無論寡欲淸廉を敎へるにある。

城代に化けて瓜食ふ狐かな。　（几董）

狐はお上を笠に着て官物を私し賄賂を貪る役人の代理をして居り、瓜は官金官物、若しくは民の財產の見本になつて居る。名譽な狐、果報いみじき瓜であるが、同じ事でも、かういへば、有司の耳にも柔らかに饗いて多少は悔悟の念を起こさしめる種ともならう。

加賀の千代が「怨に報ゆるに德を以てす。」といふ心を歌つた

手折らるゝ人に香るや梅の花。

は、表面は一枝の梅の花でも、其の內には佛者の捨身、耶蘇敎の「汝の敵を愛せよ。」などいふ高

尙な教訓を含んで居る。

韓退之の「雜說」にいふ。

龍嘯けば氣雲となる。雲は固より龍よりも靈ならざるなり。」然れども龍是の氣に乘じ、茫洋として玄間を窮め、日月に薄り、光景に伏し、震電を感じ、變化を神にし、下土を水にし陵谷を汨す。雲も亦靈怪なるかな。」雲は龍の能く靈たらしむる所なり。龍の靈の如きは則ち雲の能く靈たらしむる所にあらざるなり。然れども龍雲を得ざれば以て其の靈を神にすることの無し。其の憑依する所を失へば信に不可なるか。異なる哉、其の憑依する所は乃ち其の自らの爲す所なり。」易に曰はく雲は龍に從ふと。既に龍と曰へば雲之れに從ふ。

謝疊山が此の文を評して「此の篇の主意、聖君、賢臣無かるべからず、賢臣聖君無かるべからず、賢聖相逢ひ精聚り神會して、斯に能く天下の大功を成すをいふ。龍は聖君を指し、雲は賢臣を指す。」と云つて居るのを見ても明らかなる通り、龍と雲とはほんの見本で、其の奥には天下經營、德教振作に關する大きな理想が潛んで居る。而して底なる本旨、奥なる主人公の、外面に現はれざる所、取りも直さず此の法の床しく奥深くして、汲むに盡きざる味はひのある所である。言はぬはいふにいやまさるといふ諺は、最もよく諷諭の妙味を言ひ現はして居る。

譬喩三式のうち、直喩は形式が素直で單純なだけに、一番使ひ易く、技巧を要することが最も少なく、從つて何人が用ゐても危な氣がない。隱喩は一桁はづした譬喩だけあつて、用ゐ方に多少の呼吸があり、妥當の譬喩でも言ひ表はした方が不自然だと、全く物にならぬ場合が往々ある。最後に使ひこなす手心の一番むづかしいのが諷喩で、こゝには言はずして而も言つたよりも明らかなるやうに、不透明體を用ゐて而も陰なる物體の明らかに辯へらるゝやうに、人の氣に障らずして而も其の心に染み〴〵と感ずるやうに、などいふいろ〳〵の註文がある。此の三式が自由に使ひこなせれば、文章の呼吸の一部はまづ手に入つたものと見ても差支ないであらう。

八　人化と物化

朝顏は地を這ふことをあぶながり。（千代女）

白露や無分別なるおきどころ。（西山宗因）

星すでに秋の眼を見開きぬ。（尾崎紅葉）

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる。（芭蕉）

青い松葉の深切御覽じ枯れて落ちても二人づれ。（俗歌）

右の例に見る如く、生命の無いものに生命を與へ、動かぬものを動かしめ、言葉なきものに物いはしむる文飾、言ひ換ふれは無生物を生化し、無生物、下等動物或は精神作用等を人間化する修飾法を稱して、擬人法又は活喩法といふ。右のうち、「白露」「星」の二句は、無生物を人化したもの、「朝顔」「青松葉」の二句は、植物を人化したもの、「旅に病んで」の句は夢といふ無形の精神作用を人に擬へたものである。此の修飾法の中には、「矢石飛ぶ。」「草木喘ぐ。」といふやうに、單に無生物に生命を與へただけ、卽ち生化しただけのもあるが、多くは人化したものである。人化は生化の極致である故に、此の修飾法を總稱して擬人法ともいふ。

擬人的逸話は、古人の行爲に於いても、詩歌文章に於いても、少なからず言ひ傳へられて居る。白河天皇が法勝寺を御建てなされた時、連日法會を行はせられたが、屢雨に妨げられた。法皇は大きに怒らせられ、雨を器に盛つて獄に下されたといふ話がある。これは雨を人間扱ひにしたのである。

支那の三國史に名高い魏の曹操の子に、曹子建といふ才人があつた。子建の兄に當たる魏の文帝は、かねて弟子建の才を嫉んで居られたが、或時難題を出して七歩あゆむ中に一篇の詩を作れ、出來ねば罰を加へるといはれた。此の時子建が聲に應じて作つた詩は、名高い「七歩詩」である。

煮レ豆燃二豆萁一、豆在二釜中一泣。本是同根生、相煎何太急。

釜中に煮られる豆が、燒きつける箕に向つて、「同じ根から生まれ出た兄弟ではないか、そんなにいぢめずとも、よささうなものを。」と云つたといふ意味で、物いはぬ豆の口を借りて文帝に對する己が胸中を語つたのである。兼好の『徒然草』に、書寫山の性空上人が豆のからを燒いて、煮らるゝ豆のツブ〳〵と鳴るを聞けば「疎からぬ己等しも恨めしく我れをば煮てからき目を見するものかな。」と云つた。燒かるゝ豆がらのパラ〳〵と鳴る音は、「我が心よりすることかは、燒かるゝは如何ばかり堪へ難けれども、力なきことなり、かくな恨み給ひそ。」と聞こえた、などあたのは、七歩詩より思ひついたものらしく、いづれも植物の豆や箕を人になぞらへて物いはしめたのである。

佛蘭西の大ナポーレオンが埃及遠征の軍を起こし、大金字塔のほとりで激しく戰つた時に、彼れは兵士の勇氣を引き起す爲めに、ピラミッドを指ざして、「兵士等よ四十世紀は汝等を瞰下しつつあり。」と云つたといふ。蓋し埃及の盛時は今より四千年前で、而して當時に立てられた金字塔は爾來四十世紀の星霜を經過して居るからである。此の一言に佛軍の兵氣は俄かに振ひ立つて、花々しい捷軍をしたと言ひ傳へられて居る。これは時間を人化したものである。

いろ〳〵の擬人法のうち、一番に單純なのは非情の事物に人間の名をつけてやるのであらう。例へば、鳥に藤九郎(信天翁)あり、犬に翁丸あり、鷹に綠丸あり、魚に鯛の婚三八郎あり、山に安達太郎あり、川に筑紫次郎(筑後川)あり、舶に佐伯あり、阿武丸、龍神丸あり、刀に髭切丸、小烏丸あり、笙に菊丸あり、横笛に音丸あり、貨幣に圓助あり、雲に丹波太郎、坂東太郎あり、小麥餅に五郎四郎あり。かやうな類ひは皆一種の擬人法と云つてよい。支那人が酒を酒兒、扇を扇子、空室を空房子などいふのも、此の種の擬人法と見るべきものであらう。

右に擧げたのは命名的擬人法ともいふべきものであるが、これに比して幾らか複雜なのは、無生物を有情物あしらひする法である。例へば禿頭の狂歌師が鎧禿といふ岩山の名所に對して、

鎧はけ對のかぶとがほしいなら、わしが頭を賣つてやらうか。

と咏んだのや、或は『古今集』の

吹風にあつらへつくるものならば、この一本はよきよといはまし。

の歌の如き、或は山口素堂が「蓑虫說」に

蓑虫〳〵、聲のおほつかなきをあはれぶ。ちゝよ〳〵と啼くは、孝に專なるものか。いかに傳へて鬼の子なるらむ。淸女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも瞽叟を父として舜あり。汝は虫の舜ならむ。

と云つた類、皆無生若しくは非情なる相手を人間あしらひしたものである。但し是等はたゞ、人間あしらひしたといふだけで、まだ無生非情の事物をして活動せしめ物語せしむるといふ段には行かぬが、擬人法の精髓は非情の事物を活動せしむるにある、殊に非情物に物語せしめるのは擬人法の極致である。世界諸國の神話、御伽噺、寓言などには、此の種類の擬人法が甚だ多い。

非情物をして活動せしめ物語せしむる擬人法とは、例へば、「猿蟹合戰」「かち〳〵山」「鬼ヶ島退治」兎が大國主命に助けられた話、或は「毛穎傳」「一圓紙幣の來歷談」などの類ひである。

はらゝごのしやうじ年魚、その先東海の人なり。文治の頃源廷尉きぐるみ王に從ひ、奥州高舘の亂を避けて蝦夷に入る。よりて名を變じてさけといふ。石狩の川邊に住み、いちごといへる妻を娶りて子を產む、名づけてはらゝ五郎といふ。源順が和名に、その子いちごに似たりといへるは、此の故なり。年魚その顏の色極めて赤し、人呼んで赤光と異名す。性急にして進むことありて退くことなし。その年の秋に至りて百千隊をなし、士卒を率ゐて石狩の川にのぼる。一尺の劍をふるつて鎌倉を襲はむとす。佐々木三郎盛綱討手にむかひ、其の旗頭楚割四郎なる者を打ちとり、首を折敷に据ゑ、小刀を相副へ幕府に獻ず。……年魚戰利あらずと雖も、その太刀風に當たれるもの、三年の舊疵起こりて悉く死せしとかや。

（蜀山人『初鮭傳』）

つはものの軍に出づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ身をも忘る。世を背ける草の菴には、しづかに水石を弄びて、これをよそに聞くと思へるはいとはかなし。靜かなる山の奥無常の敵きほひ來たらざらむや。其の死に臨めること軍の陣に臨めるに同じ。（『徒然草』）

擬人的の言ひ表はし方は大昔から行はれたもので、我が『古事記』『日本紀』の神代の卷にある記事の如きは、大半擬人的と云つても差支ない。これは大昔の人間が天地萬物に對して、概ね之れを自分同樣に生命あるもの靈力あるものと看做し、從つて種々の現象に對しても、何故に然るかと尋ねずして、何者の然するかと考へたからであらう。彼等は動物はいふに及ばず、草木をも、國土をも、肢體血液をも人化した。『古事記』のイザナギ、イザナミ二神、國生みの段に「次ぎに伊豫の二名の島を生み給ふ。此の島は身一つにして面四つあり。面毎に名あり、故伊豫の國を愛媛といひ、讃岐の國を飯依彦といひ、阿波の國を大宜都媛といひ、土佐の國を建依別といふ。」とあるのは、南海の四國を各々男女の人間に擬へたのである。イザナギの尊が黄泉の國より追ひせまる厭軍を妨ぎつゝ逃げ還られた時に、比良坂といふ所で、坂の下なる桃の實を取つて投げつけられたので、厭軍が悉く逃げ還つた、其の時、尊は桃にむかつて「汝吾を助けしが如葦原の中つ國にあらゆる愛しき青人草の苦瀨に落ちて苦しまむ時に助けてよ。」とのたまひ、其の桃の實に大加牟豆美命といふ名を賜はつたといふ。是れは果實を人化したものである。

擬人法を、英語では普通には Personification といひ、また Animation, Prosopopoeia ともいふ。擬人法が無生物を生化し、非情物を人化するのに對して、生物を無生物化し、動くものを靜化す

る修飾法がある。結晶法、物化法、或は擬物法ともいふべきものであらう。活き字引、腰巾着、懐刀などいふのは皆之れに屬するもので、左の例の如きも皆さうである。

巡禮の棒ばかりゆく夏野かな。（松江重頼）

横濱へ日本魂おき忘れ。（ポーツマス談判に赴ける使臣を）

小春を踏む足で、うろたへたおのが根性をなぜ踏まぬ。（巣林子「天の網島」）

爭はぬ風の柳の糸にこそ、堪忍袋縫ふべかりけれ。（鹿都部眞顔）

人化と物化、擬人法と擬物法、いづれを用ゐるにつけても、常に注意すべきは、成るべく節約して適當な場合にのみ用ゐるやうにすべきこと、其の言ひ表はし方の極めて自然なるを要することである。

九　省略的修飾

蘇東坡の言に、「作文の法、意盡きて言止まる者は天下の至言なり、然而して言止まつて意盡きざるを、最極至とす。禮記、左氏の如き見るべし。」というてある。これは無駄を省いて煎じ詰められるだけ、煎じ詰めることが、名文の一資格たる事を道破したのである。

文章に限らず、藝術に於いては、凡べて勢力、材料を浪費せぬことが必要である。佛蘭西の或音樂家が、唱歌の呼吸を說いて云うたには、「唱歌を稽古するものは、先づ氣息を無駄費ひせぬやうにせねばならぬ。氣息を無駄費ひするか、せぬかを驗すには、蠟燭を點し、其の直ぐ前に口を開いて高く歌を唱つて見るがよい。下手が唱へば直ぐに消えて了ふ。多少修業を積んだ者が歌ふと、消えはせぬが焔がゆらぐ。名人になると、如何ほど高く發聲しても焔が少しも動くことがない。其の理由は名人の呼き出す氣息は悉く音聲に化して了ふ故に火にあたらぬが、下手の氣息は氣息のまゝ卽ち空氣のまゝで出る故に、風となつて火を消すのである、と云つて居る。

餘白あれば山書きたがるが、平凡繪師の證據であるやうに、思ひ浮かべただけの思想文字を悉く列べるのは、平凡文章家の證據である。童幼に授ける文、達意を主とする說明文ならば兎も角、詩歌美文などいふ際の文學的文章に於いては、有る限りの材料を並べるよりは、寧ろ中心になる感想のみを露はして、之れに附屬する小感想をば、讀者の想像に一任するがよい。美文に要とする所は臚列するにあらずして指示するにある、Detail（細大漏けつくす）することにあらずしてSuggest

（根幹を示して枝葉を暗示）するにある。言ひ換へれば讀者が骨折らずに想像で補ひ得る程の事は、わざと省略して言ひ表はさぬことが文章に力あらしめ、含蓄あらしめ、餘韻あらしめる一つの祕訣である。かく言表の精細を要とする文章に於いて、當然言ひ表はすべき事をば、故らに省略して想像の餘地を存する修飾法、之れを稱して省略法といふ。英語の Paralipsis, Omission, Abbreviation などいふ語が之れに當たつて居る。

此の法の好い例は、俚諺、格言、俳句などいふ短い形式の文章の中に多くある。例へば「犬は夜を守る。」といふ諺は、詳しくは「犬は夜間人の門を守る。」といふべきであらうが、「間人の門」等の語は、省いても讀者の想像で容易く補ひ得る故に、簡單に「夜を守る」と云つた方が却つて面白いのである。「劍は一人の敵のみ、萬人の敵を學ばむ」といふ項羽の言は、元來は「一人の敵に對する武技のみ。」といふべきであらうが、「に對する武技」は讀者の心でたやすく補ひ得る故に、略して面白くなつたのである。「七分いうて三分は俤に殘すべし。」といふ俳家の教は、よく此の間の消息を說明して居る。

省略法にもいろ〳〵あるが、其の最も簡單なのは、語を省くもので、其の中でも主なるものは主

語（名詞、代名詞等）を省くもの、及び、テニヲハ、助動詞等を省くものである。次ぎに掲げた近松門左衛門が『日本武尊吾妻鏡』の一節なる、日本武尊が梟帥を刺す條は前者の例である。

尊叢雲の御劍をかい込み、薄衣かづき梟帥を目がけ、向ふを見れば暴れにあれたる梟帥が勢ひ、おのれ待ち受け組んで伏せんと、待つとも知らず走せ過ぐるをやり過ごし、腕搦んでしつかと抱く、組まれて事とも脊を屈め、一ゆり搖つてふりほどき、大手をひろげて組み付くを、尊ひらりと御身をはづし後ざまに頭の髪、えいと掴んで引立つる。引立てられて千鳥足引き戻せは小踊りし、放さむ放さじ組まれじ組まむと、兩虎のはけみ難なく小脇に取つて引きつけ御劍に肝先一刀、ぐつとさしもの八十の梟帥、うんと仰氣に反りかへるを尙ほ〳〵强く捻ぢつけられ苦しむ息に、物申さむ、暫し〳〵と聲をかけ、何條おのれらが劍、刺すとも突くとも我が身には立つまじと思ひしに、苦しや堪へ難や、六魂六識を惱亂し、梟帥が最後今此の時、尋常に名乘つて刺せ、いぶかし汝は誰れぞと問ふ。誰れとは愚か景行天皇第二の皇子、以前手にかけ殺せしは、敷妙といふわが使女、神賢姫と名乘らせしは。おのれを討たむ計略、王位に背く天罰の劍覺えたるかとのたまへば、さればこそ〳〵……

「尊」「梟帥」と一々に斷れば文がだれて五月蠅くなるのを省略して、餘韻あらしめ、勢力あらしめ、兩虎奮鬪の光景を活躍せしめたのである。

テニハぬきで有名なのは、井原西鶴及び其の一派の文章である。左に擧げたのは、西鶴が『日本永代藏』の一節である。

物には時節、花の咲散、人間の生死、歎くべきことにあらず。然れども命は養生の一大事なるに、毒魚と知りながら鰒汁、これに風味かはらずして藻魚といふもの何の氣遣ひなかりき。

「物には時節あり、花の咲散も人間の生死も、今更歎くべきことにあらず……藻魚といふものは何の氣遣ひなし」などいはゞ、勢ひの拔けべき所を、テニハを省いた爲めに簡勁になつたのである。無用のテニハが文を弱くし、間拔けにすることは、今の青年の詩吟に「腰間の秋水は鐵斷つべし」

「去年の今夜は淸凉に侍し」「單衾は直ちに入る虎狼の窟、一匕は深く探る鮫鰐の淵、報國の丹心は獨力を慨き、回天の事業は空拳を奈せん。」などいふを見てもわかるであらう。

次ぎに此の省略法に比して多少複雜なのは句を省くものである。例へば、

同じ心にむかはまほしく思はむ人の、つれづれにて、今しばし（　）今日は心しづかに（　）など云はむは、此の限りにはあらざるべし、阮籍が靑き眼誰れもあるべきことなり。（『徒然草』）

次ぎに秀句的省略法ともいふべき、忌味な俗威しの省略法がある。前の句の尾と後の句の首とを一緒にして掛持にするもの、「百荷の草花をかりそめながら」「事治まつて世の中も靜御前は」「心ばかりが抱きあひせむ方なみだ先たてり。」といふ類ひで、謠曲淨瑠璃などに多く用ゐられて居るものである。此の省略法は趣味の低い俗人には歡迎されるが、多くの場合には、文品を低くし、目の高い人に眉を顰められるものである。まづ用ゐぬ方が安全というてよい。

もろ〳〵の省略法のうち、用ゐ方はむづかしいが、最も上品で安全なのは、書かうと思ふ事柄の要點だけ、或は表面の一部分だけを露はして、殘部を讀者の想像に一任するもの。言ひ表はされた小部分をして言ひ表はされぬ大部分を含蓄し、指示せしむるものである。百人一首にある阿倍仲麻呂の歌

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。

の如きは、其の適例であらう。表面は、空を仰いで見る月は昔見し月なるかな、といふだけであるが、其の底には故鄕を偲ぶ哀れなる深い物思ひが、あらはに云つたよりは遙かに床しくほの見

えて居る。謂はゆる言はぬはいふにいやまさる寫し方で、微妙、高遠、深刻なる思想感情は、此の法によらずしては言ひ表はすことが出來ぬであらう。陶淵明が「歸去來辭」の中の「悠然見二南山一」の句の如きも、表面は山を見るといふだけのことであるが、其の裡には脫俗の士が自然と交友して物我の境を離れた淸い高い尊い姿が、隱約の間に現はれて居る。

要するに、省略法は、無駄を省いて含蓄を多からしめるもの、言はずして言つたよりも多くの効果を收めむとするものである。尙ほ省略といふ立場より見て說明すべきものに、舉隅法、斷叙法などいふいろ〳〵の修飾法がある。

一〇 斷叙法

前項省略法を說いた中に、名詞、テニヲハ等を省くものといふのがあつたが、こゝに擧げた斷叙法は、それよりは多少複雜な省略法で、接續語を省くもの、平たくいへば、繫ぎ文句を省く省略法をいふ。卽ち接續語を省き、文句と文句との關係を斷つて、想像の餘地を多からしめる修飾法、之れを稱して斷叙法といふのである。斷叙法は英語の Asyndeton に當たる。

德川幕府創業の名臣本多作左衛門が、大阪の役に、陣中から江戸なる留守宅に送つた、

一筆啓上。火の用心。おせん泣かすな。馬肥やせ。かしく。

といふ名高い手紙は、斷叙法の好い例である。「一筆啓上致し候。先づ第一に火の用心油斷あるべからず、次ぎには……」などと取り繕へば、文字面が流暢に綺麗に整ふばかりで、氣力、餘韻の無い駄文となるべき所を、一切繫ぎ文句を省いて肝腎な中心思想のみをころ〳〵と列べ擧げた爲め、質樸簡明で、勢力あり、餘韻ある文を成したのである。

房州の或村に龜といふ朴訥剛力なる馬方があつた。ある横着者が彼れから馬を買ひながら其の代をよこさなかつたので、彼れは腹を立てて次ぎのやうな手紙を送つたといふことである。

一金五兩

右馬代。くすか、くさぬか、こりやどうぢや。くすといふなら、それでよし。くさぬとならばおれが行く。龜の腕には骨がある。

「くす」、「くさぬ」は「よこす」、「よこさぬ」といふことの方言であるが、これも斷叙的に出來てゐて、強くて餘韻があつて面白い。

雅文の方の例を擧げると、好んで此の方を用ゐて成功したのは、兼好法師の『徒然草』である。

身死して財殘ることは智者のせざるところなり。よからぬ物たくはへ置きたるも拙く、よき物は心をとめけむと果敢なし。こちたく多かる、まして口惜し。我れこそ得めなどいふ者どもありて、あとに爭ひたる、あさまし。後は誰れにと志す物あらば、生けらむ中にぞ讓るべき。朝夕無くてかなはざらむ物こそあらめ、其のほかは何も持たでぞあらまほしき。

若し普通の文に見る如く、「何となればよからぬ物……」「またよき物……」「若し後は……」などの隙間なく繋いでゆくならば、此の文の面白味の一半は失はれて了ふであらう。

『增鏡』の新島守の一節、承久の亂に、北條義時が雲霞のつはものをたなびかせて都に攻めのぼらせた時に、子の泰時を戒めた條の如きは、古文には見難き斷叙式の名文である。

（義時）泰時を前にするていふやう、己れを此度都にまゐらすることは、思ふところ多し。本意の如く淸き死をすべし。人にうしろ見えなむには　親の顏また見るべからず。今を限りと思へ。賤しけれども、義時君の御爲めに後めたき心やはある。されば横さまの死をせむことはあるべからず。心を猛く思へ。己れうち勝つものならば、二度此の足柄箱根の山は越ゆべしなど、泣く〳〵言ひ聞かす。まことにしかなり。又親の顏拜まむこともいとあやふしと思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今や限りと、あはれに心細げなり。

句々悉く斷叙、而して之れが爲めに、少しも意義の不精確、不明瞭を來たさずして、よく勢力と餘韻とを併せ現はしたるのみならず、義時、泰時父子が、頭熱し情激し、其の言に關繫をつけて整理し統一する餘地のない所が躍如として現はれて居る。斷叙法はかやうな場合に用ゐて最も効力のあるものである。

一一　擧隅法

西洋の修辭學書に、Synecdoche, Metonymy といふ修飾法が說いてある。シネクドキーは揭部法とも譯すべきもので、言ひ表はすべき事物の一部分だけを揭げ示して全體を推察させるもの、例へば「あのチョン髷は着實な事をいふ。」「此の高襟の言草が氣に喰はぬ。」といふが如く、老爺の身の一部分たるチョン髷、若者の身の一部分たる高襟だけを揭げて、老爺、若者の全體、全部分を推察させる類ひである。メトニミーは轉換法と譯してよい。言表の目的たる當の事物に換へる

に、これに關係のある事物を以てするもので、例へば記號と實物とを相換へて支那が日本に負けたといふ事を「黃龍旭日の前に斃る。」といひ、所有主と所有物とを相換へて、西洋人を碧眼紅毛といひ、原因と結果とを相換へて、近松の淨瑠璃、馬琴の小說を讀むといふ事を「近松、馬琴を讀む。」といひ、材料と事業とを相換へて、繪畫、苦學といふことを「丹靑」「螢雪」といふ類ひである。

西洋の修辭學、またこれを眞似た我が國の修辭學書では、概ね此の分類法に從つて、シネクドキーとメトミニーとを分けて說くが、思ふに、これは煩瑣な、不必要な區分で、兩方共に一部分を揭げて全體を察和せしめ、一隅を擧げて四隅を知らしめる一種の省略的修飾と見る方が穩當簡便であらうと思ふ。例へば、旭章旗、黃龍旗は日本、支那の記號とはいふものの、又日本支那の有する一部分卽ち日本、支那といふ觀念の中に含まるゝ一要素と見て差支がなく、碧眼紅毛はいふまでもなく西洋人の所有する物の一部分である。近松、馬琴、丹靑、螢雪、いづれも同一の理によつて說明することが出來るであらう。要するに轉換法卽ちメトミニーは揭部法卽ちシネクドキーの中に含まるべきものと云つて差支ない。本講に於いては、かやうな見方からして、二者を總括して擧隅法と名づけたのである。

擧隅法の目的効能の主なるものが二つある。一つは他の省略的修飾法と同じく、想像の餘地を存する點で、もう一つは事物の主眼點を取り出でゝ當の場所、當の場合に於ける當の事物の狀態をあり〳〵と活躍させる點で在る。英吉利の哲學者ハーバート、スペンサーは、文章上のあらゆる事柄を讀者の精神力の經濟といふ點から見て說明して居るが、此の擧隅法をも同じ理窟で說いて居る。例へば、A fleet of ten *sails*(十の帆より成れる艦隊)といふ文は、ten *ships*(十隻の船)といふよりは勝つて居る。何となれば、單に船といへば、讀者に靜止した船、船渠(ドック)に在る舟を思ひ浮べさせる憂へがあるけれども、帆といへば、海上航行の姿を直ちにあり〳〵と思ひ浮かべさせるからである。All *hands* to the pump.(凡べての手は喞筒(ポンプ)へ)は All *men*(凡べての人)といふのに比して優つて居る。何となれば凡べての人といへば、「喞筒を見ようとして集まつた人」といふ意味に取られる恐れがあり、從つて後に火事の場合に喞筒をつかうとして集まつたことの解つた場合に、初めの思想を築き直す手數が要るが、All *hands*(手)といへば、凡てが喞筒をつく爲めに集まつたことが、直ちに活き〳〵と讀者の心に浮かぶからである。といふやうに、スペンサーは說いて居るが、面白い說明である。要するに擧隅法は、主眼點を强く明らかに示すと共に、餘意を

殘し、想像の餘地を存する爲めに用ゐられる修飾法で、從つて之れを用ゐる場合には、其の擧げられたる一隅を緒として、容易に他の三隅を思ひ浮かべられるやうに書かねばならぬ事、これが此の修飾を用ゐる際に見逃がすべからざる注意要件となつて來る。

擧隅法の例は、古今の文章に枚擧に遑あらぬほど多くある。貝を拾ふことを「濱に出でて磯をしける。」といひ、劇場を「七箇所の櫓」といひ、人家を幾軒或は幾煙といひ、鳥類、獸類を「空をかける翼地を走る蹄」といふ類ひ、すべて擧隅法を應用したものである。『古事記』に伊邪那岐命が黃泉の軍に追はれ、千引の石を隔てゝ伊邪那美命と對論したまふ所に、

伊邪那美命言したまはく、愛しき我が夫の命、かくし給はゞ、汝の國の人草一日に千頭絞り殺さなと申し給ひき。こゝに伊邪那岐命詔りたまはく、愛しき我がなに妹の命、汝じかしたまはゞ吾れはや一日に千五百産屋立てゝなと詔り給ひき。

とある、千頭、千五百産屋は、平たくいへば千人、千五百人といふことであるが、人の最要部分たる頭を指し、出産に重要な關係のある産屋を掲げて、苦もなく他の部分を想像せしむるが故に、一層の强み、床しみ、面白味が生じて來るのである。

成句の擧隅　古語成句などを引用する際に、故らに其の一部分だけを擧げて殘部を讀者の想像に任せるものも、一種の擧隅法である。例へば「私闘に怯なり」と云つて「公戰に勇なり」との意を含ませ、「雌伏」とのみ云つて「雄飛」のこゝろを匂はす類ひである。今川了俊の『竹馬抄』に

常の心は臆病なれと、綱といひける者の、末武に教へけるも、最後の大事をかねてならせとなるべし。

とある綱の言なども、「まさかの場合に勇ならむが爲めに」など言ひ整へぬ所に面白味があるのであらう。

一二　隔離的叙述

寫すべき當の事物を直寫せず、わざと一桁おいて隣りの事物を寫すのも一種の擧隅法と見るべきものである。例へば水邊の納涼を寫すのに、普通ならば「何川に涼まばや。」「暑さを避けばや。」と書くべき所を、涼しければ扇が要らぬといふ所から、一桁飛ばして「隅田の川風に扇やすめばや。」と書くたぐひを云ふ。氣負肌の江戸ッ兒の言葉に、人を擲ることを「頭のかけらを拾はせて

やらう。」といふのは、頭をなぐれば碎ける、碎ければ頭のかけらが落ちるであらうといふ所から、一桁二桁わざと抜いて面白味を添へたのである。磔刑に處することを「木の空で凉ます。」といひ、金の無いことを「懐が淋しい。」といふのも同じ道理である。川柳の

借のある家の前では横に降り。

などは、貸主に顔を見られるのがいやさに、傘を其の方に傾けて身を隠す、此の人情をあらはに言はずに一桁飛ばして雨に託けた所が妙味である。

近松巢林子の淨瑠璃『小栗判官』の一節に判官が毒害されて後、奥方照手の前が夫を尋ねてさまよひ出で、近江の國のある驛路の宿屋に奉公したが、宿屋の主人が、照手の前の美貌に見惚れてさまざまに言ひ寄る。其の妻が之れを妬んで照手の姫を責める語に、かういつてある。

これの長殿が何とやらんこの頃は、おのれを見る目が糸薄の如くになる……コリヤ長殿には妾といふおか様がある。サア何として長殿の目を、あの如く細うはしたぞ、眞直に申せ……

臭味のあるところは抜きにして、其の結果たる一桁さきの糸のやうな目つきに筆を着けた所に味はひがあるので、そこに、醜を變じて美となす不思議の力があるのである。

新井白石の『折りたく柴の記』の一節に、白石の父が、其の君侯の蘆澤某を手討にしようとして憤られたのを諫めた條に曰ふ。

（君侯）また宣ひ出だすこともなく、われも亦申し候ふこともなくて侍ふほどに、やゝありて面に蚊の集まりぬるに、逐ふべしと宣ひしほどに、面を動かしければ、血に飽きて胡頽子の如くになりし蚊の、六つ七つはら〳〵と地に落ちしを懐の紙を取り出だして、包みて袖にして侍ふ。

「我れを忘れて諫むるほどに、蚊のつきたるをも知らざりしが……」など云はゞ餘韻のない冗漫な文となるであらうが、巧みなる省筆の爲めに、面を動かし蚊の落ちたのを見て、始めて我れに復つた有樣が眼前に見るやうになつたのである。

此の隔離的叙述は、側面描寫とも名づくべき一種の省略法で、同時に、一種の擧隅法である。

之れを要するに、文章は達意を害せざる限り、成るべく簡潔なるべきこと、勢力があり、餘韻のある文を成すには成るべく無駄を省いて文字を緊縮すべきこと、言ひ表はされたる部分により、頭を痛めずして他の全部分を思ひ浮かべ得るやうに書くべきこと。是れ擧隅法、延いては省略法

全體にわたつて常に必ず注意すべき要件である。

一三　重義的修飾

一舉兩得は皆人の欲するところである。能ふべくは、杓子をして耳搔の用をも兼ねしめ、長持をして辨當箱の用をも兼ねしめたいといふが、人情の自然であるが、文章にも亦一舉兩得法と稱すべきものがある。

此の一舉兩得の修辭法、かりに之れを名づけて重義法といふ。一つの言葉に二つ以上の意味を含ましめるもので、いはゞ小さき容器の中に澤山の貨物を入れ、一軒の家屋に二家族共住居するやうなもの、二重以上の意義を兼ね表はすといふ意味である。

ヘマムショ入道、山水天狗、又は文字を並べて畫に見せる蘆手などいふ戯畫が面白く思はれるのは一物にして書と畫とを兼ね表はして居るからである。文章に於いても其の通りで、「紅葉にもまだ飽かなくにあき果てぬ。」(秋、飽き)「海棠かいや左樣にはなしの花。」(梨、無し)「まことに是れは困りいり豆山椒味噌。」(困入、炒豆)などいふ歌文章の面白味は、主として上に謂はゆる一舉兩

得の點にある。

重義的修辭法の種類が數多ある中で、最も單純なのは、支那の熟字に日本の熟語の假名を振るものであらう。主として視覺に訴へて、日本の熟語の意義趣味と支那の熟字の意義趣味とを、一目の下に看取し翫味するものである。例へば「流石」と書けばしかすがにの意味を理解すると共に流れに枕し石に漱いだといふ唐土の仙跡を偲ぶとが出來、「羊腸」「鰲破」と書けば、國語の「つづらをり」、「すはや」及び漢語の「羊腸」「鰲破」の特殊の味はひを同時に看取することが出來る。珍らかを「稀見」と書き、「はじまり」を「權輿」と書き、天子の女をめとる場合に「尙る」と書き、日月、風雨、事物に、「日月」「風雨」「事物」と倒まに假名を施けるなども、皆此の一舉兩得策によつて意義を豐かにせむが爲めに外ならぬ。同じ「たふの峯」を「多武峯」「田身峰」「塔峰」「談峰」など書きわけ、同じ富士山を、「富士」「不二」「不盡」、「不死」「福慈」など書きわけ、『日本紀』『古事記』などに、同じく「おほみたから」と讀むところを、民、人民、萬民、兆民、黎民、民庶、衆庶、黎庶、億兆、人物、人夫、庶人、居人、戸口、百姓、王民、公民、元々蒼生、業々黔首など、いろ〳〵に書きわけたのも、もとの目的はとにかく、結果は皆重

義の趣味を添へることとなつて居る。

若しかの謂はゆるたをやめ風の國ならむには、其の歌もたをやめ風ならむこそは、やがて天地の眞實の姿なるべけれ。さらむをも丈夫の風にならへといひ、又萬葉に似ばやと思へなどいへるは僞を敎へて誠を亂すものなり。切恐さるかたざまの歌をのみ、年月に讀みもて來ば、知らず〳〵虛遠にはせて眞思を失ひ、竟には狂疾はしくさへ成り行きて、いとゞ缺舌聞くらむ心地ぞすべき。（香川景樹「新學異見」）

漢字全廢論さへ、やかましく論ぜらるゝ今日、何時まで此の煩雜な修飾法を用ゐべきかは、一つの疑問であらうけれども、德川時代の俗文學の或ものに見るが如き極端の弊（例へば嫗山姥、稀藤原系圖、惶弓勢源氏、三千世界商往來）の如きに陷ることさへなくは、目下のところ、時折試みても差支なからうと思はれる。故紅葉山人、二葉亭氏なども、此の法を巧みに應用した人であつた。

一四　懸詞法

重義的修辭法の中で最も多く用ゐられ、而して俗間に最も多く受けられるものは懸詞法である。嗜好の低い俗人が、懸詞さへあれば名句、名文章と思ふばかりでなく、曾ては堂々たる歌人、俳人にして、上もなく之れを重んじ、「秀句は歌の材木、俳諧の花なり、秀句なくして俳諧せむは、棹なくして船をやり、針なくして魚を釣るが如し。」とまで云つた人もあつた。秀句とは懸詞のことである。懸詞が秀句の名を得たことが、已に此の修飾法の如何に廣く世に持て囃されたかを證明して居る。

懸詞法は世界中どこの國の文章にもあるが、我が國ほど多く用ゐられ多く尊重された所はない。英語の一例を擧ぐれば、「汝僞れり。」といふ意味で "you lie" といへるに對し「我れ横臥す。」といふ意味で "yes I lie" と答へる如き、或は英國の諺に「若夫婦は家内に二匹の bear（熊）を飼はざるべからず。一匹は bear（堪忍）にして、一匹は forbear（寬恕）なり」といふ如き、皆それである。

懸詞法は我が國にて、秀句、引掛け、兩方、兩用ゐ、地口、「しやれ」「駄じやれ」などいふ種々の語によつて知らるゝが如く、英語にも之れに當たる六七種の語があるが、最も普通に用ゐらるゝは、"pun" といふ語である。但しあちらでは "Play upon words"（弄語、語の上の慰み）など稱へて、

通例之れを卑しんで居る。我が秀句の稱と比べて好對照をなして居ると云つてよい。

文學的の文章に於いてはいふに及ばず、談話に興を添へること懸詞の如きは少ない、又、世に謂ふ緣起などいふものも、多く懸詞と密接な關係をもつて居る。凱旋の祝宴に「うち鮑」「勝栗」「昆布」を用ゐるのは、「敵を討ちて、勝ちて、よろこんぶ」といふ洒落である。除夜の肴に茄子干と栗の合物とを用ゐるのは、「借金なすほし、くりあひよし。」といふ引つかけである。横井也有が安產の句の

十六夜や何の苦もなくはじき豆。

といふのは、いざ產んでもよいやはじき出だせ」といふことの地口である、湯が熱いのぬるいのと言つては、「熱くは梅王櫻丸、ぬるくは松王、武部源藏」などいひ、他に禮をいふとては「忝なすびの鳴燒」などいふ類ひ、下らぬといへば下らぬやうなものの、平地に罪のない波瀾を起こして笑ふ門に福の神を招く靈妙なる呪禁といつてもよい。

昔ある大名の寵臣に金下戸の菓子好きがあつた。ある日の宴會に其の大名が片手に砂糖箱を持ち、片手に大盃を持ち、其の大盃になみ〳〵と美酒を湛へて、さて其の菓子好き金下戸の家來を呼んで、此の酒を飲め、飲まゞ此の砂糖を遣はさう、飲まずは重き罰を加へるであらうぞと言つた。某がさぞ當惑するであらうと思ひの外、物をも言はず、直ちに殿樣の手から砂糖箱だけを取り、おし戴いて、「わしや上戸ならつぎのむべけれど、下戸なればさとうたゞのぶ。」といひ了つて、悠々として御前を下つた。殿の御感はいふに及ばず、滿座アツと感動してはからぬ興を催してあつたといふことである。

日露戰爭當時の事、ある席上で、現今我が國の元帥は幾人居るかといふ話の出た時、皆が、山縣、大山の二人だといふと、一人の洒落先生濟ました顏で「三人ぢや三人ぢや。」といつた。皆が首を捻つて西鄕從道さんが歿くなれば、殘るは二人ぢやないか。」といつたが、先生なか〳〵承知せぬ。「それなら誰れだ」といふ問を待ちかねて、「松井源水（淺草の獨樂廻はしの名人）卽ち是れなり。」と眞面目にやつた時には、滿座腹をかゝへてうち興じてあつた。

此の樣な例は他に幾つもあるであらう。文章の側で、懸詞の最も多いのは、中昔以後の歌、俳諧を初めとして、謠曲、淨瑠璃其の他德川時代の俗文學等である。

霞立ち木のめもはるの雪ふれば、花なき里も花ぞ散りける。（紀貫之）

契りおく花とならびの岡の邊に、あはれ幾世の春を過ぐさむ。（吉田兼好）

冬ごもり蟲けらまでも穴かしこ。（松永貞德）

腹筋をよりてや笑ふ糸櫻。（北村季吟）

北八「エ、此の人も同じやうに途方もねえ、わしが顔の赤くなつたのは、茶に醉つたのだ、わしはかはつたことで茶をたんと飲むと醉ひます。酒に醉つた人はくだをまくが　茶に醉つた證據にはちやばかりいふが辯でならぬ。そこでちやばかりながら何方もちややう、チヤハ、、さる市「イヤこんた衆が横取りして飲んだに違ひはない、酒代を拂はしやれ。北八「ちやれやれ、ちやりとはちやわいもないことをちやべらしやる、ちやつきら飲んだは茶ばかり、ちや頭衆（座頭衆）のちやけをちやく服した覺えは御座らぬ。わるいちやれだ、ちやハ、、。

十遍舍一九『道中膝栗毛』

戯詞法は、かくの加く、一舉兩得の愛嬌的文飾で、俗衆の喝采を博し易いものであるが、之れを濫用すると、文の品位をおとすといふ危險がある。英國の詩人ミルトンの『失樂園』などですら、なまじひに此の法を用ゐて、文品をおとした所があると云はれる位で、文の品位に注意する者の注意すべきものである。

重義的修辭法には、右の外に語呂と云つて、成句の語路口調を眞似るもの、例へば西行法師の「心なき身にも哀れは知られけり鳴立つ澤の秋の夕暮。」の口調をまねて

菜もなき膳にあはれは知られけり鳴やき茄子の秋の夕暮。（唐衣橘州）

といふ如きものがあり、同類の事物を列擧するもの例へば笙、笛、箏、琴、琵琶、五種の樂器をよみ込んで、

うし笙やうし花匂ふえに風かよ笛ひちりきて人のこと琴ととひはせず琵琶。（新拾遺集）

といふが如きものもあり、縱に横に斜めに倒まに、讀み方をかへれば異なる意味をなすもの、例へば折句・沓冠

折句（五句の頭にをみなへしの五句を折り込みたるもの）

をぐら山みね立ちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき。

沓冠（花をたづねて見ばや）

はかなしな

をのをやまだ
つくりかね
てをだにもきみ
はてはふれずや

の如きものがあり、其の他にも尙ほいろ〳〵あるが、さまではとて省く、

一五　引用的修飾

平安朝の名高い歌人に藤原俊賴といふ人があつた。此の人が或歌合の折に

明けぬともなほ秋風のおとづれで野べの景色よ面がはりすな。

といふのを出した。一夜明けて秋になつても、なほ秋風の吹くことなく、野べの景色がおもがはりして淋しくならぬやうに、夏のまゝ綠で賑やかであるやうにといふ、立秋の歌と見える。此の歌合に俊賴とは歌に關する意見を異にして、平生仲の惡るかつた、藤原基俊といふ歌人、これも當時の歌界の一方の旗頭で、此の時讀師（とうし）といふ役をつとめて居つたが、此の歌を手にすると、匿名ではあるが、直ぐに歌がたき俊賴の作と悟つて、腰の句に「て」の字を据ゑるのは體（たい）が挫（くじ）けて聞き苦しいものであると非難した。俊賴は默つて爭はなかつたが、其の座に琳賢（りんけん）といふいたづら男が居て、口を出して基俊に向ひ、古人の句に、腰に「て」の字を用ゐた例が御座るが、いかゞ心得らるゝぞといつて、紀の貫之の

櫻さく木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける。

といふ名高い歌をよみ上げ、しかも「で」の字を故らに長々と吟じたところが、さすがの基俊も、赤面して一言の返答も出來なかつたといふ話がある。基俊朝臣は『悅目抄』といふ歌論の著述をした人で、當時の名高い理窟屋であつたが、此の理窟屋でも貫之といふ金看板の前には頭を上げることが出來なかつた。

時は平凡事をも神聖化する。同じ言でも古人のとあれば今人の前に君臨する趣があり、祖先の事蹟は子孫の前に神さびて現はれる。古今東西人情に異なるところがない。同じ「櫻さく」の歌が若し俊賴のならば、基俊朝臣も口角泡を飛ばして爭つたであらう。同じ「明けぬとも」の歌が貫之のならば、被れは初めから一唱三歎したであらう。基俊朝臣が俊賴を攻擊した心は吾等が現代

の人の言を重んぜぬ心であり、基俊朝臣が貫之の歌に首を俛れた心は吾等が釋迦基督の言に低頭する心である。非常に圖抜けた文章と非常に劣惡な文章とを除いて、他の中位並等の列は、大抵其の人物の金箔の有無によつて、善惡いづれとも評價し去られるのが常である。

此の基俊朝臣が貫之の歌といはれて降參した心、子供が師父の言葉を恐れ入る心を利用して文章に品位をつける修飾法、之れを稱して引用的修飾といふ。

引用的修飾に二種ある。一つは古語古事を顯はにそれと斷つて引くもので之れを引用法といふ。一つは古語古事を明らさまに斷らず、默つて自家の文の中に編み込んでしまふもので、假りに之れを稱して隱引法と云ふ。

一六　引用法

引用法をば英語では Quotation といふ。孔子曰はく、孟子曰はく、釋迦曰はく、空海曰はく、耶蘇曰はく、といふやうに斷るものである。例へば、

孟子曰はく、好名之人、能讓二千乘之國一、苟非二其人一簞食豆羹見二於色一、とあり。千乘の國とは兵車千乘を出だす諸侯の國をいふなり。千乘の富貴を得ることを誰れとても欲し願はざる者なきは人情なれども、修潔好名の人も情を矯め譽を干むる心より、此の千乘の富貴も見事辭讓するなり。然れども若し實に天理に安んじ、富貴を輕んずるの人になければ、得失の小なる物に於いて、反つて其の眞情の發見することを覺えず、一簞の食一豆の羹に心動くなり。東坡が言に、千金の璧を破れども破釜に失聲する事なきこと能はずといひしも此の意なり、此の度の事、眞情にはあらで好名の上より出でしかと疑惑を懷くにはあらず、凡の事一時大なる事は爲し易く行ひ果たさるゝものなれども、日用機微の間に於いて、却つて氣のぬけ心の放るゝ事多くあるものなり。碌々たる者には人も怨して耳目をも屬せず、高明の士をば一言一動人必ず心を注いで一善あれば則りて褒し、一不善あれば謗りて貶す。今斯かる建議ありて美名人の口實となる上は又人の耳目の屬すること益々甚だしき事なり。（上杉治憲「羽陽叢書」）

尙書に人は萬物の靈といへり。靈とはたましひとよむ。人は萬物にすぐれて明らかなるたましひあるをいふ。天地は萬物の父母なれば、萬物は天地の子なり。されど萬人のうち、人は陰陽の正しく精しき氣をうけて生まる。故に鳥獸蟲魚凡そ萬物にすぐれて取りわき天地の大

徳を生まれつきたり。ここを以て萬物の靈といへり。又孝經に天地の性人を貴しとすともの たまへり。天地の内に性をうけたる物、人ばかり貴きはなし。如何となれば天地の道をたがへずして其のまゝ心に生まれつきたればなり。されば人は卽ち天地の萬物を生み給ふ生理を以て心とせり。此の心を名づけて仁といふ。凡そ人たる者は古今此の仁あらずといふことなし。是れ人たる者の心なり。故に孟子にも、仁は人の心なりといへり。(貝原益軒「五常訓」)

引用する古語古事は、本文の趣意に適當したものでなければならぬ、適當せぬものを引けば、却つて本旨をぶち壞すやうになる。例へば『曾我物語』の

あれに見え候ふ山の奥に森の見え候ふ所こそ、かの人(大磯の虎)の草菴にて候へと教へたれば、うれしくも分け入り見れば、誠にかすかなるすまひにて、垣には蔦朝顔はひかゝり、軒にはしのぶまじりの忘草、露深くして物思ふ袖に異ならず、庭には蓬生ひ茂り、鹿のふしどかとぞ見えし。瓢簞しばゝゝ空しくして草顏淵が巷にみち、藜藿深くとざして雨原憲がとぼそを濕すとも見えたり。誠に心細く人の栖家とも見えざりけり。

遊女大磯の虎が世を捨てたる詫住居を顏淵原憲等孔門の高弟の貧に安んじたる樣によそへるのは不倫である、從つて一種のぶち壞しになつてしまふ。

引用法は主として我が文章に品格を添へる爲め、兼ねては趣致を豐かにする爲めに用ゐるもので、云ふまでもなく多大の利益があるけれども、一方から見れば、自分の折角の骨折が皆古人の手柄になつてしまふといふ損もある。つまり引用法を用ゐる者は我が說に重みをつけ相手の注意を惹くといふ利益を占めると共に、やゝもすれば番頭、代診、居候の役廻りをなして、其の手柄が皆店主、院長、置候に歸することを覺悟せねばならぬ。故に之れを用ゐる者よりいへば、古語古事は我が文に重みを添へる限り、我が說の主位を犯さぬ限りに於いて用ゐるべく、之れを讀み聞く者よりいへば、何處までか著者の說、何處までが古賢の說かを辨へて、ごまかし者か忠實なる敷演者、祖述者か、特得の見識ある思想家かを見わけねばならぬ。

一七　隱引法

隱引法をば英語では Allusion と云ふ。時としては前の引用法及び隱引法を引つくるめてアルージョンと呼ぶこともある。「古語に曰はく」と明らさまに斷らずして、默つてそれを我が文の中に

取り込むもの、卽ち引用の形式を沒したるもので、壓搾し煎じ詰めた引用法ともいふべきものである。例へば「諺に二階から目藥といふことがあるが、君のやりかたはまさしくそれだ。」といふのは引用法、斷り文句を省いて直ちに「君のやり方は二階から目藥だ。」といふのは隱引法である。

隱引法は、本來引用する古語古事を讀者が知つたものと豫定して用ゐるもの故、濫りに人の知らぬものを引いてはならぬ。又踏まへた古事古語に朧ろになりとも想ひ及ぼさぬ者に對しては、此の法の趣味が半ば失はれると云つてよい。譬へば宿屋飯盛が狂歌、

歌よみは下手こそよけれ天地の動き出だしてたまるものかは。

の面白味は、和歌は力をも入れずして天地を動かすと云つた『古今和歌集』の序文を思ひ浮かべずしては解し難く、平賀元義が妻を迎へた時の歌、

皆人の得がてにすちふ君を得てわがいぬる夜は人な來たりそ。

の面白味は、『萬葉集』の

我はもや安見兒得たり皆人の得がてにすとふ安見兒得たり。

といふ藤原鎌足の歌を踏まへたことを知らねばわからぬ。左に掲ぐる『徒然草』の一段の如きは此の法を巧みに用ゐたものであらう。

風も吹きあへずうつろふ人の心の花に馴れにし年月を思へば、あはれと聞きし言の葉ごとに忘れぬものから、我が世の外になりゆく習ひこそ、亡き人の別かれよりもまさりて悲しきものなれ。されば白き糸の染まむことを悲しび、路のちまたの分かれむことを歎く人もありけむかし。堀川院の百首の歌の中に、昔見し妹が垣根はあれにけりつばなまじりのすみれのみして、さびしき景色さることを侍りけむ。

「風も吹きあへず云々」の句は、紀貫之の「櫻花とく散りぬともおもほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ。」及び小野の小町の「色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける。の二首を踏まへたもので、隱引法、「白き糸」「道のちまた」の二句は『淮南子』に「墨子染糸に泣き、楊子逵路に哭す。」とあるのを引いたもの、而して堀川百首の歌と共に引用法に屬すべきものである。

一八　映原的修飾

映原的修飾といふのは、手製の熟語で、落ちつかぬ變な言葉であるが、實は東西に通じて昔か

ら有り來たりの文飾で、前講に謂はゆる隱引法の一種とも見れば見らるべきものである。映原と名づけたのは、作中に原作を映し、含ませ、ほのめかすといふ意味、歌道では本歌どりと稱へるもの、脚本作家が譯物、活取など稱へるもの、漢文家が換骨、脫胎、剽竊、襲踏など稱へるもの、若しくは俗に鸚鵡返しといひ燒直といふ類ひ、是等を統べ括つての名稱に用ゐたつもりである。

此の修飾の面白味は、底に踏まへた原作を思ひ出だすところ、言ひかへれば其の裏に映つて居る古文若しくは他人の文との關係を認めるところにある。此の一段は前章引用的修飾の補遺と見てもよい。

鸚鵡返　鸚鵡返とは鸚鵡が人の言葉を眞似るやうに、相手の詞を其のまゝ用ゐて返事するこの意味、轉じては、談話たると文章たると、詩歌たるとを問はず、又古文たると今文たるとを論ぜず、凡て成句の一小部分を改めて別樣の意義を成さしめることをもいふ。或年の元旦に武田信玄が、

松枯れて竹たぐひなき朝かな。

といふ句を德川家康に送つたが、家康は取りあへず、

松かれで竹たぐひなきあしたかな。

と返したといふ話がある、これが卽ち鸚鵡返である。

どこやらに嗜みのない八釜し屋の妻君があつた。或時下女のりんが香の物の鉢を取り落して割ると、其の女房が大聲をあげて、おりん、何を割つたのぢや。ハィ香の物の鉢を取り落しまして、大きに不調法で御座ります。なんぢや鉢を割つた、其の鉢がお前の二年や三年の給金で買へるものか。此間も大事の茶碗を割つて、又今日も鉢を割る。さう片端から割つて貰うては、此方の身代がつゞかぬと、わめくを聞いて、亭主が、これ〳〵どうしたものぢや、そなたはとかく仰山な物の言ひやうをする、世間體もわるい、ちとたしなましやれ。すべて女といふ者は何事もやさがたに小さう取りなしていふものぢや。おれが此の間江戸から歸りがけに、原の驛で泊つて、朝立ちしなに草鞋をはきながら、テモ富士山は大きなものぢやと云つたれば、宿屋の下女がいふには、イエ〳〵あの樣に大きう見えましても半分は雪でございますというた。とかく女子は、かうやさしう云ひたいものぢや。そちがやうに、かりそめにも仰山に物いふと、女子らしうなうて聞えがわるい。以來ちと嗜ましやれ、と叱りましたれば、女房が頰ふくらして其の位な事、わたしぢやと

て知つて居ますと、せり合うてゐる處へ、懇意の人が見えて、これは八兵衛さん此の間江戸からお歸りと承りましたが、まづ御機嫌ようて御めでたう御座います。長の道中定めてお疲れもあらうと存じましたに、お見うけ申せばようふとつてお歸りなされたと、挨拶すると、女房が横合から出しやばつて、

イエ〳〵あのやうに、ようふとつて見えましても、半分は垢でございます。

と云うた。是れは『鳩翁道話』に出て居る話であるが、「半分垢」の女房の詞だけを聞いても面白くないことはないけれども、其の本當の妙味は相手の詞を（少し換へただけで）そつくり其のまま用ゐたところにある。卽ち鸚鵡返の味はひは其の隱引的、映原的なる所にあると云つてよい。

齋藤彦麿が『傍廂』の中の「聾」と題する文に、

加藤千蔭翁の月並會日に、我が若かりし時、季鷹縣主と安田躬弦と三人にて行きけるに何くれと物語りしける中に、千蔭翁のいはく、近頃は本居宣長こそ金聾になりたれといはれしを、傍にて聞きて躬弦がいはく、宣長を假名聾とのたまふ千蔭先生は眞名聾にやといひけれど、千蔭翁にはきこえず、人々は打ちたふれてわらひぬ。季鷹縣主にも聞こえぬこそをかし

かりしか。又或やんごとなき君の御前にて人々物語りしける時に、守の殿のたまはく、近頃季鷹が狂歌に、

我が耳の遠くなりしは年をへて聞こえぬ歌をよみしむくいか。

とよみしは、いと面白しとのたまひければ、御前に居たる醫師某の年老いたるが、さばかりの歌おのれもよみ侍るなり、さまでほめさせ給ふべきにあらずといへば、彼の殿さらばよめとのたまふに、かの醫師とりあへず、

我が耳の遠くなりしは年をへてきかぬ藥をもりしむくいか。

といひければ、無禮の罪をもとがめ給はずて、こよなう入興し給ひけり。かくいふ我れも今は耳遠し、

近松巢林子が『曾我扇八景』に、大磯で曾我五郎が工藤祐經をうたうとするのを朝比奈三郎が意見し、間もなく朝比奈が祐經に飛びかゝるのを、今度は五郎が意見する所に面白い鸚鵡返しがある。

（朝比奈）一代に無き分別顏、あゝ五郎殿、短氣に御座るよ、此の朝比奈なども、腹の立つ事は度々なれども貴殿の樣に短氣うなき故に、終に義秀が短氣を出だせしこと御聞きなされま

い。あゝ御たしなみなされ、虫が早い、落しつけて思案あれ。第一に兄十郎を押し退けて我がまゝ、二つには所といひ折わるし、三つには母御の御勘當の身、仕おほせて本望ならず。なんと團三女性たち身が意見がわるいかと、跡さき思ふ分別は、不思議千萬朝比奈の朝日も西から出でぬべし。ハテ是れも兄弟衆大切に存ずる故、曾我殿原に友なひも多からうが、斯樣の意見する者は、秩父殿か此の朝比奈と扇をつかひの自慢顔……時致やがて飛んで出で、あゝ朝比奈殿、短氣にござるよ、御たしなみなされ、虫が早い、落しつけて思案あれ、第一に上への慮外、二つには折わるく、三つには我々敵うつ、後日の爲めも然るべからず、九十三騎の御一門も多からうが、斯樣の意見申すは秩父殿か此の時致と、荒者同志の鸚鵡返し、意見も殊勝聞かぬも道理……。

一九　換骨脱胎

漢文家の謂はゆる換骨、脱胎も亦、一種の引用的若しくは映原的修辭法と見るべきものである。換骨は皮肉だけ他人のを借りて自家特得の骨を加へる義、脱胎は他の腹で出來た胎兒をぬき取り來たつて我が好むまゝに育て直す意味、共に原文を想ひ起こし、之れと比較して原文に借る所があると共に新たに加へる所があり、他の作に眞似ながら必ずしも之れに劣つて居らぬと認める所に味ひのあるものである。但し換骨脱胎は一種の模倣である。而して其の模倣かたが巧みで、眞似ながら自家特得の風格を備へて原作者と駢行する程度に至れば換骨脱胎と呼んでほめ稱へられ、眞似方が下手で、原作に及ばねば、剽竊、襲蹈と嘲られ、燒直しとおとしめられる。故に原作者の上を越す自信があり、少なくとも原作と雁行し得る見込のある場合の外は、古文を模倣すべきでない。換骨脱胎の妙を極めたものには、一篇の作としては、近松の時代物やシェークスピーアの史劇などを初めとして澤山あるであらう。襲蹈の拙なるものでは、『源氏物語』に對する『田舍源氏』、『枕の草子』に對する『尤の草子』、近松巢林子の『國姓爺合戰』に對する紀海音の『傾城國姓爺』などが、例とすべきものであらう。「國破れて山河在り、城春にして草木深し」といふ杜甫の詩の意を取つて、芭蕉が「夏草やつはものどもが夢のあと。」といへる、加藤宇萬伎が芭蕉の此の句に模して、「ものゝふの草むすかばね年ふりて秋風寒し桔梗が原。」とよめるなど、まづ換骨の妙なるものである。又

亭主の好きは客にもてなせ。（和）
身をつみてひとの痛さを知れ。（和）
己れの欲せざる所人に施す勿れ。（漢）
己れ人に施られむと思ふことは、又人にも其の如く施よ。（洋）

の如き諺若しくは格言は、各々別々に發生したものであらうが、かりに有意の模倣とすれば面白い換骨脱胎であらう。

剽竊の例は特に擧ぐるまでもないが、襲蹈、燒直は、其の巧みなるものと雖も、生命がなく、品位が下つて見るにたへぬ。原作を知つた時に於いて殊にさうである。歌學者の謂はゆる「本歌取」の如きは、其の一例である。例へば壬生忠岑の歌

春來ぬと人はいへども鶯の鳴かぬかぎりはあらじとぞ思ふ。

を取つて、藤原公任が

卯の花の散らぬ限りは山里の木の下闇はあらじとぞおもふ。

とよみ、能因法師の

都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河のせき。

を模して、源三位頼政が

都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりしく白河のせき。

とした類ひ、共に、表面のうるはしき猿眞似の必ずしも取るに足らぬことを證するものである。

「源氏物語」帚木の卷の雨夜の品定めは千古の妙文とたゝへられ、後世之れに模倣した文章も少なからずあるが、左に掲ぐる一節と之れを燒き直した古淨瑠璃の一節とを比較すれば、襲蹈、燒直の意味、價値がわかるであらう。源氏の品定めは例の「つれ〴〵と降りくらして、しめやかなるよひの雨に、殿上にもをさ〳〵人少なに御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、大となぶら近くて文どもなど見給ふついでに」の名句を以て始められて居る。其の中ほどに、

（源氏）いとなべてはあらねど、我れも思し合はすることやあらむ、うち微笑みて其の片かども無き人はあらむやとのたまへば、（頭中將）いとさばかりならむあたりには、誰れかは誘され寄りはべらむ。取る方なく口惜しきといと優なりと覺ゆばかりすぐれたるとは、數ひとしくこそ侍らめ。人の品高く生まれぬれば、人にもてかしづかれて隱るゝも多く、自然に其

のけはひこよなかるべし。中の品になむ人の心々、己がじしの立てたる趣も見えて、わかるべきことかたぐ〳〵多かるべき。下の階級といふ際になれば、殊に耳立たずかしとて、いと隈なげなる氣色なるも床しくて、(源氏)其の品々や如何に、いづれを三つの品におきてかわくべき。元の品高く生まれながら、身は沈み位短くて人けなき、又直人の上達部などまで成り上りたる、我れは顔にて家のうちを飾り人に劣らじと思へる、その差別をばいかゞ分くべきと問ひたまふ程に、左の馬の頭、藤式部の丞、御物忌に籠もらむとて參れり。

とあるのを、古淨瑠璃には、男の品定めと趣向をかへて居るが、丁度此處にあたる一節を擧ぐれば、

(初瀨姫は)さにこそあれと頷きて、とてもの事に男の品の善惡を、なにはにつけて方々が思はく語れとありければ、玉代は得たり賢けに、顔さし向けて申すやう、總じて世にある殿だちの、中にすぐれて是れよりは上あるまじと思はれて、上々品の上人と、至つて惡しき人せいの、亂れ才書き口惜しく、なはにもかづらにもかゝらずして、取所なき癡人のずんど阿呆と賢いと、右二品の人衆は稀なる事に候へば、只だ中分こそ多かめれ、貴人高位に生まれあひ、又は家富み榮えては、少々惡しき事どもを、他目もゆるす世の習ひ、うつけがましき物いひも、底分別がある人と、追從いふもをかしやな。素性氣高き人ながら、衰へ果てゝ世の活計よろづ足らはぬ身となりて、もとの心は變はらねど、諂ふ樣にわろびれて、育ちがらとていとほしやと、あはれがらるゝ、其の品と、又直人の成りあがり、我れは顔にて家の内、飾り立てたる物ずきを、他に劣らじとつくれども、世上の噂さがなくて、昨日今日までさま惡しくありしものをと沙汰するも、さし當たりたる仕合はせの、よいにつれては何事も、云ひおとすべきやうなきを、いづれ差別のあるやらむ、定め給へと口々に、人事いはゞ目代おけ、誰れやら人の足音のそろり〳〵と來る人を、見ればお針の小菊なり。オゝよい所へ來ましたり……

…(古淨瑠璃「志田小太郎」)

此の古淨瑠璃は近松門左衛門の作とも稱へられて居るが、この手振を見れば誠とも思はれぬ。

要するに古文成句を引き原作をほのめかす文飾の成功は、之れによつて我が文の品位を高め、趣致を富ます場合、及び之れによつて換骨脫胎の妙をなし得る場合に限ると云つてよい。

二〇　反覆的修飾

老いぬれば同じことこそせられけれ、君は千代ませ君は千代ませ。（源順）

目出たいこと、目出たからぬこと、うれしい事、悲しい事、面白い事、奇妙な事、すべて深く人の興をひき情を動かすものがあれば、一度いふだけでは滿足せず、再びも三たびも繰り返して其の深い興味感情を傳へむとするのが人情である。君家に幸あれと祈る心は一言で盡くせぬゆゑに、「君は千代ませ、君は千代ませ。」と繰り返し、松島の景色の美しさは、一個の感詞では盡くし切れぬ故に、「松島やあゝ松島や松島や。」と繰りかへし、顏回の學德は一言では譽め足らぬ故に、「賢なる哉回や、賢なるかな回や。」と反覆する。而してかやうな反覆は感情興趣の深さ高さ烈しさ大いさを傳へると共に、反覆其の事が、また一種の美を人に感ぜしめる。語句の反覆が人に面白味を感ぜしめるのは並行した直線、曲線、或は並樹、行列などの美が人を喜ばすのに異ならぬ。

同一の語句を繰り返して、趣味を高め、感興を添へる修飾法を稱して反覆法といふ。英語の、Repetition にあたつて居る。例へば、

ほとゝぎす〳〵とて明けにけり。（加賀の千代）

初雁やまたあとからも〳〵。（同）

夕さればキの字〳〵のとんぼ哉。（望月春哉）

『保元物語』に、鎭西八郎爲朝がわが夜襲の謀が用ゐられずして、賴長等の躊躇する間に敵軍のおし寄せたのを見て憤つたところを寫して、

白河殿にはかくとも知ろし召さゞりしかば、左大臣殿（藤原賴長）武者所の親久を召されて、內裏の樣見てまゐれと仰せければ、親久卽ち馳せ歸り、官軍既に寄せ候ふと申しても果てねば、先陣既に馳せ來たる。其の時鎭西八郎爲朝申しけるは、爲朝が千度申しつるは爰候爰候（こゝさふらふ〳〵）と忿りけれども力及ばず。

といへるが如き、「爰候々々」の反覆の爲めに鎭西八郎が齒を喰ひしばり地だんだを蹈んだ所が躍如として目のあたり見るやうである。かくの如きは反覆法の最も妙なるものであらう。太閤秀吉の遺言に、

秀賴事成立候樣に、この書付候衆しん、賴み申候。何事も此の外には思ひ殘すことなく候。

かしく。返すゞ〳〵秀頼事たのみ申候、五人の衆頼み申上候。名殘惜しく候。

とあるが如き、また、英雄の子故に迷ふ切なる思ひが、おのづから反覆の形を取つて讀む者に涙せしむるものである。殊に「申候」が「申上候」になつたところの如きは、反覆法の領分を越えて漸層法となつた所に云はれぬ味はひのあらはれたものである。

廣い意味で反覆法といふべきものの中でも、其の繰り返し方の異なるに從つて種々の名稱がある。句の頭に同じ響きのある語を繰り返すものを頭韻法といふ。

二　頭韻法

頭韻法とは、英語に謂はゆるアリテレーション（Alliteration）である。俗に「火まはり」或は「火なぶり」といふものの如きは、一種の頭韻應用の遊戯でめる。例へば「人待つよひの火なぶりや、引裂紙のひねり元結で火廻はしを、火斗、日野絹、獨寢、緋無垢、冷酒、引舟、火桶、鵜、姫小松、緋縮緬、柊、雛子、柄杓、緋緞子、蟇蛙、平野菖蒲、菱紬」といふが如き、其の面白味は、たゞ頭の音の同じ語を揃へた所にある。かやうな弄語的修飾は文章の本領よりいへば、寧ろ末枝に屬するもの、俗人を悦ばす洒落に過ぎぬもの、拙く用ゐれば文の品位を害ふべきものであるが、其の音調をよくし耳を喜ばす點より見れば、少なからぬ效力のあるもので、又用ゐ樣によつては、些も文品を傷けずに利用し得べきものである。此の修飾は西洋の文學に於いては滑稽物はいふに及ばず、シェークスピーア、ミルトン、スコツト等の堂々たる大作にも立派に用ゐられて、大いに光彩を放つて居るが、惜しいかな、日本文に於いては、多く洒落滑稽の下品な方面にのみ用ゐられて、此の修飾法の價値を高めるやうな例が甚だ少ない。

朝比奈ほとんど快く、ホ、ウ井原殿は鶴が岡に鶴を放し鶴の紋をつけらるゝと聞きしが、乘馬まで放されし御手柄〳〵、命からゞ〳〵、から馬の紋どころ、侍にかゝゞけ馬、天晴れ御馬候ふと、どつと笑うて手綱かいくりしづ〳〵と、四邊を拂つてうたせゆく。（近松巢林子『曾我扇八景』）

其の他子供の口ずさみにする、加賀の金澤上〇町の上の角の加藤のかゝ樣、片手で蚊帳つゝて片足蚊にかれ、かゆがつて搔いたら、かいた跡かぶれてかさぶた」「ひら〳〵ひらめく日の御旗」といふ類ひでも、此の法の例とすべきものである。

頭韻法と相對して脚韻法といふものがある。

三　脚韻法

脚韻法とは語の末、句の脚に同じ韻の語を繰り返すものである。例へば喜撰法師の作と云はれる、

木の間より見ゆるは谷の螢かも、いさりの舟の沖にゆくかも。

の如き、或る薩摩人の作と云はれる。

何ぢやこぢや娑婆ぢや浮世ぢや樂ぢや苦ぢや、神ぢや佛ぢやいふも苦ぢや苦ぢや。

の如き、或ば古い獨々逸の

お前百までわしや九十九まで、共に白髪のはえるまで。

揃うた揃うた踊子が揃うた、稻の出穗よりなほ揃うた。

の如きをいふ。しかしながら、八釜しくいふと、日本文には、散文にも律語にも、特に脚韻といふべきものがない。近年になつて、脚韻法を試みた人もあるが、其の企ては大抵失敗に歸して居

る。往年の『新體詩集』に載せた外山正一氏、矢田部良吉氏等の試みたものは云ふに及ばず、近頃の新體詩人の試作ですら、韻を蹈んだ爲めに面白くなつたといふ點は殆んど無いのみならず、却つて之れが爲めに趣致の害はれた傾きさへある。少なくとも支那や西洋の詩歌の如く、押韻の爲めに趣致の加はることは殆んどない。是れは恐らく、押韻といふことが、日本語に相應して居らぬ爲めであらう。とにかく日本の文章詩歌と押韻との關係は、將來詩文を作る者及び詩文を論ずる者の熟考すべき問題である。

ひとり脚韻法のみならず、頭韻法とても、其の通りである。頭韻法といひ、脚韻法といひ、西洋若しくは支那の修辭論者の說く所によつて、しばらく其の名稱を譯し、又それに合ひさうな例を列べては見たものの、實は之れを一括して、平たく句拍子といふ方が適當である。英語のトートフォニー(Tautophony)が此の句拍子にあたつて居る、句拍子とは、舌に任せて口調よく言ひつづけること、例へば「大祓の祝詞」に「荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百會に坐す速開都姫といふ神、持ちかゝ呑みてむ。」とある如き、催馬樂の「東屋」に「あづま屋のまやのあまりの雨そゝぎ」とある如き、俗言に「引つくりかへし、おつくりかへし」「やつとすつと」「一かばちかの

運試し」「二つ<ruby>に</ruby>ちもさつちも利きあしない。」などいふ如き、或は諺に「伊勢は津でもつ、津は伊勢で持つ、尾張名古屋は城でもつ、讃岐の殿様砂糖でもつ、阿波の殿様藍でもつ。」といふ如きをいふ。其の他木やり文句など、概ね此の修飾法を用ゐて居る。左に掲げたのは、近松巢林子の作と稱せらるゝ「日蓮記<ruby>兒硯<rt>ちごすゞり</rt></ruby>」の中にある木やり歌で、句拍子を<ruby>生命<rt>いのち</rt></ruby>とした文である。

百に足らいで九十に餘つた<ruby>婆樣<rt>よさま</rt></ruby>の<ruby>寐言<rt>ねごと</rt></ruby>を聞きました。殿をもつなら心よしの<ruby>風<rt>ふう</rt></ruby>よしの、わけよし顔よし身代よしのいと〳〵、見たや御しりたや、花の<ruby>新町<rt>しんちやう</rt></ruby>の琴ひき上手の、みはちの隣りの、かうじや長兵衛の向ひの借屋の傳兵衛の内儀の、妹の舅のいとこのはとこの孫の嫁御のやきの上手の門までかろ〳〵引いたらかろ〳〵、嬉しかろ……木やりの音頭が<ruby>投頭巾<rt>なげづきん</rt></ruby>、やア<ruby>本綱中綱<rt>もとつなかなつな</rt></ruby>しめてゆるめな、木曾の山から谷から峯から崖から岸から手引き揃へて引き出した。きり〳〵<ruby>立<rt>たち</rt></ruby>の青石もとは小石さゞれくり石岩になり候、揃ひの若衆見によ揃<ruby>そろ</ruby>た、中の綱へ、えい〳〵聲して引き來たる。（「日蓮記兒硯」）

北八「おらア此の茶碗に酒をついでくんな、オツトきた〳〵きたさの〳〵〳〵讃岐のこんぴら、たか〻高瀬の船頭の子ぢやもの……（一九「膝栗毛」）

是等の例を見ても知らるゝ如く、頭韻、脚韻、句拍子等は、我が國では殆んど低級文學にのみ專用されて居る傾きがある。少なくとも下等な俗的趣味を表はすべき部分に主として用ゐられて居る。（もとより少數の除外例はあるが）さて此の修飾を今後の文章に於いて、如何ほど多く、又如何に上品に用ゐ得るであらうか。其の價値を高むると否とは、一にかゝつて今後の文章家の趣味手腕の如何にある。

反覆的修飾法には、右に說いた外に連鎖法、對偶法など、いろ〳〵ある。

二三　連鎖と對偶

花の御江戸の兩國橋で、坊さん簪しよ買ひに來た。坊さんかんざし買ひそなこうとよ、御寺がどてらを買ひに來た。御寺がどてらを買ひそなこうとよ、按摩さんが眼鏡を買ひに來た。（俗　歌）

其のあるじと住みかと無常を爭ひ去るさま、いはゞ朝顏の露に異ならず。あるは露落ちて花殘れり、殘れりといへども朝日に枯れぬ。あるは花凋みて露なほ消えず、消えずといへども

夕を待つことなし。（鴨長明「方丈記」）

古之君子其責ㇾ己也重而周、其待ㇾ人也輕而約、重以周故不ㇾ怠、輕以約故人樂ㇾ爲ㇾ善。

（韓退之「原毀」）

前句の末にある語を、後の句の頭に置く修飾法、言ひ換へれば、後句の始めに於いて前句の結語を繰りかへす一種の反覆法、之れを稱して連鎖法といふ。前句の末に「坊さん簪買ひに來た」とあるのを受けて「坊さん簪買ひそなたよ」とつなぎ、「御寺がどてらを買ひに來た」とあるのに接けて「御寺がどてらを買ひそなことよ」と書きはじめる。「花殘れり」に次いでは「殘れりといへども」と受け、「露尙ほ消えず」に次いでは「消えずといへども」と受ける。かく上句の結語として授けたる所、下句直ちに之れを受けて其の授受推移の間に隙間のない面白味、これが連鎖法の生命とするところである。第三に擧げた韓退之の「原毀」の一節は連鎖法の一變體、隔置的連鎖法、或は交互的連鎖法ともいふべきものである。

連鎖法は、我が國では文字鎖（もじくさり）又は尻取文句（しりとりもんく）などいふ名で知られて居る。漢詩文の方では蟬聯格（せんれんかく）といひ、或は聯綿對（れんめんたい）ともいふ。英語では普通に Chain-writing（鎖がき）といひ、學問上の語では

Concatenation といふ。漢詩では白樂天の「遺文三十軸、軸々金玉聲」、李白が「烏夜啼」の一節「碧紗如ㇾ煙止ㇾ梭語。止ㇾ梭悵然憶ㇾ遠人」の如き、或は

看山山已峻、望ㇾ水水仍淸、聽ㇾ蟬蟬響急、思ㇾ卿卿別情。

「望ㇾ日日已晩、懷ㇾ人人不ㇾ歸」「烟離離萬代、雨絕絕千年」の如き、英詩にては

Nerve the soul with doctrines *noble*

*No*ㇾ*le* in the walks of *time*,

Time that leads to *an eternal*,

An eternal life sublime.

の如き、いづれも連鎖法である。但し是等は、うるさく連鎖式を用ゐたもので、連鎖の弊に陷つたものである。

前の例を見ても知られる如く、連鎖法の美は事柄の上、思想の上にあらずして、主として形式の上、卽ち語句排列の上に存する故に、之れを濫用すれば忌味を生ずるけれども、節約して巧みに適所に用ゐれば、言ひ知らぬ趣致を生ずるものである。殊に此の法は說話の上に用ゐて大なる

效力のあるもので、修辭に富んだ演說家は、しば〳〵此の法を用ゐて喝采を博する。例へば「戰爭は決して好ましいものではないけれども、一層好ましからぬ災害を防ぐ手段として止むを得ぬものである。」といふのと、

戰爭は決して好ましいものではない、好ましいものではないけれども、一層好ましからぬ災害を防ぐ手段として止むを得ぬものである。

といふのと、事柄は同じながら、前のに比べて、後の方が面白いのは、連鎖式を用ゐた爲めである。

「彼れはえらい男だけれども、油斷なさるな。」と云はれて戒心せぬ人も、「彼れはえらい男です、えらい男ですけれども油斷なさるな。」といはるれば、さてはと首を捻るであらう。

岡西惟中といふ歌人が、曾て「水風晚凉」といふ題に、

夕日かげ入りにし方は池水のみどり凉しき風の色かな。

とよんで、其の師飛鳥井雅章卿に添削を乞うたが、雅章卿が「入りにし方」を「かげろふ方」と改められたのを見て、詞づかひの雲泥なるに感じたといふ話がある。これは「かげろふ」といふ語が入りにしに比してみやびて口調のよい爲めもあらうが、其の面白味の一部は「夕日かげかげろふ」と、「かげ〳〵」の鎖をなした點にあらう。是等は連鎖法を善用したものというてよい。

昔新羅の國主の子、名は天の日矛といふあり。是の人參渡りけり、參渡りけるゆゑは、新羅の國に一つの沼あり。（「古事記」）

これは、何の曲折もなき只事であるが、「參渡りけり」の尻取によつて文章が面白くなつたのである。

世のさがな口、我れをそしりて、誹謗の聲は、雷とはためき、世の小人の、我れをのろひて、呪詛の毒箭雨と降れども、悠然として、身じろきもせず。（幸田露伴氏「出廬」）

連鎖法を用ゐるに當たつて注意すべき事は、之れを濫用して文字を弄ぶ弊に陷らぬこと、成るべく儉約して適當な場合にのみ用ゐることである。

二四　對偶法

文章の形を整へることに注意した人で、對句の構成に頭を痛めぬはあるまい。文の形式を過重した世に於いては、修辭の精髓は對句にありとも認められた。形式にのみ拘泥して文章を骸骨に

し鬢子の虎にする傾きのある漢文家の之れを重んじた事はいふ迄もない。漢詩に謂はゆる律、排律の如きは、全く語句の對偶を生命とするものである。我が源平時代、鎌倉時代より德川時代にかけての文學にも對句濫用の弊に陷つたものが非常に多く、形式上の技巧を斥ける氣味のある我が現時の文學に於いてすら、此の修飾法は猶ほ盛んに用ゐられて居る。

對偶法は調子の反覆法ともいふべき修飾法で、調子の似よつた文句を並列して並行の美、對立の美を成すものである。此の法はあまねく注意され、多く用ゐられるだけあつて、東西共に多くの名稱が用ゐられて居る。漢文の側では對句といひ、或は對法、對喩、雙綰、駢麗といひ、之れに對して上句下句の相對せざるものを離支、缺偶などいうて忌んで居る。英に於いては Parallelism といひ、また對偶の具合によつて Antithesis（對峙法）Balanced sentence（均衡文）など云つて居る。對峙法とは一文の中に語の對立のあるもの、例へば「甘言は友を作り、直言は友を失ふ。」「春前に雨有つて花の開くること早し、秋後に霜無くして葉の落つること遲し。」の如きをいふ。均衡文とは、形式の同じくして意味の相反した二つの句を含めるもの、例へば「迫害は殘忍なるが故に惡しきに非ず、惡しきが故に殘忍なり。」の如きをいふ。

對偶法はまた、物好きな文章論者によつて、細かにうるさく分類されてある。唐彪の『讀書作文譜』には對法に五つあると云つて、

一曰、正名對――例へば、天地日月。
二曰、同類對――例へば、珠玉丹青。
三曰、借字對――例へば、伍相千軍。
四曰、就句對――例へば、一麾五部餘二十萬一以臨レ民、白首丹心歸二彤庭一而遇レ主。
五曰、流水對――例へば、自レ有二生民一以來、未レ有二孔子之盛一

と說き、弘法大師の如きも、對に二十九種あると云つて管々しく分類して居る。併し是等はいづれも、牽强なる、煩瑣なる、非科學的なる分類で、實益もなく、又感心すべきものでもない。對偶法の種類小分に關しては、二句の對あり、三句以上の對あり、二句以上の對句が一團を成して更に他の一團と對するものあり、同類の事物相對することもあれば、反對の事物の相對することもある、と、これ位知つて居れば、まづ澤山であらう。例へば「棹はうがつ波の上の月を、舟はおそふ海のうちの空を」。「倉廩實ちて禮節を知り、衣食足つて榮辱を知る。」は同類の對偶、「清貧は恒に

樂しみ、濁富ばつねに愁ふ。」「君子の德は風、小人の德は草。」「好事門を出でず、惡事千里を走る。」「倉廩實つれば禮節を知り、衣食乏しければ廉恥を忘る。」の如きは、反對の事物の對偶、卽ち英の修辭論の謂はゆる對峙法(アンチシーシス)である。

對句より成つた文には名句が頗る多い。「煩惱は首に乘る、盃は花に乘る。」「恨の至りて恨めしきはさかりにて親に先だつ恨み、悲しみの至りて悲しきは老いて子に後るゝ悲み。」「山復山いづれの工が青岩の形を削り成せる、水復水誰が家ぞ碧潭の色を染め出だしゝ。」「花下に歸るを忘るるは美景による、樽前に醉を勸むる是れ春風。」「燭に背いては共に憐む深夜の月、花を踏みては同じく惜しむ少年の春。」「水は濕へるに流れ、火は燥けるに就く。」「滿は損を招き、謙は益を受く。」「雨の誘ふや拒まずして花は咲き、風の攻むるや怒らずして花は散る。」「讐には手を以て酬いむと思ふこと多く、恩には口をもて報ずること多し。」此の類ひである。

惡夢を喰ふとは云ひ傳ふれども、獏の糞を見た者なく、家々に敷いて寢れども、寶船に船大工も無し。思ひ付きに形を畫きて身勝手ばかりの心やりなり。(平賀鳩溪『風流志道軒傳』)

梁に嘯くあり、從つて之れを燭せば見ることなし。斯れ鬼か。曰はくあらず、鬼に聲なし。堂に立つあり、從つて之れを視れば見ることなし。斯れ鬼か。曰はくあらず、鬼に形なし。吾が躬に觸るゝあり、從つて之れを執ふれば得ることなし。斯れ鬼か。曰はくあらず、鬼に聲と形となし、安んぞ氣あらむ。曰はく、鬼に聲なく、形なく、氣なくんば、果たして鬼なきか。曰はく、形あつて聲なき者、物にこれあり、土石是れ也。聲あつて形無き者、物にこれあり、風霆是れ也。聲と形とある者、物にこれあり、人獸是れ也。聲と形と無き者、物にこれあり、鬼神是れ也。(韓愈『原鬼』)

韓愈のは三重の對句より成つて居る、三疊對法ともいふべきものである。

對偶濫用の弊、從つて又修辭の弊に陷つたも文の例は、次ぎなる源光行が『海道記』の一節に於いて見られる。

岡部の里邑を過ぎて遙かにゆけば、宇都の山にかゝる。此の山は山中に山を愛するたくみの削りなせる山なり。碧岸の下に砂長うして巖をたて、翠嶺の上に葉おちて壞をつく。肱を背におひ、面を胸に抱きて漸くにのぼれば、汗肩袒の肌に流れて單衣かさぬといへども、懷中の扇を手にうごかして、微風の扶持可なり。かくて森々たる林をわけて、峨々たる峯を越ゆ

れば、貴名の譽は此の山に高し。大かた遠近の木立に心をわけられて、一方ならぬ感望に思ひみだれて過ぐれば、朝雲峯くらし、虎李將軍が栖を去り、暮風谷寒し、鶴鄭大尉が跡にすむ。已にして赤羽西に飛び、眼にさへぎるものとては、檜原槇の葉、老の力こゝに疲れたり、足に任するものは、苔の岩根、蔦の下道、嶮難にたへず。しばらくうち休めば、修行者一兩客、繩床そばに立てゝ又休む。

對偶法を用ゐるについて注意すべきことは、わざとらしい對偶を弄ばぬ事、成るべく節約して適所にのみ用ゐる事、對偶の間に變化あらしめることである。

二五　反覆の利弊と避板の方法

古人云ふ、論には圓轉變化を貴び方板雷同を忌む。篇々一律なるが若きは方板雷同の至り也（劉勰）

同じ語句、同じ調子を繰り返すのは一種の美であるが、過ぐれば五月蠅くなつて忌味を生ずる、而して此の累語累調の忌味を避けるには、反覆の間に變化あらしめねばならぬ。方板雷同を忌み、圓轉變化を貴ぶのは啻に論文に於いて然るのみならず、各種の文章一として然らざるものはない。故に反覆的修飾を用ゐようと思ふ者は、常に反覆の利弊を辨へて、適宜の場合にのみ反覆し、而して反覆の間に變化あらしめることを謀らねばならぬ。反覆の美と變化の美とを兼ね備へむことを工夫せねばならぬ、

まづ反覆の弊の方より見れば、その最も單純なるものは、

同義語の重用　であらう。これは用ゐる損ねの反覆法の一つと見るべきもので、例へば「日日」「新道の道」「八朔のついたち」「彼れ自身の自叙傳」「間違つた誤解」「注意を注ぐ」「成功を奏す」「ト居を定む」の類ひ、英語に謂はゆるトートロジー(Tautology)レダンダンシー(Redundancy)などに當たつて居る。かやうな使ひざまは修辭上より見て非難すべきのみならず、趣味の俗惡なることを白狀するものである。

いろ〳〵の諸人を集め、其のうちに怪しき者を召しとる。（「曾我物語」）

更に汝に授くべき子種一人もなし。（「十二段草子」）

但し玆に同義語の重用にして、理窟上は無用の反覆でありながら、一種の便法として許さるべ

きものがある。世に之れを兩點讀といふ、耳遠き語を耳近き語にて繰りかへすもの、即ち古語を現用語にて繰り返し、外國語を邦語にて繰りかへすもので、

說明的反覆 とも名づくべきものである。例へば「あかの水」「般若の智」「刹土」「あらたかの珠數」といふ類ひで、あかは梵語の水、般若は智、刹は土、あらたかは念珠のことである。

舟航の船海をわたるに必ず橈楫の功をかり、鴻鶴のつる雲を凌ぐには必ず羽鶴の用による。

（『平治物語』）

心覺えの西向きに、千代は合掌手を合はせ、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨……

（近松 粟林子『宵庚申』）

鹽屋には薄き煙靡然となびきて、中空の雲片々たり、濱膠には決れる潮涓滴とたまりて、數條の畝畝々たり。……岬崎といふ所は風飄々とひるがへりて砂をまはし、波浪々とみだれて人をしきる。（源光行『海道記』）

此の法はたま〳〵用ゐて便利なものといふだけで、不斷に用ゐべきものでは決してない。

同義語の重用に次いで戒むべきは、同語の重複である。これは論理上、文法上差支のあるものではないが、變化あり趣味のある文を成すには避けねばならぬものである。例へば、面白い事を並べて寫す時に、達意一遍の文としては、「面白し」の同一語を幾度用ゐてもよからうけれども、美文としては、「面白し」「をかし」「あはれなり」「味はひあり」「心ゆく」「いふに云はれず」「心慰む」等の異辭同義の語をつぎ〳〵に用ゐる方が面白く、「あちらに白旗立ち、こちらに白旗立つ。」と同語を重ねるよりは、「彼方には白旗うちなびき、此方には赤旗ひるがへる。」といふ方が趣あり、「病氣するも面白い、役人になるも面白い。」といふよりは、「病に臥すも妙、吏となるも亦風流。」などいふ方が味はひがある。此の點から見ると、『曾我物語』、『義經記』などを初めとして御伽噺、淨瑠璃本などに「さるほどに扨も其の後」「皆感ぜぬ者こそなかりけれ」「物によく〳〵譬ふれば」「唯だ泣くより外のことぞなき」「流涕こがれ泣き給ふ」等の常文句を幾たびも用ゐたる、馬琴が美人の形容に「らうたけなる」「匂ひこぼるゝ風情あり」等のお箱文句を重ね用ゐたるなど、いづれも好ましからぬ使ひざまである。西鶴の『二代男』に、

源氏物語を借りに遣はしけるに、其のまゝ湖月送られて、即座にその埒もあけし……

とあるが、源氏を湖月で繰りかへした所など、いかにも避板の骨を得たものである。

同語の重複は普通には忌まねばならぬが、故らに同語を重用する場合は此の限りでない。例へば「恨みの至りて恨めしきはさかりにて親に先だつ恨み、悲みの至りて悲しきは老いて子に後る悲み。」

淑き人の良しと吉く見て好しといひし芳野よく見よ良き人よく見つ。（天武天皇）

妻もなし親なし子なし版木なし金もなけれど死にたくもなし。（林子平）

瞞さばだませだまされもせうが、わたしやお前をだましやせぬ。

こは實に我が子なり。子の中に我が手股より生きし子なり。（「古事記」）

の類ひで、一種の強め或は戯れに用ゐるべきもの、用ゐるべき場合に巧みに用ゐれば、相應の効果あるべき修飾である。

二六　平　板

同語重複の次ぎに忌むべきは、對偶の五月蠅く用ゐられることである。之れを平板と云ひ、或は板、呆板、方板ともいふ。同じ調子の句が並び過ぎ、揃ひ過ぎて一本調子になり過ぎた忌味の謂ひである。而して累調の間に變化あらしめて平板の弊を救ふ修飾法を避板法といふ。

平板の忌味は、紀海晋、曲亭馬琴、柳亭種彦等をはじめとして、調子づいた文を書く作家の文章の中に、多く見出だされる。

春過ぎ秋來たれども進み難きは出離の道、花を惜しみ月を詠めても起こり易きは輪廻の忘念なり。罪障の山にはいつとなく煩惱の雲厚くして佛日の光眼に遮らず、生死の海にはとこしなへに無常の風烈しくして眞如の月宿ることなし。生を受くるに隨つて苦に苦を重ね、死に歸るに隨つて暗きより暗きに趣く。六道の街には迷はぬ所なく、四生のとぼそには宿らぬ住家も無し。（一遍上人、法語）

滿仲「いかに仲光。心をしづめて聞き候へ。子供を寺へ登せおくは。學問の爲めにてこそ候へ。明暮武勇を嗜まむには。寺に置きてのかひは何事ぞ。仲光「御諚尤もにて候ふさりながら、折々の御折檻にてこそ候へ。先づ〳〵御佩刀を賜はり候へ。（謠曲「仲光」）

かくてはや、未のあゆみ過ぎにけむ、暮靄になる頃まで、待てども〳〵信乃は還らず。よしや遊びに惚れたりとも、餓ゑなば興も竭くべきに、物をも食はで何處に居る、心得がたきこ

となりと、父尙いへば母はなほ、重き頭を幾遍か、擧けて瞻望むる外面に、板金剛の音すれば、それかとぞ思ふ誑されて、浪速の浦に刈るといふ、人のあしさへ恨みけり。妻が喞てば番作も、立つて見居て見まち不樂て、思はずも嘆息し、わが足舊の如くならば、只だ一走りに走り廻りて、必ず索ねて將て還らむに、日景短き小六月、夕陽を瞻つゝ杖に携りて、何地までゆかるべき、然りとて暮れなばいよ〳〵便なし、菅菰までもと一刀を、挿して竹杖衝きこころみ、はや外面に出でむとす。（曲亭馬琴「八犬傳」）

「候へ」「候へ」の重用も面白からず、七五調も此の筆法でつゞけては、わざとらしい忌味になる。語の數や排列法に一定の規則のある詩歌に於いてすら、だら〳〵の一本調子は見られぬ。散文に於いては尙更のことである。

然らば累調の間に變化あらしめ、同中に異あり異中に同あらしめるには、どうすればよいか。

二七　避板法

同調の句を累ねる際に、其の間に變化あらしめ、平板の忌味に煩はされずして累調の美を味はしめる修飾を避板法といふ。避板の方法に凡そ四種ある。第一は語句前後法、第二は用語轉換法、第三は長短參差法、第四は諸體交用法。

第一、語句前後法とは、語句を前後に置きかへて變化あらしめるものである。例へば、「年々歳々花相似たり」を受けて「歳々年々人同じからず」といひ、「うつし世言ふに足らず」に次いで「いふに足らず現し世」といふ類ひである。俗歌の

花か蝶々か蝶々か花か、來てはちら〳〵迷はせる。

の如き、形式の上から見れば唯だ「花」「蝶々」の二語を前後せしめた所に主要なる面白味がある

というてよい。

第二、用語轉換法とは、同じ事物を言ひ表はすに違つた語を用ゐて變化をつけるもの、例へば、異辭同義の語を用ゐ、異性の品詞を用ゐ、係結を異ならしめ、用語の一部を換へ、或は添詞を用ゐる等をいふ。例へば、

する事、爲す事、いすかの嘴とくひちがふ。

太郎をば賴家といふ、弟をば實朝と聞こゆ。（「增鏡」）

今年の十一月の中の卯の日に、天つ御食の長御食の遠御食と、皇御孫の命の大嘗聞こし召さむ。（大嘗祭祝詞）

山川悉に動み、國土皆震りき。……高天原皆暗く、葦原中國悉に闇し。（「古事記」）

學んで時々習ふ、亦說ばしからずや。遠方より來たるあり、亦樂しからずや。人知らずして慍らず、亦君子ならずや。（「論語」）

春の夜の浪より明けて、かたきと見えしは群れゐる鷗、関の聲と聞こえしは、浦風なりけり高松の、浦風なりけり、高松のあさ嵐とぞなりにける。（謠曲「八島」）

老武者の悲しさは、軍には爲疲れたり、風にちゞめる、枯木の力も折れて、手塚が下になる所を、郎等は落ちあひて、終に首をばかきおとされて、篠原の土となつて、影も形もなき跡の、かげもかたちも南無阿彌陀佛、弔ひてたび給へ、あと弔ひてたび給へ。（謠曲「實盛」）

右のうち、異性の品詞を用ゐるとは、「悅ばし」「樂し」といふ働き語に對して「君子」といふ名詞を用ゐる類ひである。若し「君子ならずや」の代はりに「賢ならずや」といはゞ、變化なき爲めに趣致が乏しくなるであらう。

第三、長短參差法とは、語句を長短うちまじへて變化を添へることを云ふ。前に引いた馬琴の『八犬傳』の一節と、次ぎなる謠曲『徒然草』の一節とを比べて見れば、句の長短參差たることが、如何ほど文を活かし、累調の間に變化あらしめるかがわかるであらう。印のないのは長句、、の印は短句の印である。

よく〳〵聞けばありがたや、今こそ不審はるの日の、光やはらぐ西の海の、かしこは住の江、こゝは高砂、松も色そひ、春も、のどかに、四海波しづかにて、國も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや、あひに相生の、松こそめでたかりけれ。げにや仰ぎても、言もおろかや斯かる世に、住める民とてゆたかなる、君の惠みぞありがたき。（謠曲「高砂」）

寸陰、をしむ人なし。これよく知れるか。愚かなるか。愚かにして怠る人の爲めにいはゞ、一錢かろしといへども、これを重ぬれば貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜しむ心切なり。（兼好「徒然草」）

第四、諸體交用法とは、いろ〳〵な文句の樣式を交へ用ゐて變化をつけることで、例へば肯定句と否定句とを交へ用ひ、平叙、咏嘆、疑問等の諸體を併せ用ゐる類を云ふ。肯定句、否定句の